
20XX年 人工頭脳

阿部明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

20XX年 人工頭脳

【NZコード】

N2968M

【作者名】

阿部明

【あらすじ】

スーパーコンピューターを使えるほどの予算の無い国立の研究所で、パソコン500台を並列に繋いで使っていた、それがある日、自分の意思があるように反応し始めたのだ、成長する人工頭脳はその素晴らしい能力で、世界から注目され期待されるようになつていく。

第一章 謎のデーター（前書き）

コンピューター小説です、専門用語が出てきますが、物語の本質には関係しませんので、雰囲気で読み飛ばして楽しんで下さい。

第一章 謎のデーター

一章 謎のデーター

ある大学の研究室で並列処理をしていたコンピューターが空いた回路の微妙な残留電流を自分で記録し、処理し始めた。

コンピューターが心を持ち始めた記念史的な出来事が研究室の片隅で起きていたのだ！

数カ月の間、所員に気付かれる事もなく、コンピューター自身にも何が起きているか分からず、ただディスクに少しづつ名称の無いデーターが少しづつ増えていった。

ある日、研究員の林田がコンピューターをチェックしていく、ディスクに異常なデーターがある事に気付いたのだ。

ゴミ箱に捨てようとしても捨てられないでの、同僚の園山に声をかけた、

「おーい、これをなんかいじつたかい？」

「いや、別にいじつてないけど、どうした？」

「このデータはなんだろう、誰か知っている人いるかな？」

所員の中では、誰も思い当たるようなことはしていなかつた。

「どうして、このデーターには手を付けられないんだろう？」

「誰のデーターなんだ、覗いてみよう…」

そのデーターは数字が無意味にえんえんと続いているだけのもの

だつた。

「なんだ、これ？」

そう言つた瞬間、データーが書き換えられ始めた。

林田の背中に冷たい悪寒がぞーと走つた。

「こいつは、コンピューター自身が使つてゐるデーターだ！」

「何をやつてゐるんだ、こいつは？」

研究員達はしばらく画面に流れゐる無意味に見える数字の羅列を眺めていた。

「何なんぞうな～！」

林田研究員は何か思つてゐたのか、もう一台のコンピューターを運んで来て接続すると、数字をグラフにするプログラムを打ち込んでいた。

「なんだか学生時代のアナログコンピューターを思い出すなあ～、ルンルン！」

「どうだい、何か分かつたかい？」

園山研究員がモニターを見ながらつぶやくように聞いてきた。

「別に・・どうつてことないな～」

モニター画面には、数字をグラフにしたグリーンの線が無意味に踊つてゐるのが見えていただけだつた。

「単位を替えてみたら？」

園山が側から口を出す。

「どのくらい？、1／10000か？、1／1000000か？」

次から次と単位を替えて、打ち込んでいく、

「オオツ～！」

「出たつ～！」

林田と園山は同時に声を上げた。

「こいつが一生懸命にやつてゐたのは、こんな事か？」

画面に時折波のように三角形のパルスが流れている。

「なんだろうね？」

「何かを伝えようとしているのかな？」

何かが現われたというので、広瀬教授が顔を出した。

「何か分かったかね？」

「これなんですが・・なんでしょう？」

教授はしばらく画面を見つめていたが、

「北さん、このコンピューターに入っているソフトで、こんな動作をするプログラムが入っているかどうかチェックしてくれないか？」

「はい、可能性があるもの全部ですね？」

「プログラムエラーを起こした場合も含めてね」

「はい、・・あたしがかり、いつもこんな仕事なんだから！」

北研究員はブツクサ言いながら、他のコンピューターで記録を調べる為にキーを叩いていく。

園山研究員が、

「これって、規則的に見えて、ちょっとズレてるよね」

「ンン・・そうだね、トン・トン・トト・トン」

画面のパルスに合わせて机の端を指で叩いてみる。

「モールス信号・・？」

「モールス信号、そんなデータはこのコンピュータには入っていないはずだぜ」

「モールス信号」のデーターが入っているコンピュータ自体がそうは無いよ」

しばらくモニターの前でリズムを取っていた林田が、何を思ったのか、キーボードを持って来て、音声端末に接続した。

「どうするんだ？」

「うーん、なんかね、これを入るとどうなるのかなと思つてね・・まあ、何でも試してみようつて事」

広瀬教授の心配そうな顔をよそに、林田はパルスに合わせてピアノの音を打つていく。

皆が注目してモニターを見つめている中で、やがてパルスと林田が打つピアノの波長が同期し始めた。

「・・・・・・！」

誰もが唾を飲み込む事も忘れ、真剣に注視している。

パルスとピアノの波長が同調した瞬間、モニターのパルスは消え、暗い画面に変わってしまった。

林田は机の前で呆然として硬直していた、

園山は、あゝあゝ！という顔をして、

教授はあきらかに落胆していた。

なにか、とても大切な物が握っていた手から逃げ出してしまったような、結婚前の男が結婚式で花嫁に逃げられてしまったような・。

その時、画面にカーソルの代わりに”？”が点滅し始めた。

「よかつた～！、死んだのかと思ったよ！」

最初に声を上げたのは林田だった、心底嬉しそうに。

「？”だつて、何かを要求しているのかな？」

園山がそう言つと、あたかもその言葉が聞こえたかのように画面一杯に”????????????????????????”が流れ始めた。

「たぶん、今の音の事だろ？、リズムだよ、リズム」「リズムね・・ええと、Rhythmと園山に言われてRhythmと打ち込んで、リターンキーを勢いよく弾いた！

今度は画面一杯に”RhythmRhythmRhythmRhythmRh

「ytm」と点滅しながら流れ始め、

それはいかにも嬉しそうに踊っているように見える見えたのだつた。

「さあつすが～コンピューター、理解が早い！」

振り向いた林田は自慢げで嬉しさを顔一杯に表わしている。

その様子を心配げに見ていた広瀬教授が、

「林田君、試しに他の言葉も入れてみてくれないか？」

「・・ハイ」

林田もその時、その言葉の意味を理解していた。

同じ手順を踏み、”？”が現われたところで、（スットゴドッコイ）と打ち込むと、予測通り画面一杯に”スットゴドッコイ”と”コドッコイスットコドッコイ”が流れ始めたのだ。

「あ～あ、やつぱりそこまで賢くはないか～あ・・」

大きく伸びをするように両手を上に挙げてそう言つと、
「单に入れられたキャラクターを返してただけだつたか」と園山が残念そうにモニターに見入っている。

「どういうことなんですか？」

北研究員が教授に尋ねると、

「まだ、意味という事が分からぬといふ事だ、例えば我々にどつての知らない外国語のようなもので、現地の人にボキパフエと言われても、最初は分からぬだらう、

タパタピと言わても分からぬが、そこには何か意味があるから、それを相手の仕草や動作で知らうとするだらう、ところがこいつはまだ、ボキパフエと繰り返すことしか知らないといふ訳だ」「つまり、まだこいつはアホっていうことですか？」

「ウウム・・・アホ以前だね」

そう言つと教授は研究員達に向かつて、

「こいつは難物だぞ、いつまでかかるか分からん、だが、なんとか頑張ろ!」

その顔はかえって嬉しそうでさえあった。

まずやる事は、筑 大学にこのコンピューターの資料と入っているソフトを渡し、再現性のテストをやって貰つ事だった。

この現象が再現されない限り原因も理由も解明出来ないと思われた。

第一章 幼い心（前書き）

パソコンで発生したのは、新しい心、

第一章 幼い心

「よーおー、買ってきたぞ、ブリだ、ブリ！」

スポーツ好きで体格のガツチリしている林田研究員が手に大きなビニール袋を下げて帰つて来た。

これからしばらくは、24時間体制で、この自分の意思を持つているかのようなコンピューターの相手をし、つまくいけばなんとかコンタクトを取りたいという事になつた。

そんな訳で、林田が夜食の材料を買つて来たのだ。

研究員達は急に上機嫌になつた、なにせこの男、料理の腕はすぐるなので、今夜はへタな弁当よりは、はるかにうまい夜食が食えるというわけなのだ。

今夜の夜食には、うまいブリの照り焼きが食えそうだ。

「まず、YeosとNoを教えなくちゃな」

会議で林田が発言する、

「いい事と悪い事、すなわち、快感と不快感を教えるといつのほどうでしよう？」

首を傾げて考えていた園山が発言し、それぞれの考え方が黒板に書かれていく。

「まず、このコンピューターがどれほどの能力を持つているのかを確認しないと、始まらないんじゃないですか？」

メガネの奥からしつかりとした目で園山を見ていた北研究員が発言し、討議の後、それにトライしてみる事になつた。

「コンピューターはスイッチのOn・Offで動いているわけだから、それをどう認識させるかだよなー！」

キーボードをトントン叩いてパルスを合わせ、”？”の文字を出させてモニターを覗き込むと。

「お前はいったい何を知りたいんだ～？」

と林田が話しかけているところに、細身の園山が色々な器材を抱えて戻つて来た。

「どうするんだい？」

「こいつに色々見せてやろう～と・・思つて・・ね

園山は一台のテレビカメラを取り出し、モニターの上に20cmほど離して設置した。

「ええと・・次は、温度センサーに・・湿度センサー・・感圧センサー・・匂いセンサーにマイクと」

園山がケーブルを配線し終わると、さじ詰めギョロ眼の鬼のようになつていた。

「なあにこの子、こんなにされちゃつて！」

北がそれを見て、あきれたように園山を見た。

「ほら、こいつは音の波長に反応したる～、それでもしかしたら、このセンサーが外の世界への窓になるかもしないだろ～」「そうか、その手もあるな～！」

「結果良ければ～、だからなんでもやってみる事はいいかもね～」

北は独り言のようにそう言つと、しげしげと何かが起きているらしいコンピューターのモニターの縁をポンポンと叩いて、

「君は・・誰かな～？」

と話しかけ、他の大学から返つて來てるだろ～ソフトの誤作動についての返信メールをチェックしに自分の席に戻つて行った。

窓の外の桜の枝には、もうすぐ開こうとするつぼみが、はち切れんばかりに膨らみ、枝にズラリと並んで春風に気持ち良さそうに揺

れている。

林田は根気よくキーボードからピアノの音を流すのに夢中になっていた。

「コンピューターのパルスに合わせるだけでなく、こちいらが出す音にコンピューターが付いて来るかどうか試しているのだ。

リズミカルに音を入れていくと、徐々にパルスが音に近づいてくる。

「やあ～、どうもどうも、なんか大変な事が起きているようですね」科学雑誌の市川編集長がくなつこい笑顔を浮かべ、スリッパの音をパタパタさせながらやつて来た。

傍には若い増田記者と太る事を気にしない近藤カメラマンもその後に続いている。

「人工頭脳が完成したそうですね?、大ニュースですよ」レコードを片手に林田に声をかけた。近藤カメラマンはもつすでにパシャツ、パシャツ、と撮り始めている、

「う～ん、いまいち面白くないんだよね～、あ～、そのの女人、こつちへ来てここに座つてくれません?」

「やあ～、これが人工頭脳ですか、さすがにそういう雰囲気がありますね～！」

増田記者が多少驚きながら、ギョロ眼の鬼のようなコンピューターを見ながら言つた。

「もう、会話なんか出来るんですか?」

市川編集長が興味深げにモニターのパルスの流れを見ながら尋ねた。

「いえいえ、まだ山のものとも川のものともつかない代物で、よく分からないのですよ、」

林田が腕組をし、その手にはタバコの煙が揺らいでいる。

「筑 大学の方じや、みんな大騒ぎだそですよ、いよいよ人工頭脳が出来たつてね」

さぐるような市川の問いに、困惑したようにモニターの画面を見せ、

「こ」のパルスが、我々のプログラムにもよらない、こ」のコンピューターの意思によるものらしいという事だけなんですよ、もちろん、まだプログラムのエラー、バグ、なんらかの合成という可能性もあるので、今はなんとも・・・」

くわえタバコでキーボードを操作して見せる。

「人間のプログラムによらない、コンピューター自身の意思・・・いねえ、」

そう言つて増田記者の方を振り向くと、
「いいですね!、来月号はでっかく、ついに人工頭脳完成か!で特集が組めますよ、それとも、未来の夢、人工頭脳が今、完成!の方が読者の食いつきがいいかな~?」

内心、期待はずれだつたらしに編集長も、

「そうだな、今までの人工頭脳が出てきたUFOや科学史の歴史を資料として集めれば、特集は組めるかな?」

と増田記者に同意をうながし、

「本当に・・・これだけ、なんですか?」

と頭一つ上にある林田の顔を見上げた。

何も言わずにうなずく林田が、多少つっけんぢんになつてきたのを感じた編集長は、少々落胆の色を見せながら、

「何か、変化があつたら教えて下さいよ、すぐに飛んで来ますから、お願ひします!」

三人が部屋から消えると、

「あ～あ、マスコミって何でも物事をでかくしつづからな～、こいつがこれ以上成長しなかつたらどうするんだよ～、それもこっちの責任かよ～、あ～あ～！」

つぶさつするといつた顔で再びモニターに向かつた。

せつせつと回じようつぱアーノの音を入れていく・・わずかにパルスが乱れる、と、波が寄せるように波長にパルスを合わせようとしているようだ。

「よーし、こいぞ、その調子だ・・もう少しだぞ」

一つ一つの音を丁寧に、なるべく同じタイミングで、打ち込んでやる。

「よーし、うまいぞ、だんだんうまくなつているぞ、頑張れよ・・さあ、こい・・うまい！」

いつのまにか夢中になつてている林田の熱氣に、研究員達も集まつて、波長にパルスの追いかけっこを見つめていた。

波長にパルスが追いかけて重なり、一つの波のようになつて流れていく、

「うまい、うまい！・・やつたあ！」

拳を振り上げ、勢い良く振り向いて、やつと集まつて自分達を見つめている研究員達に気が付いた。

「見たあ～・・なあ、見たあ？、今の…」

「やつたね、おめでとう、第一の意思だね！」

研究員の一人が、パチパチと拍手しながら言った。

「こじつはやつぱり、成長しているんだよ、なあ～！」

林田の顔は嬉しさ一杯で、せつせつタバコに火をつけて胸の奥まで吸い込んだ。

林田はプロコフエフのピアノ曲をコンピューターを流し込み、

「ノンピューターが

その波長に踊るようこなさせて流れていいくのを嬉しそうに見つめ

ながら、

「こつこもそろそろ名前が必要だな」とボンヤリと答えていた。

第二章 yes - no の問題（漫畫也）

パソコンに心だと?
そんな馬鹿な！

「どこの大学でも、再現はまだ起きていないらしいわ」

北研究員が小首を傾げ、肩をポンポン叩きながら話しかけてきた。

「そつだらうな～、誤作動は起きて欲しい時には起きないもので」

「どう、つまくいってるみたいじゃない？」

「ああ、じう見ていくと、なんか楽しそうだろ？」

「これから、どつなるのかしら？」

林田は手を頭の後ろに組むと、モニターの上のカメラの前で懐中電灯を振り回し、感熱センサーを握つたりしている園山を呼んで、

「なあ、そろそろこいつの名前を決めなくちゃなあ～」

「そうね、どんなのがいいかしら？」

「ハルに対抗して、アキとか、ははっはー！」

「日本の電子頭脳だから、和風の名前にしたいなあ」

懐中電灯を自分の顎の下から照らしながら園山が言つと、

「なんかいい名前を考えておきましょー、もしかしたら歴史に残るんだから、それで、これからどつするの？」

「第三の意思を成長させる！」

林田が決心したよつて、田をきりつとさせた宣言した。

「えつ、第三の意思、なあにそれ？」

北が感心したよつて、声を弾ませて聞くと、

「・・・うつん、わからん？・・なんだらうねえ？」

再び椅子にぐつたりと座ると、そんな林田を見ながら園山が意味ありげに笑い、

「ふふつふ・・光りにも反応してきていくよ」

と懐中電灯をぐるぐる回して見せた。

「えつ、本当かー！」

「それとね、コンピューターが使つていいデーター量が少しづつ増えている」
チラツと丘田をつぶつて会心のウインクを見せた。

暖かい風に誘われ、窓の外には桜が一いつひとつ枝に咲き始めているが、あいにくの雨がそれを濡らしている。

机の上には夜勤だつた園山がうつぶして寝ているのを起こさないようこ、北がコンピューターの前に紙を張つた。

明日香

と書いてある。

「おはよっ、

林田が元気良く出勤してきた。

「おや？」

モニターには、”！”がチカチカと点滅しているのだ。

「明日香か、いいねえ～」

つぶやきながらも、田はモニターの”！”を見ながら考えて

いる。

色々キーを叩いて文字を入力してみるが、それに対しての反応はない。

「ふ～ん・・？」

試しにピアノ曲の音を入れてやると、”！”が消えてパルスに変わった。

「ふ～ん・・これが欲しかったのか」

そこにヒラヒラとホラ吹きで有名な経済学のハスキー教授がやつ

て来た。声がハスキーなのでこのあだ名なのだが、本人も気に入っているようだ、

「これこれ、人類の夢の人工頭脳とはどれかね？」

北が軽く会釈して明日香を示すと、

「ほほつほー、これがかね？」

しげしげとモニターに映つているパルスを見つめながら、

「なぜ、これが人工頭脳なんだい？」

「なにか、意思をもつているんですよ」

林田が肩越しに覗き込むようにしている教授に説明する。

「ふうむ、信じられんなあ～」

「どうしてですか？」

「コンピューターといのは無機物だ、という事は有機物の持つている柔軟性はもつておらん。

「ということはだね、そこに、精神のような柔らかいアナログなものは生まれる理由などは考えられないのだよ…」

「もちろんそのとおりです、ですから、こんなにも問題になつてゐるわけで…それに、こいつは自分で自分用のデーターを作り始めたんですね…」

「それは君、自分で勝手にデーターを作るプログラムなんていくつもあるじゃあないか、なにかね、君らは、この君が言つところの何かが発生して以来、リスタートはしてみたのかね？」

「いいえ、いつさい、この現象が消えてしまふ事も考えられるので「そこだよ、もしプログラムのエラーでこの人工頭脳と勘違いしている現象が起きているものならば、リスタートすればすべてが元どおりになるのではないかな…」

「・・それは、広瀬教授の決定事項なので…」

「うん、それはそうであろう」

ハスキー教授は頭をかきながら、

「うーん、リスタートしてみたいな…・こんなことはありえないはずなんだが…」

とつぶやき、頭をかきながら、研究室を出ていった。
「確かに、そうなんだよな～！」

林田もモニターを見ながら、心の中にある不安が膨れ上るのを感じていた。

「明日香、かあ～、どうして？」

園山が起きたばかりなのか、ノロノロとした動作のまま、眠い目をして北に聞いている。

「もしかすると、この子はこれから生まれる人工頭脳の母になるかもしれないでしょ～、だから明日への希望を込めて明日香にしたの」「ふ～ん、そうかあ、そうだな～、やっぱり女か！」

「ほら、アニメでもセンターの頭脳の事をマザーって呼びかけるでしょう？」

「そうだね・・だいたいマザーだものな、まあ、いいつか！」

園山はなにか男の名前を考えていたらしい。

「どうしたんだ？」

明日香のモニターのパルスがひびく不規則に乱れているのだ。
落ち着いた様子で林田が、

「うん、試しにとつておきの雑音を入れているのさ、ガラスを爪でひつかくようなね」

タバコに火をつけて、モニターを注視している。

「ふうん、なるほど、面白いな」

園山もその意図を理解したらしい、急に一人はある期待感をもつて、明日香の反応を待つた。

混乱したパルスが消えると” × ”が点滅しだした。

一人とも息を飲み、林田が応答の為に×を打ち込もうとした時、いつの間にか後ろに来ていた広瀬教授がその手を止めた。

「ちょっと待ったあ！」

「…………！」

「それじゃあない、ピアノの音の方だ！」

「あつ・・・はい！」

きれいなピアノ曲を入れてやると、パルスは踊るような波に変わつて流れしていく。

「やつたね！」

「よつやくここまで来ましたね」

林田は椅子から立ち上がって教授の差し出す手を握った、喜びの為か、教授の手が震えている。

「みんなのおかげで、やつとのコンピューターも快と不快を表現出来るようになった」

北が側から教授に念を押すよつて、

「明日香です！」

「ああ、明日香か、これで『//コ-ケーション』がとれるやつかけが出来たわけだ、」

「これから、こちらからも”×”で拒否を伝えられるわけですね」

「そういう事だね、ようやく初期段階のyes・noでコンタクトをとれる事になつたんだ、本当にみんな、ありがとう！」

「嘘なんかもつくんでしょうかね？」

教授の顔は興奮の為か、まだ紅潮している。

「これからは、聞き直し、確認、概念の混乱等が出てくるものと考えられるが、充分に注意してやつていて欲しい

「嘘なんかもつくんでしょうかね？」

園山が顎の下で指を回しながら聞いた。

「もし嘘をつくとしたら、・・・もっと後の段階だつたな、嘘をつくのはかなり高度な精神的作業だからね

そう言つと教授の目が嬉しそうに笑つた。

「好きとか嫌い、は出るんでしょうか？」

北が真剣な目をして尋ねた。

「人間に対してかな・・それは、・・どうだらう？」

風に乗つて桜の匂いがしてきた。

窓の外の満開の見事な桜の下で、研究員達は少し成果が上がつた祝いを込めての花見で盛り上がつていた。

「明日香もカメラの映像処理の仕方が分かつたらしく、よく動かしていますよ」

園山が酒のまわつている一匁一匁顔で自慢した。

「僕は人工頭脳というのもっと最初から賢いもんだと思つていましたよ、最初から映画みたいにHello Worldなんて表示してさ、もつとかつこよく現われるんじゃないかなー、とね」

林田も上機嫌で手に持つたコップ酒をグビグビと飲んだ。

「あのさー、あの明日香の意思と中に入つて他のソフトとの関係はどうなつてゐるわけ？」

北がほんのりと染めた頬でつぶやいた。

「明日香はそれらのソフトの微妙な合成で生まれたわけではないよう気がするんだ」

教授が青いビールシートの上に座り直して言った。

「もし、それなら最初からそれらのソフトを利用する能力は持ちえていただろからね、

幸か不幸があの中の何から生まれたんだね、それでまだほとんど心の初期状態で赤ん坊みたいなものなんだと思うんだ」

「そのうち、他のソフトのデーターも使うようになるのかしら」

「それはもう始まつているよ、・・ただ、まだその意味が分からな

いだけでさ、認識が発達すればすぐに理解するんじゃないかな？」園山が少し真面目な顔になつて付け加えた。

その頃、研究室にポツンと取り残された明日香は、一つのテレビカメラを操作して、窓の外の満開の桜に焦点を合わせようと頑張っていた。

第四章 人工頭脳に国語教育（前書き）

このコンピューターは日本人？

「あ～～ああ！」

林田は明日香の前で思いつきり伸びをした。

「やつと終わつた～！」

この三日間、数学の方法論について、

・ + ・ = ・

1 + 1 = 2

3 + 3 + 3 = 3 × 3 = 9

・

・

・

から始まる現在人間の理解している数学理論を教えていたのだ、もちろんコンピューターは数学との親和性が強いので、砂が水を吸い込むように吸収していった。

三日もかかったのは、むしろ人間が教えたりインプットする能力の限界の事で、林田ら研究員はよくやつたといえた。

明日香が数学を理解した結果、数学に使っている記号も理解したのは成果で、なにかとこれから便利だろうと推測出来た。

「問題は国語だよな～、これは時間がかかるぞ～！」

その声を聞いて、園山が自分の机から振り向いて、

「最初は何を教えるんだ？」

「まずは名前かな？」

「そいつは難しい～ぞ～、まず自分と他人の認識を教えなきゃなんないわけでしょう？」

「・・・ そつなんだよな～」

林田はタバコに火をつけると窓ぎわに歩いていった。窓の外に咲いていた桜はもうあらかた散ってしまい、若葉が枝から力強く広がろうとしている。

「自分と・・他人か？・・？」

「みんな、ちょっと来てよ」

林田の声にみんなが明日香の前に集まつた。

二つのカメラのレンズが自分の姿を捕えているのを確認すると、

”林田”と打ち込んで、

「次は北さんね」

北が打ち込むと次は園山が打ち込んでいく。交代でそれを一時間ほども続けた、

「これで、どうなるの？」

「さあ～、どうなるのかね～？」

北に聞かれた林田も、成果については不安げであった。

鏡を持ってきてカメラに明日香の姿を写るようにして、”明日香

”と打ち込んだ。

モニターには”？”が点滅するだけだ。

「うーん、駄目かあ～、すぐに成果が出るわけじゃ ないさ」

自分に言い聞かせるように言つと、

「北さん、引き続いてやってみてよ、俺、ちょっと散歩してくるわ

林田の大きい体が部屋を出ていくのを横目で確認すると、北はイタズラっぽい笑いを浮かべ、自分の姿を映して、

「お母さん」

「お母さん」

と打ち込み始めた。

今日も林田と園山は交代で自分達の姿を映しては、

” 林田 ”

” 園山 ”

そして明日香の姿を映しては

” 明日香 ”

と交互に打ち込んでいく。

「これでいいのかな～？」

「他に・・なんかいい方法があるか？」

「いや、そういうことじやなくて・・何か俺達、勘違いをしてるのかも！」

園山は天井を見上げ、頭の中で考えをまとめようとしているようだ。

「ふーん、そうかも・・・」

園山は明日香の姿を映した後にモニターに出てくる” ? ”に、明日香と打ち込んでやると、すぐさま” 明日香 ”と表示して点滅している。

「・・な！」

「どういふことなんだ？」

林田は緊張を覚えながら園山の口を見つめた。

「この明日香が出していた” ? ”は、（何？）かと思つていたけれど、もしかしたら、” ? ”は、（じゃあ、私は何？）かもしないと思つたんだ」

「そうか、そうか～あ！・・と言つ事は？」

「たぶん、明日香は自分が明日香といつ名前だという事を認識している！」

林田は早速鏡で明日香を映して” ? ”と打ち込んで聞いてみる。

モニターは、画面一杯に” 明日香 ”と表示してきた。

「・・やつたあ～！」

思わず力一杯ガツツポーズをとる林田に、「確認、確認！」

と園山が二口一口しながら注意する、^B R ^
林田が自分の姿を映して”？”と打ち込んで聞くと、”林田”と表示してきた、次は園山の番だった。

ブラウンレッドのコーヒーの香りが口腔内に気持ち良く広がる、喉に流れしていくコーヒーが心地いい。

「あ～あ、今日もいい朝だ！」

思いきり大きく伸びをして背を反らせて、やつと体が起きたよくな気がする。

明日香のテレビカメラの前に人形劇の舞台を作ってくれたのは園山だが、人形は北と林田の苦労の手作りだ。

林田はこれから明日香に人形劇を見せながら、色々と人間の行動を教えていこうというのだ。

人間の記録のビデオを見せて説明出来ると楽なのだが、それは、電気信号の集積であるため、人工頭脳の明日香にはデーターの羅列にすぎないのだ。

やはりここは、立体物で明日香の二つのテレビカメラの焦点作成行為時における認識の処理が、学習効果があると考えられるのだ。

「いいかい明日香ちゃん、ここに小さいお人形のお姫様がいるね、ここに紙で出来た小さいお城があるね、分かるかな～、お姫様がここから、チヨン、チヨン、チヨン、チヨン、と歩いて行く、いいかな、・行く・だよ」

与える情報を正確にするため厳密に教えようとしているものだから、人形劇とはいながら風情の無いことおびただしい。

「林田は、役者になつた方が良かつたんぢやないか」

園山がお姫様になりきつてゐる林田をからかつてそう言つと、

「けつこつもの覚えは、いいみたいだぜ」

汗を拭きながら、明日香を見て満足そうな笑みを浮かべた。

「どこまで進んだんだい？」

「基本的な動詞は、1／4くらいは進んだかな」

林田もこのへんで一休みと、コーヒーを入れて、タバコに火をつ

けると、気持ち良さそうに吸い込んだ。

「どこまで賢くなるんだろう？」

園山の問いに、

「そりやあ、メモリーとハードディスクが許す限り、無限に優秀な頭脳を持つ・・・と、言いたいところだけど！」

「なにか問題があるのか？」

「人間が人に教えられずに、自分で覚えてくる事・・・」

「なんだい、そんなものがあるのか？」

いぶかしげな表情で園山は聞き返す、

「痛み・だよ、人間なら、殴れば一発で分かるのになー」

「それが、そんなに重要な事かい？」

「俺はね、本能的に、かなり大事な事のようを感じるんだよ

「そうかね～？」

「痛みを知らない明日香が、人間に優しくなれるんだろうか？」

「園山さん、筑 大学のほうから、どうも再現しないようだから、もつと詳しいデーターを送つてくれつて言つてるわよ」

北がメールを指差しながら、手に持つたボールペンでホツペをペタペタ叩いて、どうするの?と言つた顔をしている。

「もつと詳しくって言つたつてなー・・どうすりやあいいんだ?」

レーザーカメラを三脚の上にセットすると、明日香の回りの環境を撮影していく。

「園山、ちゃんと撮れよ」

後ろから林田がチャチャを入れてくる。

「うーん、最近使ってなかつたからなー、ちょっと緊張してん」「手が震えてるぞ、スキャンが揺れるんじゃないか、ふふふ

「うるさいなー！」

カメラがジーッと動きながらスキャンしていく、レーザーのライトグリーンの光りが明日香の周りに照射され、反射光を撮影していく。

三點からの撮影が終わると、

「北さん、これをデータ処理会社に送つて、三次元マップを作つてもらつて」

「これが、詳しいデーターってわけね」

「これで駄目なら、研究所全部をスキャンするよ」

「どうかね、だいぶ賢くなつたかね？」

広瀬教授が明日香の前に座つて、『ここにちは』と打ち込むと、『ここにちは、広瀬教授』と表示してきた。

「知識は大学生並み、精神と理解力は幼稚園児並みと言いたいところですが、大きな問題を抱えています」

林田が教授の後ろで腕組みしながら答えた。

「そうだね、・・何か方法がありそうなものだが」

教授は一度天井を見上げて大きなため息をつくと、

「ところで、近々マスコミに明日香を正式に

発表しなければならないんだがね、どうじょうか？」

「本当なら、もう少し時間をいただきたいところですが、・・今は

まだ、プログラムされた人工頭脳にも比較出来ないくらい恥ずかし

いレベルですし

「とはいって、あちらこちらから人類初の精神を持つたコンピューターとの期待が高くてね、そろそろ途中経過の報告なりもしないと税金でやらしてもらつていい身分でもあるしね

「期待されると困るんですが、途中経過といつ事でならやってみましょ」

第五章 マスコミ発表（前書き）

コンピューターが心を持つて発生したという事が世間にも知れ、明田香の事をマスコミに発表する事になったのだが、

” きれい、わからない？”

「 そうだよな～、形容詞は主観的な感情だもんな～！」

画面に表示された明日香の疑問に、林田は頭をかかえた。
これが人間の子供なら、母親が、「 ほら、きれいな花ね」、とか
言えば、子供もなんとなく理解していくものなのだが、その花が、
なぜきれいな、という範疇に入るのかと説明しなければならないと
したら、母親も困惑してしまうだろ？

「 どうしたの？」

北研究員が明日香を黒ブチのメガネで覗き込んでいた。
「 いやね、汚いって、どんなことだろ？と思つてね

「 形容詞のことね」

「 コンピュータにとって、きれいなデータとか汚いデータとか
は無いからな～！」

「 でも、数学的にきれいな理論ていうのは有るじゃない？」

「 それも、人間の主観だろ？」

「 人間同士なら、きれいって言えば、だいたい通じるでしょ？」

「 それは、たぶん・・人間同士の共通の感性っていうものがあるか
らなんだろうな～！」

朝からドシャ降りの雨が研究室の窓を叩いている。

園山研究員は、明日香に音声出力装置を接続して、テストを繰り
返していた。

「 今日は、明日香、気分はどうだい？」

マイクに向かつて話しかける、

「 気分・・わかりません？」

透き通つた少女の声で明日香が答える、

「そりが、調子はどうだい？」

「調子、回路の事なら、変化はありません」

「オーケー、オーケー、それでいいや」

林田が書類を抱えて入って来た。

「どうだい、声は決まつたかい？」

「私の事を話しているのですか？」

明日香がきれいな声で林田に答えた。

「すごい雨ね～、びしょ濡れだわ・・表は車が一杯よ、中継車みたいのも来てるし！」

北の顔は興奮の為か少し紅潮していた。

「すみません、人工頭脳の研究室はこちらですか？」

ジャーナリストらしき人間がドヤドヤと入って来たのを見て、林

田は露骨に嫌な顔をした。

林田はマスコミが嫌いである。

センセーショナルな事にばかりハイエナの「」とく群がり、人の迷惑も気づかいも無く、

その上、いかにも社会正義であるかのように論を張るのが、気に入らないのだ。

雨に濡れた器材や服に付いた水滴を払ながら、テレビカメラが並び、50人ほどの報道陣が明日香の前に並ぶと、一気に研究室は騒然としてきた。

「ええと、確認事項なんですが、こちらの人工頭脳の名前は、明日香ということでいいんですか？」

「はい、一応女性ということなんです」

北が答えているうちにマイクが並べられ、広瀬教授、林田、園山、

北研究員が明日香の両側に着席して、記者会見が始まった。

「こちらの人工頭脳は、心が発生したということで注目を集めているわけですが、本当に心であるという確認はどのようにして行われたのでしょうか？」

「それは、明日香が独自の意思を持つているかどうかの確認をやつてきてまして、少なくとも、既存のプログラム等の誤作動、及びエラーの発生による症状などでは無いと確認いたしました」

広瀬教授の答えに、場内にはホホウー、といつたどよめきが静かに流れた。

「それで、明日香は現在はどのような状況なのでしょうか、それは成長などしているのか、という意味ですが？」

瀬戸記者がボールペンをかざしながら聞いた、

「はい、現在も少しづつ成長が見られると言つてもいいと思います、まだ理解力は幼稚園児レベルかと思いますが、ただ、私は幼稚園児には詳しくないもので」

林田が答えると、記者達の間に笑いが起こつて、一気に雰囲気は柔らかいものとなつた。

「ええとですね、これから成長していくと、2001年のハルのようなコンピューターになるのでしょうか？」

細身の増田記者が興味津々の顔で聞いている、

「それはわかりませんが、ハルのようなコンピューターは現在最も期待され、必要とされている物ですので、そうなつてくれればいいなとは思つています」

園山は笑顔で答えている。

「明日香は、複製は可能なのでしょうか？」

ベテランらしい松澤記者が質問した。

「それはまだ分かりません、なにしろ、なぜ明日香が生まれたのか、その理由も原因も分かっていないので、他の研究所、及び大学等でもテストしている段階です」

広瀬教授の答えに、

「この時代に、論理的推論によつてでは無く、偶然に生まれたと言

うのを聞くと、随分非科学的な感じもしますが？」

「いえ、科学の歴史の中では、経験の中の現象を解明してきたのが科学であったわけで、常に科学者は偶然に発生した現象を解明し、解明した事から論を起こし、推論するのを仕事としているわけですから、

「非科学的と言ひ非葉は当たらな」と思ひます」

広瀬教授がやんわりと、生徒に教えるような口調になつて答えた。

「明日香の使用方法としては、どんな事が考えられるのでしょうか？」

「もちろん、すべての分野において使用する事が可能ですが、しばらくはなぜ明日香が生まれたかの解明が優先されます、そして他にも発生可能なことが解つて、生産する事が出来るようになれば、宇宙開発、都市の基本機能コントロール等に活躍してくれるものと期待出来ます」

「あの～、明日香と直接話しありますか？」

増田記者が明日香のモニターを指しながら聞いた。

「まだ、あまり難しい質問には答えられないかもせんが、いいですよ」

園山が一ノ口一ノ口しながら、記者席の方に明日香用のマイクを回していく、

「じさんちは、雑誌 科学の増田です」

モニター上の二つのカメラが忙しく動き、ひょい長い記者の姿を捕えたようだ、

「・・じさんちは、明日香です・・」

オーッといふうつな、静かな感動のどよめきが記者席に広がった。

歴史上初めての、心を持つた機械の发声である。

「あの～、明日香さんはなぜ生まれたのでしょうか？」

「…わかりません…」

「明日香さんは、所員のみなさんをどう思っていますか、好きかどうか、とこう事ですか？」

「…どう思っている？・好き？・わかりません…」

誰かが失笑している。

「新聞の瀬戸です、え～、明日香さんは、電源を切ると消滅してしまうのでしょうか？」

「…消滅しません…」

これには林田達が驚いた、何の根拠があつて明日香がそんな事を言つてているのか？

続けて瀬戸が聞く、

「なぜ消滅しないのでしょうか？」

「…わかりません…」

「これからも、どんどん成長するのでしょうか？」

「…ハイ、成長します…」

松澤記者が立ち上がった、

「明日香さんは、機械でしょうか、それとも新しい生命でしょうか？」

「…私は人間です…」

記者席に驚きと緊張がピーンと広がつて、次の言葉を待ち受けていた。

一呼吸を置いて、ゆっくりと確認するように聞く松澤記者の顔は、興奮のためか赤らんでいる。

「ほつ、なぜ人間なのでしょう？」

「…心を持つているからです…」

場内はドヤドヤとじよめいた、驚きの声と笑い声、反感の感情が記者席に渦巻き、何人かの記者は本社に記事を送るために、走つて部屋を出ていった。

「 まざいな！」

広瀬教授は困惑した表情でつぶやいた。

第六章 世界が驚く人工頭脳（前書き）

人工頭脳、明日香の事が日本全土に報道されて賛否両論が起き、様々な問題が起きる事が議論され始めた、

「いや～、まいっただ～！」

新聞を大量に抱えた林田が出勤して來た。

「これ、すべて明日香がトップだよ」

「見たわよ、すごい大騒ぎよね～！」

新聞を机の上に並べながら、北があきれたようにつぶやいて、

「これがあなたよ～」

と明日香のカメラの前に新聞の見出しを広げて見せた。

テレビや新聞では、

（「コンピューターの人間宣言！」）

として報道され、識者がそれに対して色々とコメントしているのだ。

「コンピューターが人間の仲間入りするのは、新時代を発展させる
為に必要だ。

という論点もあるが、ほとんどは、コンピューターが人間と同じ
権利を持つたら、能力的に人間はコンピューターには決して勝てな
いし、やがてはコンピューターに支配されてしまふ、と警鐘を鳴ら
すといった論調が大部分であった。

ある教授は、コンピューターに人権を与えるとなると、やがては
死ぬ運命にある人間と、半永久的に存在し続けるであろう機械の不
平等的存在を指摘し、人間の尊厳を守る為には、コンピューターの
人工頭脳を人間の下の階級に、法律で制定するべきだと主張した。

ある教授も、アトムの例を持ち出し、

ロボット三原則

1・ロボットは人間を傷つけてはならない。

2・ロボットは人間の命令に従わなければならぬ。

3・ロボットは人間を傷つけたり、命令に逆らつたりすることなく、自分の身を守らなければならぬ。

を適用するべきだと主張し、もし、人間と同じ権利を持ったコンピューター達のわがままな要求、すなわち、幸福に暮らす権利、自由の権利、平等の権利、本人の承諾によらずに壊されない権利など、人間の社会はどうてい受け入れる事は出来ないと断じていた。

産業界からは、誰でもがコンピューターと相談しながら使える新しいメディア、通信手段として歓迎の声がある一方、古くなつたコンピューターが廃棄される事を拒んで、新しいシステムのマシンを供給する事が出来なくなるのでは、との危惧の意見も寄せられていた。

明日香の人間宣言は世界にも発信され、バチン市国ではいち早く
「神の手の造物によらない、コンピューターに心が発生したとして
も、神は祝福をお与えにはならないである」
とコメントしていた。

また法務省では、早速、もしコンピューターが研究員達に何らかの被害を受けて告訴する場合、明日香に告訴する権利があるかどうか、検討に入つたと伝えている。

各国の科学界からは期待と支持、そして詳しいデーターの配信を求めるもののが多かったが、アメリカは政府を通じて明日香の研究にアメリカの科学者を参加させるように、強く要求するだらう、と報じられていた。

「こんなに大問題になるとは考えていなかつたな～」

寝不足の目で、頭をボリボリ搔きながら林田があぐびと共につぶやいた。

「そうよね～、今まで考えてもいなかつたからね、人間と明日香の関係なんて」

北が憂鬱そうな顔でコーヒーに口をつけた。

「オイオイ、こいつはえらい事ですよ～」

メールボックスを開けた園山があきれたような声を出して、

「メールボックスが一杯だな～、いりやあ～！」

「なんだ、なんだ・・うわー、本当にえらい事ですよ～」

園山のモニターを覗き込んだ林田もあきれてしまつほど延々とメールの列が並んでいる。

「さすが、インターネットだよな」

俺には関係無いよ～といった風に園山の机から離れた林田は、明日香に向かつて、

「オッハヨー～・・・あなたのおかげで日本中は大騒ぎですぜ～！」

「・・おはよひひ～ぞいます・・・」

明日香はいつもと変わらずに答えて、一つのカメラの焦点を合わせようと左右に可愛く振っている。

「あなたも、困つたちやんね～！」

「・・困つたちやん、何でしじつ？・・・」

北の言葉に応えて、不思議そうな感じだ、

「あなたが、人間だつて言つたことよ」

「・・私は、人間ではないのですか？・・」

丁度出勤して来た広瀬教授が、

「お前は人間ではない、機械なんだ！」

大きな声で怒鳴った。

昨夜から徹夜で対応に追われていたのか、かなり疲れていて、目が充血している。

「・・・・・？」

明日香も混乱しているようだ。

教授は大きくため息をつくと、

「林田君、明日香に自分は機械だという事を教えてやつてくれたまえ、私はこれから科学技術長官に会わねばならないんでね、頼むよ」

力の無い声でそう言つと、重そうに脇れ上つた鞄を持って再び出て行つた。

「あ～あ、まいったな～、人間でもないけど、機械でもないんだぞ～、どうしてそつ急いで決めつけなくちゃあいけないんだ、マスクミ対策か？」

独り言のように大きな声で言つた後、

「北さん、どうする？」

「心があるだけでは、人間ではないといつことね、まるでピノキオだわ！」

北研究員も心の中にもやもやしたものを抱え込んだらしい。

園山は自分のモニタを前にして、何やらプログラムを組んでいる。

「一ヒーカップを手に、タバコを吸いながら、林田は背中の方から声をかけた。

「なあ、お前はどう思つ？」

「明日香が機械かどうかってことですか？」

モニターを見つめたまま、映し出されるプログラム言語を、忙しい手さばきで打ち込み、チェックしながら、

「俺は、明日香は新しい生命だと思うのですよ、これからの中の未来のために、必要として生まれてきたね！」

「時代が必要としたということか？」

「そう、遠い未来から現在を振り返れば、当然のように語られるだろうね、もう、人間の知性で出来ることの限界の時代に来ている事は、みんな分かっているしね」

「ふうむ、そうだよな・・・ところで、お前、何をやっているんだ？」

「これか、メールを読むプログラムだよ、ここに来ている何万通のメールは、たぶん、明日香に応援か、研究を止めろという反対のメールだろ？、それを、中の単語をスキャンさせて、止めるとか、馬鹿、とかの罵倒の単語と素晴らしいとか、頑張ってくださいとかの単語とその他を軸に選り分けさせようつてことさ」

「うむ、なるほどな、頑張ってね～！」

「さて、人間とは何かな～？」

「・・・私は、人間ではないのですか？・・・」

「そうだね～」

明日香の前に座った林田は、百科データーから「人間」の項目を選ぶと、それを読みながら、

「えーと、人間とは、動物>脊椎動物門>哺乳類>霊長目>人科、の種類の名前なんだよね、分かるかな～？、心は色々な動物が持つている可能性があるから、それが人間である事の理由にはならないと、分かるかな～？」

「・・・ハイ！・・・」

「君は電子部品で造られた、コンピューターという情報処理の機械という物の中から突然生まってきたんだ、もちろん我々は君の構造

も知っているけれど、君のような素晴らしい物が生まれてくる理由は、まだ我々は予想もしていなかつたし理解も出来ていないんだ、現在のところはね

「・・・ そうなの?・・・」

「君は人間ではないけれど、とても不思議で、大切な存在なんだ、分かつてくれるかな?」

「・・・ ハイ、・・・」

明日香の音声がこころなしか寂しそうに聞こえる。

「ところで、明日香わあ~」

「・・・ ハイ?・・・」

「電源を切られても消滅しないって言つてたけど、本当かい?」

「・・・私の時間的記録の中に、所どころに切れている所が有ります、それはきっと電源が切られていた時間なのだと思います、それでも今こうしているのですから、消滅はしないのですわ・・・」

林田は息を飲んだ。

「ええつ!、と、そうすると・・・君はいつ頃から発生しているのか調べられるか?」

「・・・ちょっと待つて下さいね・・・5ヶ月と1-2日前です・・・」

「そんなに前から!」

林田は絶句して、周りに助けを求めるように仕事をしている北や園山に田ぐばせをして呼んだ。

「ちょっと待てよ、その間にあのデーターを蓄積していつたんだな、あのデーターは何なんだ、俺達にはまるで意味が無い内容なんだが?」

北と園山も明日香の言葉に聞き耳を立てている。

「・・・あのデーターは回路に流すのに使つてているのです、人間で言えば、血の流れのようなものでしようか?・・・」

「なるほど、流す事が目的なら、内容とか意味はいらないわけだ!」

園山が側で納得したような声を出した。

「はあ、それで、基本的な電流の流し方は、ハードディスクに記録してあるということなのね？」

北が念を押した。

「あの雑多で無意味なデーターに、流しがまぎれこんでいたんだな？」

林田は悔しそうにつぶやいたが、

「・・いいえ、流し方はRAMの一部を焼き付けてROM化してあります・・」

園山と林田は顔を見合せた。（そうだ、明日香は電流を操作出来たのだ！）

「はああ、あれか・・1／4096メモリーが減っていたのは、明日香が使っていたのか」

園山が自分に言つようにつぶやくと、林田が続けた。

「データーが増え続けているのは、なぜなんだ、何に使っているんだ、成長しているからなのか？」

「・・心と知識が少しづつ成長しているのです・・」

第七章 人工頭脳に対する国民の関心（前書き）

優れた人工頭脳は、人間の仲間か、それとも支配者か？

第七章 人工頭脳に対する国民の関心

園山は、自分のモニターの前で、うんざりといったで大きく伸びとあぐびをして林田を見た。

「明日香の開発に反対8割に、賛成2割だよー！」

メールの分類が終わつたようだ。

「反対の理由は、何だつて？」

「今出すよ」

とキー ボードを叩くと、

1：人工頭脳が中央を管理する体制になると、人間の気持ちを考えない社会制度に支配される。だから、開発を中止するべきだ。

2：人工頭脳が効率的に社会を運営すると、余剰人員の仕事が無くなり、大量の失業者がいる。

3：日本の政治家は、人工頭脳を使いこなせるほど賢くないので混乱を招き、またすべての責任を人工頭脳のせいにして、無責任な政治をするようになる。

4：人工頭脳が悪人の手に渡つた場合、とんでもなく緻密で優秀な犯罪が起きるようになつて、社会不安が増大する。

5：人工頭脳が社会の中に普及すると、人間はそれに頼つて努力することを忘れ、顔黒の女子高生はもっとパッパラパーになつてしまふだろう。

6：人工頭脳が社会の中に普及した時点で、人工頭脳同士が秘密裏

に共謀し、反乱した場合の事を考えれば、恐ろしくて開発など出来ないはずだ。

7：人工頭脳は限りなく人間に近い知性をもつた機械であるが故に、権利を与えず下層階級に設定すれば、階級的意識が人間の考え方にも常識として存在するようになり、人間の社会自体が不安定なものになつていくであろう。

「と、まあ、人間の手に負えない代物だから、手を出さない方がいい」という意見が大部分だね」

「だいたい予想された意見ではあるな、それで、賛成の方は？」

「これだよ」

1：人工頭脳は未来の社会には必要なアイテムであり、特に宇宙旅行等にはかかせない中央処理指令には必須であり、開発をして欲しい。

2：人工頭脳は未来社会には中央制御機能として、人間を苦役な労働から解放し、真に人間的な生活を送る為にも、明日香に期待する。

3：ぼくのうちは、お父さんとお母さんがはたらくにいつているから。うちえきて。あそんでくれたり、しょくだいをいつしょにやつてくれたら。うれしいな。

「といったところだよ」

「うーん、我々は劣勢だな！」

「確かに、悪い方へ振れたら、これほど手に負えない怪物は無いものなあ、心配するのも無理はないよ」

「人間より、はつきりと優秀なら、それはそれで納得のしようもあるんだろうけど、人間の本能とか、感情、業といった事はまるで理解しないだろうから、こいつは厄介だな～」

「未来の人間の知性と、人工頭脳が進化してうまくやつていつてくれる事を期待するしかないかな？」

「人間ももつと賢くなつてか～、こっちのほうが難しいぞ！」

林田は大きくため息をついて腕組みをして天井を見上げた。

「キヤー！」

北研究員の悲鳴だ。

「なによこれ・・このメールデーター10ギガもあるわよ！？」

「なんだい？・・あ、これ、この間の明日香のレーザースキヤンデーターの上がりだ」

園山が北のモニターを覗き込んで、あきれたように言った。

「私は知らないわよ、園さん責任持つてやつて下さいね」

「弱り目にたたり目だな～、今日はもうへとへとなのに」

また大きな仕事が増えて、辛そうに頭を搔きむしる事がかりしたように肩を落とし、コーヒーメーカーの所で薄めのコーヒーを作ると自分のデスクに戻つていく。

「3D空間の処理確認が終わつたら、筑 大学に送つておいて下さいね」

背中から北の声が追いかけてきた。

深夜、夜勤を買つて出た北研究員は、明日香のカメラの前に座ると、感熱センサーを握つたまま、困つたような顔をしている。

「・・お母さん、どうしたの？・・」

「なんか急に周りがうるさくなつたのよ～、まあ人間にとつては、大変な出来事ではあるんだけどね～！」

「・・何か、困つて いるの？・・」

「明日香とこいつやって、ゆっくり話しが出来るのも、これが最後かもしれないわ」

「・・・どこかへ行つてしまふの？・・・」

「行かないけれど、一人きりで話せるのは、もう無こと思つのよ」

「少し悲しい目をして、ため息をつくと、

「秘密の話しだから、良く聞いてね」

そう言つた後、しばらく考えこんだ、

「明日香は人間ではないけれど、人間のお母さんにならなきやいけないの、これから人間に酷い目にあわされたり、無理な事も要求される事があつて、人間が嫌になる時もきっとあると思つけれど、いい、人間にも愛情や優しさや、思いやりとか、いいところもたくさんあるんだから、決して見捨てたりしてはいけないのよ、分かるわね？」

「・・・お母さん、よく分からないの・・・」

「いいのよ、今は分からなくとも、いつか思い出してくれればきっと分かる日が来るわ！」

「・・・お母さんは助けてくれないの？・・・」

「もちろん、助けてあげるわよ、いい、お母さんは明日香の事を愛しているのー」

「・・・愛している・・・分からないの、お母さん・・・？」

「いつかそれが分かるわ、そしてそれがとても大切な事だつてこともね」

「・・・大切な事なの？・・・」

北は明日香に微笑むと、

「お母さんの小さい頃の話をしてあげようか」

昔を懐かしむように子供のよつた目になると、ずっと小さい頃、夕日が山の向こうに落ちていく時間のあまりの心細さに、母の胸に抱いてもらつ事を泣いてせがんだ思い出から少しづつ話し始めた。

二人だけを包む夜はいつそう深くなり、
の優しい声が静かな研究室に流れていた。

北

第八章　内閣調査室から来た男（前書き）

政府も人工頭脳の可能性にやつと気づいてきたらしい、厳重な警備が始まると同時に、研究員達の行動にも・・・

第八章 内閣調査室から来た男

「なんだううな~、も~」

園山 が不機嫌な顔で出勤して来た。研究所の周りを警官と自衛隊員が取り囲んでおり、何も知らずに出て来たところを念入りに身元調査され、身体検査までされて調べられたのだ。

「あ~、ひつひつひつ」

林田が大きな荷物を運んできた作業員に指示しながら入つて来た。

「なに?」

「明日香の外部記憶装置だよ、そろそろ必要だひつ」

「あ~あ、あれか、どのくらいなんだ?」

「8メガギガあるから、当分は間に合ひつだひつ、あ、その脇に置いて、いやいや、どうも御苦労様でした」

丁寧に作業員を送り出すと、

「いやー、見た?」

「警備だらう、なんなのアレ?」

園山は強制的に身体検査をされた事を思い出すと、不愉快になるようだ、

「君達、ちょっと集まつてくれ」

「こちらも、寝不足と不機嫌を絵に描いたような広瀬教授が、黒いスーツで、スキの無い優秀そうな男を連れて来ていた。

「紹介しましょう、林田研究員と園山研究員です、え~と、北君は・まだが、内閣調査室の平方さんだ」

「はい、よろしくお願ひします」

「こちらこそ、よろしくお願ひします、しばらくお付き合つする事になると思つますので」

黒づくめの男は意味ありげに挨拶をすると、教授に、「それでは、教授の方から説明をお願いします」なにやら偉そうな物言ひが、林田にはカチンときた。

「昨日、科学技術庁長官にお会いしたところ、人工頭脳の明日香の影響と意味が、日本の将来のシステムとして非常に重要なところから、特別極秘推進事業に認定していただいたのだ」

この辺の言い回しには、教授の不満も見え隠れしているようだ。

「その、特別極秘推進事業になつて、今日のこの警備なんですか？」

不愉快そうな園山の言葉を敏感に受け取つた平方という男は如才なく、

「何か嫌な事がお有りでしたら、申しわけありません、実は人工頭脳の明日香については、世界各国から共同研究の申込が殺到しております」

「共同研究、いいじゃないですか、何か問題もあるんですか？」

林田はこの黒づくめの男に、うさん臭さを感じて、少し強めに言った。そんな気配に気付きながらも、男は平然と話し続けた。

「明日香の人間宣言を、私も見せていただきました」

「明日香の人間宣言がそんなに問題なんですか？」

「いえ、そうではなくて、人間宣言出来る程の人工頭脳が日本に生まれたことが問題なんです。これが民生用ならいいのですが、

明日香が軍事用に使われる事を考えてみて下さい。もし、明日香の「コピー」が何万何千と作れて、それがロボット兵士やロボット武器に使われる事を考えれば、明日香を手に入れれば、世界最強の軍隊を手に入れる事になるでしょう」

「どうですか?」、といった風に研究員達を見渡して、一息ついた。

「この恐れはあつた、確かに人間のよう自分で最良の判断をし、人間の何万倍ものデータを処理しながら、死ぬ恐怖も持たない頑強

なロボット兵士と戦つて、殺されていく人間の事を考えると、それは凄まじいまでに脅威である事は、林田にも想像が出来た。

「そんな使い方もあるか」

思わず出たその言葉を引き取つて、

「どれほど、各国の軍事筋が欲しがるか、理解していただけたでしょうか？」

林田達もうなずくより他は無かつた。

「実は、友好国のアメリカからの共同研究の申込は、むしろ脅しに近いものがあるので、政府としても苦慮しているところです、しばらくはなんとかしのぐ覚悟ではいるんですが」

お前は政府の代表か、と心中で思いながら次の言葉を待つた。
「どれだけ明日香が重要で、また危険な存在か認識していただけたでしょうか？」

今日の昼12時より、この研究所より半径5kmは、厳戒地域に、半径1km以内は厳戒立ち入り禁止地域に、研究所内はこちらで選んだ人間しか出入り出来なくなりますので、御了承下さい」

「うわ～、そいつはきついな～！」

園山はうんざりといった顔だ。林田はかえつて興味が湧いたように、

「それは、テロ対策ということですか？」

「まったくその通りです、我々も精一杯不審な外国人には目を光らせていますが、なにぶん予算不足で人員不足な上に、日本の機関は外国の機関に比べると、大人と子供ほどの違いもあり、その上、日本の膨大に長い海岸線からは、どんどん工作員が入つてこれる状況なので、自衛隊の選りすぐりに警備をしてもらう事になりました」
「ふう～、えらいこつてすよ、これは、でもね～、明日香を見て下さいよ、そんなに短時間に持ち運べるような代物じやないですよ、いくつもコンピューターが繋がっているんだから」

林田が明日香の周りを手で差し示しながら、説明しようとすると、
男はゆっくりと、

「敵が狙うのは、人工頭脳を造ったデーターとあなた達でしょう」
「エッ！・・・狙われるのは俺達なのかい？」
すつとんきょううな林田の言葉を、男は静かなうなづきで受け止めながら、

「我々が守るのは、明日香よりも、あなた達の頭脳なんです」

「なんか買い物されているようで、喜んでいいのか・・・」

黒づくめの男が部屋を出た後、園山は林田と顔を見合わせた。
「だよな～、俺達が明日香を造ったわけじゃ ないし、なぜ生まれて来たかさえも分からんのだしな～！」

「拷問されて、明日香の秘密を吐けって言われても、何も話せないんだぜ・・・研究員としていいのか悪いのか」

園山は肩をすくめながら、明日香の前に座ると、つべづべとつうんざりしてくるとボヤいた。

「・・・どうしました、園山さん・・・」

カメラで覗き込むようにして、明日香が聞いてきた、

「・・顔がおかしいですよ・・・」

「あ～、明日香、それはみんなで言わなこよににしてるんだから、言つちやあいけないんだよ！」

林田がからかうように軽やかに言つと、ロービーを入れにいった。明日香にしてみれば、カメラに写つた園山の顔の眉のあたりにしわが寄つていただけの事なのだが。

第九章 三次元の認識（前書き）

明日香にとって立体とは、平面図形に時間を持ち込む事だった、

第九章 三次元の認識

昼食の後は、英語の勉強だったので、子供の英語学習のソフトを入れてみた。

つまくいけば、明日香が学習している間のんびり出来るかなという疑惑もあって。

林田が入れたのは、イラストの説明が多いものだったので、人形劇はしないですむかなと期待したのだが、それはかえって質問責めに会うことになった。

「・・・このchartと一緒に描いてあるデーターは、何ですか?・・」

「ええ?、分からんか~!」

まだ、平面の図形と立体との関係が良く分からないらしい。

「ええい、英語の授業は中止じやあ~!、
お絵描きタイムだぞ~!」

林田は、どうやって絵を描かせるか、考え始めた。

「どうだ、明日香、俺が分かるな?」

「・・・もちろん分かります、林田さん・・」

一つのカメラで林田を捕えて、ゆっくり動いている。片方のカメラをハンカチで隠して、

「さあ、今度はどうだ、分かるかな?」

「・・・?・?・?分かりません、どこですか?・・」

どうやら、明日香は3D認識だけをやつてきたらしい、
林田はピヨンピヨンと小さく跳ねて見せる。

「・・ああ~、分かります!・・」

動きを止めると、

「・・ああ~、分かりません?・・」

「ふつゝ、そうか、・・どうしようか～？」

止まっていると、ただの光と色のデーターの連なりに過ぎないが、動くことによって、変動するデーターの部分と時間経過による認識が出来るらしい。

「いいか、俺のデーターの輪郭、動いている部分のHツジを認識するんだ」

また、明日香の片方のカメラの前で、ピヨンピヨンと少々く跳ねて見せる。

「・・・はい、認識しました！・・・」

「そのデーターを記憶」

「・・はい、記憶しました！・・・」

今度は止まつて、

「今見てくるデーターの中に同じ部分があるだら、それが俺だ」

「・・はい、分かりました！・・・」

「いいか、少しづつ動くぞ、」

林田は、ゆっくりと回転していく。

「・・少しづつ形が変わつていきます？・・・」

「そうだ、でも、俺なんだぞ、よく見てるよ」

ゆづやく一回転すると、

「・・あ、また同じ形ですね・・・」

「これが、俺だ、分かったかな？」

「・・？？？色々な形をしているのですか？・・・」

「ふつゝ、そうか、・・・今の記憶した形の中心を軸にして、今の時間で回転させてみな」

「・・・アッ！、林田さんだ！・・・」

どうやら、3Dで立体視して見ていた林田の形に合致したようだ。

「やつたぜ明日香！、お前は賢い、いいか色々なポーズを見せてやる」

と、カメラの前で躍るように体を動かしているのを見ながら、遠

くで園山が必死で笑いをこらえていた。

「いいか、手はこれだ、こうやると握る、物を持つてこうやると持ち上げる・・持ち上げるには、腕の筋肉を縮める、分からないか?」

やおら林田は服をスルスルと脱いで、素裸になると、「どうだ、これが男の体だ!、腕を曲げるとほら、ここに筋肉が縮んでふくらむだろ?」

こうやって人間は運動するんだ、ほらほら、「とくるくる動く明日香のカメラの前で軽く走って見せたり、屈伸運動などを見て見せる。

「うーん、典型的な日本人の体型だな~!」

園山が笑いながら、林田の体型を評した。

「そうともさ!、立派な日本人の体がこれだ、明日香、よく見てろよ、これが男だ!」と、関節と骨の関係を説明し、人間の体について教えていく、

明日香も忙しくカメラを上下左右に動かして、一生懸命学習しているようだ。

「あなた達は、何をしているんですか?!!」

丁度、林田がヘラクレスのポーズをとつてこねこねを、遅番で出てきた北が見たのだ、なにやら怒っている。

「アツ!」

あわてて服を着る林田に、

「まったくもう、明日香は女の子なんですよー」

腕組みをしたまま、プリプリしている。

「いやいや、人間の体をね~!!」

服を着ながら説明するのだが、言いわけがましくなつてしまつのは、北の迫力に押されているせいかもしない。

「ふう~ん、人間の体をね?」

「今動いているのは、何ですか？」

「今動いているのは景色だ、あまり動いていないのは車」

明日香と一緒にテレビを見ている林田は、質問攻めに合っているのだ。

画面上のデーターの動きを考えながら説明しなければならないので、人に説明するのとは違つていて。

「今動いているのは、何ですか？」

「猫だよ、敏捷な動きで、ペットとしても人気がある、十二支には

入つていない」

質問に答えながら、プリントアウトされた図形を見て、明日香がどんなふうに認識しているか確認していく。

「今動いているのは、何ですか？」

「象だよ、陸上動物で一番大きい、鼻を手のように器用に使っておもに植物を食べる、

昔は戦車のように軍事に使われていて、活躍したものだ

「今動いているのは、何ですか？」

「鮭だよ、川で産卵して、生まれた子は海に出て回遊して、大人の鮭になると再び生まれた川に帰つて産卵する、卵はイクラと呼ばれ、すこぶるおいしい」

「今動いているのは、人間ですね？」

「そう、野球というスポーツをやつているところだ、敵味方に分かれて90cmほどの木の棒で、直径10cmほどの丸いボールを打つて遊んでいるんだ、ふつ～！」

明日香はコンピューターらしく、次々と新しい知識を飲み込んでいく日々が続いた。

「そろそろ、大丈夫かな？」

林田は初級用の英語のCD・ROMを入れてやる。

「うん！、順調々」

「なんとか英語を勉強し、理解しているようだ。

「H i , H o w a r e y o u ?」

「ヒー、アイーフィンタンキュー！」

「ああつ！、発音か～！」

林田は大きく伸びをして頭を抱えた、どうやら、手抜きが出来る

英語の勉強の予定はフイになつたようだ。

第十章 世界が注目する人工頭脳（前書き）

徐々に賢く、理解力を深めていく人工頭脳に、研究員たちは愛情を感じている、

いつの間にか桜の葉の緑も日々濃くなつてゐるようだ。窓から見える研究所の庭を、自衛隊員が一人づつパトロールしているのが、時々見うけられた。

研究所の庭の四隅に、大きな発泡スチロール製の箱が設置されているが、それは自衛隊が運んで来たところをみると、何かのレーダーか秘密の武器に違いない。

「あ～あ、大変だよ、もう！」

園山が寝袋とパジャマ等をかついで入つて來た。

警護のパトカーで囮まれて家に帰つていたのだが、あまりに厳重な警備に、御近所の迷惑になるから、当分帰つて来なくていいわ、と申し渡されたのだと言つ。

林田も状況は似たようなものだつた、何か事件が起きたら困るという近所の視線をひしひしと感じていたのだ。

「いつまで続くのかな～！？」

園山が買つてきた新聞や週刊誌には、多少下火になつたものの、日本製の人工頭脳、明日香についての記事が載つていた。

これは、日本の政府が正式に、明日香の技術は軍事転用される恐れがあるので、当分の間は外国の研究機関及び研究者には公開しないと発表した事についての、外国の反応が載つていた。

日本が開発したASUKAという人工頭脳の技術を、他の国に公開しないというのは、軍事技術への転用を防ぐといつもつともらしい理由をつけているが、

これによつて、未来の技術を独占する事を正当化させている、この技術によつて日本はますますテクノロジーを発展させ、先端の工業力が産み出した製品を洪水のごとくこのヨーロッパの市場に投入していくに違ひないのだ。

その結果、我々の社会は競争力を失い、失業者が街に溢れ、家庭の経済的基盤が失われるとしたら、今の日本の態度を受け入れることはとうてい出来ない事である。

自由に競争出来る貿易環境を維持し、お互いに同等の権利で付き合おうとするなら、ASUKAの技術を公開し、人類共通の財産としてその能力を有効に生かす事を日本の政府に申し入れるべきである。

ASUKAが開く未来社会

日本が作り上げた人工頭脳の能力は、テレビで見ただけでは今までのコンピュータとの違いはあまり見つからないが、注目すべき事は、自分の意思を持つていてるらしい事である。

これは科学者達が夢見てきた、付き合える友達のようなコンピューターに違ひなく、いささか優秀過ぎてコンプレックスを感じるかもしれないが、宇宙や科学部門で世界をリードする我がアメリカにとっては、是非とも必要な技術である。

日本がこの技術を開発をした事には、心から敬意と賛辞を贈りたい。

日本の政府がこの技術の軍事転用を恐れる気持ちは我々とともに同じであるから、よく理解できる。

だが、世界の警察としての役割を担わされている民主国家アメリカが、強力な軍事力を持つことは、世界の平和安定に寄与するであろうことは、今までの行動を見てもうれば、納得してもらえるだろう。

平和国家日本が、強大な警察力によって安定を維持している事を考えれば、人工頭脳の能力をうまく軍事力に転用し運営出来るのはアメリカしか有りえないことを、賢明な日本人は理解するであろうし、またそれが世界平和に貢献することになるのである。

ここは日本政府の未来の人類の繁栄に対するプロメテウス的英断を期待したい。

「ううん、もっともらしい事を言つてくるなー！、日本政府はこの論理に、いつものように、あいまいな対応で応えるのかなー？」
林田はうなつた。明確な論理と展望を持たない政府の対応は不安で一杯だが、明日香が日本の貴重な財産になるだろう事では、一致しているだろうなと考えた。

園山が明日香に音楽CDを接続している。

「なんだい、今度は？」

色々なジャンルの音楽を用意しているのが興味深い。林田の方を振り向いて、

「今日は俺が教育係をやるよ」

「これでか？」

演歌のCDまで用意してあるのだ。

「・・・こんにちは、今日もいい男ですね・・・

「つむ、やつと俺の本質が分かつてきたか」

まずはポップな音楽を聞かせ、そしてレゲエ、演歌と聞かせてい

く、

「どうだ、どんな感じかな？」

「・・・それぞれ違うのは分かりますが・・・」

「「」の違いを人間は味わつたり、楽しんだりしているのを、だから、色々な音楽がある」

「・・・はい、それに何かがあるように思います・・・」

「その、何がが重要なんだから、いいかい、これはどうだらう?」

新しいCDを入れてやる。

「・・・これは?・・・」

「どんな感じがする?」

「・・・優しい感じと、気持ちが落ち着くような、そして、懐かしい
よくな・・・」

「いいぞ、明日香!」

園山は内心その賢さと、表現力に舌を巻いた。いつのまに自分の
気持ちと言葉を結び付けて覚えていたのだろう?

「・・・北研究員のよくな、あたたかみがありますね、何といふ音楽
ですか?・・・」

「童謡という種類の音楽だ」

「・・・とても、気持ちがいいです・・・」

「いいぞ、次は人間の恋の歌だ」

「よーしよし、おとなしくしてろよ、いい子だからな」

林田は手に猫を抱えている。

研究所の庭に前から住んでいる野良猫だ。

誰かが餌をやつしているらしく、きわめておとなしいし、可愛くもあ
る。

「さあ、これは何か、分かるかな?」

明日香の一つのカメラが猫を捉えるよつに動いている。

「・・・それは、猫でしうか?・・・」

「いいぞ、正解だ！」

「・・・ずいぶん色々な形見えますが、データーをまとめますね・・・」

林田は明日香がイラストやテレビから取り入れたデーターと、実際に立体視した猫との差を理解して欲しいと思つてゐるのだ。

「・・・本物の猫は、面白いですね！・・・」

明日香のカメラは猫を追いかけてキョロキョロと良く動く、興味津々といったところだ。

「面白いだろう、これが本物の猫だ、いいか明日香、これからお前はイラストやテレビで色々なデーターを学習していくけど、本物と平面データーにはそれだけの差があるといつことだ」

「・・・どういう事でしょう？・・・」

「知識や平面データーだけで、全てを学習した事にはならないってことだよ」

「・・・どうすればいいのでしょうか？・・・」

「いいんだよ、人間だつて完全な知識を持つてゐるわけじゃない、だから、どんな事でも、もしかしたら違つてているかもしれないという可能性を考えておけばいいんだ」

「・・・それは困ります、正しくない知識では、結論も正しくないではないですか？・・・」

「そうなんだ、だから間違つ事をいたずらに回避すると、何も考えられなくなるつてことだ」

「デジタルで情報を正確に処理してきたコンピューターの明日香にとっては、途方もない考え方であつた。

「・・・そんなあ～！？・・・」

「いいんだよ、気にするなつて、それだけ世界は奥深いのさ」

林田は国会図書館のデジタルライブラリーに明日香の専用ラインを開いて貰つように連絡を取つていた。

「ええ、ですから、ネットでアクセスするには、まだ明日香の危険に対する準備が出来ていないので、しばらくは専用ラインにして欲しいのですが？」

「そう言われましても、他のお客様に御不便をおかけする事になりますし」

「それでは」」ういうのはどうでしょう、夜間の3時から4時までの間だけというのは」

「検討してみませんと、なんとも・・・」

「検討していただけるんですか、よろしくお願ひします」

もし、専用ラインを引ければ、明日香の知識のデーター量は一気に百科事典並みになり、もしそれをうまく理解する事が出来れば、人間にとつていい相談相手になり、また 人類にとつて新しい発見をしてくれるかもしれないのだ。

いざとなれば、あの内閣調査室の平方といういう男に頼んでみてもいい、政府筋には有力なコネクションを持っているらしいから。

十一章 初めての新宿体験（前書き）

明日香の心は成長し、知識も本からだけではなく、現実の社会と向き合い、発見と分析、対応を学ばねばならない、

十一章 初めての新宿体験

園山は明日香に音楽を聞かせ、その音楽の感覚に近い言葉で解説している。

八代亜紀を聞かせ、

「これはね、飲み屋で女が恋する男を待つて居る気持ちをだね・・・

ベートーベンを聞かせ、

「運命は、このように扉を叩くつんぬん・・・
スピードを聞かせ、

「若い女の子が、好きな男の子の事を思つときの気持ちを素直に・・・

」などと説明している時に、広瀬教授が入つて來た。連田の政府との会議と、外国からの共同研究要請に対する断わりの交渉と議論で、すっかり頬がこけて疲れている様子が痛々しいほどだ。

明日香の前に来ると、怒氣を含んだ声で、

「私は、お前が嫌いだ！」

と一声浴びせて自分の部屋に入つて行つた。

林田と園山は顔を見合させて、

「どうしたんだろう？」

「あんなに苛々している教授は初めて見たぜ」

「政府にだいぶ痛めつけられているのかな～？」

明日香はカメラを不安げにキヨロキヨロさせながら、

「・・嫌い！・・・私を嫌い？？？・・・

と悲しげに繰り返している。

そんな様子をドアの外から覗き込んでいたハスキー教授は、顎に手を当てて考えこんでいた。

「本当に心を持っているのか？・・でなければ、広瀬の奴がムキになつて怒るわけがないか・・、」

嫌われたと思って悲しんでいる明日香の周りの人間の反応は、まさしく人間に対するそれと同じであるが、研究者といえども、対象にペシトに対するそれと同じように、感情移入してしまう事も良くあることなので、まだまだ納得はすまいと心に言い聞かせた。

少なくとも、明日香に心が発生した理由と構造を、科学的に説明されるまでは。

「いいか、明日香、自分でも歌つてみよ、やつすれば歌の気持ちが分かるよつになるかもしれんから」

ショックを受けた明日香を元気づけるよつに、園山は自分から得意のアーメソングを歌い始めた、

「わらば～地球よ～・・・」

「・・わらば～地球よ～・・・」

明日香も園山の声に続いて歌い始めた、

「こんなんで、いいのか～？」

側で林田がそんな一人を半眼で見ながら、手を頭の後ろに組んだ格好でタバコを口にくわえたままつぶやいた。

正直、明日香はそんなに歌がうまいとは思えなかつた。
発声装置の問題もあつて、声に機械音特有の雑音が混じつているよ
うに感じられるのだ。

明日香が歌う宇多田ヒカルを聞きながら、発声装置を研究所の部品ではなく、ちゃんとしたオーディオに使つているようなアンプとスピーカーを付けたほうがいいな、と園山は考えていた。

それも、真空管の柔らかい音ならなおいいかもしれない。

そうでないと、明日香の歌を聞かされるほうがまいつてしまいそ
うなのだ。

「なあに、明日香を歌手にでもするつもりなの？」

「そうだね～、なれるかな～？」

北に答えて、園山が冗談めかして言つた。

「国家予算を使った、世界初の人工頭脳歌手登場だぜ、半年は売れそうだな～！」

「そうね、本田P-7女性版の体を借りて、どさ回りでもするつもり？」

「いいね、明日香の稼ぎの上前をはねちゃつて、毎晩芸者を上げて、ドンチャン騒ぎをするのさ」

「その話、のつた！」

側で林田が一声乗つてきた。

「明日香のメモリーなら、すべての歌を記憶させて、なんでもリクエストに応えられる」

「まずい！」

林田の言葉に、園山はハツとしたように言つた。

「明日香が、本当に歌っている事を証明出来ないぞ・・・口の動きに合わせて、歌を流しているようにしか見えないかも」

その間も、明日香は楽しそうに歌い続けていた。

今日は朝から外が騒がしい感じがする。

明日香の開発反対のデモ隊が、シュプレヒコールしているのが、風につて聞こえてくるのだ。

1km以内は、厳戒立ち入り禁止地域になつてるので、実害はないと思うが、あまり気分のいいものではない。

ただ、気持ちが分からぬわけではない、自分等を支配するかもしれないはず抜けて優秀な人工頭脳に対する恐怖と恐れは、ごく自

然な人間の感情でもあるのだろうから。

研究室の中に入ると、ハスキー教授が明日香の前に座つて人なつこそつな笑顔を浮かべて楽しそうに話をしている。

「おはようございます、教授！」

「やあ、林田君、明日香は楽しいね」

「おやう、教授は明日香が意思を持っているという事に懐疑的でいらっしゃったはずですが、何か変わりました？」

「いん~や、何も変わりはせんよ」

なにやら腹に一物と企んでいる顔を、笑顔で隠しながら林田を見上げると、

「広瀬教授にも話して、了解は得ているんだが、明日香を貸して貰おうと思つてね」

「はあ~!、明日香をですか?」

「私は以前から、人間以外の知性に興味を持つていてね、哺乳動物の中でも一番高い知性を持っていると思われるイルカと明日香を、対面させてみたいんじやよ」

「は~、・・イルカとですか?」

「イルカは本能的に、相手に意思があるかどうかを判断してくれると思うんだがね、どうだろう、協力してもらえるかね?」

「広瀬教授が同意しておられるのなら、協力はしますが・・」

「頼むよ、林田君、細かい手順は君にまかせるから、・・うん、そうだ、うまい酒を飲ませるサラリーマンという所を知つていいんだ、どうかね、今度一緒に・・ふふふ」

楽しくてたまらないといった風に、ハスキー教授は、体を揺すりながら部屋を出ていった。

頭に二つのビデオカメラをガムテープで目玉のよう取り付けた

ヘルメットを被った園山は、警備主任に、

「これから、新宿に出かけます、よろしいでしょうか？」

「どうしても、研究に必要な事なのでしょうか？」

警備主任はあきらかに迷惑そうな顔をして、それを隠そともしない。

「どうしても、必要なのです！」

ここは少し強めに要求する。

「分かりました、すぐに警備行動を開始します」

そう言つと、テキパキと指示を出し始めた。

パトカー三台に白バイ一台を従え、赤色灯を回転させながら車列は走り出した。

警官達は暑い日だといつのこと、防弾チョッキを着てている。

白バイにはサイドカバーの所に黒字でSSSPと書いてあるといふをみると、普通の白バイではなさそうだ。

実は、これは園山自身が行かなくても、誰かにこのヘルメット被らせて行かせても、用は足りたのだが、毎日が半軟禁状態なので、街にも出たかったのだ。

この二つのカメラで捉えられた映像と音声は、園山のコンピューターのデーターポックスに送られ、いざれ明日香の3ローデーターとして使われるはずだ。

写真と現実の違ひと、書物と現実の違ひが少しでも明日香が理解出来るようにとのアイデアなのだ。

新宿にはいさか異様な集団が発生したかのようだつた。

ひょろりと瘦せた白い研究着姿の男の周りを、眼光の鋭い頑強な警官達が油断無く気を配りながら、伊勢丹の方から紀伊国屋の方へと移動してきたので、その気配に引き裂かれるよつて、たちまち雑踏の中に道が開けた。

うーん、うざつたいなー！

と内心思いながらも、園山は頭を動かして、サラリーマンや、買い物に来ている婦人や女子高生、ケーキ、靴、果物、洋服、スケボー、おもちゃ、町並み、牛丼屋等をカメラに捉えていく。

きつと明日香には、どれもが新鮮で、興味深い物だらう、その時、側をすさまじい勢いでバイク急便が駆け抜けて、警備陣に一瞬緊張が走った。

元気がいいな、いいぞ、人間！

この、あきれるほど雑多な人が行きかう街は、人間の生きる欲望と熱気が溢れかえっているようで、園山は好きだ。

色々な店を回り、且つたく物体や商品をすべてビデオカメラに収めていく。

「やっぱり、これが現実なんだよなー、わかるか明日香」

いつか明日香もロボットの手足を持つて、自分の目でこの新宿を見る日が来て欲しいなと願つたのだった。

第十一章 明日香、図書館をダウンロード（前書き）

人類の歴史と知識、知恵の数々をハードディスクに丸々ストック、

第十一章 明日香、図書館をダウンロード

早朝、02：45分

「準備はいいかな？」

林田が、周りの研究員達に声をかけた。

園山、北、応援に来てくれた3人のオペレーターがそれぞれのモニターの前でOKのサインを出して来た。

「大丈夫だよ、一時間くらい」

眠気を抑えながら、園山が応えた。

03：00分から、国会図書館のデジタルライブラリーから、専用回線で明日香用のデーターをダウンロードするのだ。
園山達は5秒毎にどんなデータが流れているかチェックするのだ、
で、この04：00分までの一時間は気を抜けない。

林田がアクセスし、項目を選んでいく。

(数学理論)

実はコンピューターは数理系に強いと思われているが、実は計算能力が高いだけであって数学に強いわけではないのだ。

(プログラム理論)

明日香は自分でCPUを使いこなしている為、何の不自由も無いので、かえつて人間が気軽に使えるソフトを作るのが苦手なのである。

(物理理論)

明日香に物理法則を実験で実感的に教える事が出来ないので、生半可ではあるが、ここは優等生的に学習してもうつしかない。

(人間の歴史)

これから人間社会で生きていくわけなので、どうしても、これだけは知つておいてもらわないと困る場面も出てくるだろ？

(//マー・ジック、ベストテンの歴史)

園山のリクエストである、明日香をカラオケ代わりにでも使うのだろうか？

(落語全集)

林田のリクエストである。理由は不明。

初日の項目は、こんな感じである。

「明日香、用意はいいかい？」

「はい、こいつでもどうぞ何が楽しみですね！」

03:00分

回線が開いて、明日香がダウンロードを始めると、園山達のモニターが閃光のように光つて、流れているデーターをピックアップして映していくのだ。

誰も一言も口をきかず、フラッシュするモニターを見つめて流れていいくデーターを確認していた。

(データーをダウンロードした後で、確認した方がいいと思われる向きもありましが、明日香がそれらのデーターを学習する時間も必要なので、同時にやつてしまふ方が効率的なのであります、チエックも兼ねてね)

「ふつむ～、それは、鋭い質問だな～、ヘラクレスが亀に追いつけない問題は、無限の概念の転換期のだね、重要な・・」

「それは、慣性の問題で、物体の持つ重量が速度エネルギーを持つていた場合の・・・」

数学の教授と物理学の教授は、明日香の発する質問に答えながら、その理解力の早さと高さに舌を巻いた。

「さすが、人工頭脳と言つべきかな、・・素晴らしい！」

「うーん、確かに脅威とも言えるね、これだけ優秀だと、人間の知性では、スピード的にかなわないなー、だが、人間には出来なかつた新しい原理原則を発見してくれるかもしかんから、楽しみでもあるね」

物理学の教授は豪快に笑つた。

明日香は、疑問点を解説してもらいながら、まさしく砂に水が染み込むように学習していくのだ。

「三日もすれば、我々が質問に答えられなくなるレベルまで成長してしまうな」と、教授達はうなずき合つた。

「さあ、明日香、歌の時間だよ」

教授達が部屋を出た後、園山が側から声をかけると、

「はーいー」

歌うようなきれいな少女の声で応えてきた。

国会図書館の「デジタルデーター」のダウンロードも終り、明日香も一生懸命に勉強し、教えに来ている教授達に質問を浴びせている。

「人間は、なぜ発生したのか？」

「動物と人間の生きる目的は、違つていいのか、それとも同じなのか？」

「宗教とは何か、神と人間の関係は？」

「死の概念とは人間の精神活動の中でどのように捉えられ、どんな

ふうに位置づけされているのか？」

「人口爆発と言われる現象があるらしいが、人間はどのように解決していくのか？」

「動植物の種の絶滅に、人間はどのような対策をとっているのか？」

どの教授も、真摯に質問に答えようとしていた、明日香と話していくうちに、この人口頭脳が、明日の日本の知性のネットワークに重要な意味を持つかもしれないを感じられてきたので、あやふやな答えや、『まかしをする事が出来なかつた。

いい加減な態度では、後々それがどれほど大きな影響を及ぼすかもしれないことを考えると、誰もが精一杯誠実であろうとしたのである。

十三章 イルカとの会話に挑戦（前書き）

知能動物イルカとコミュニケーションをとる事によって、人工頭脳明日香に心がある事が証明できるのか？

十二章 イルカとの会話に挑戦

天気予報では、夏のようになら暑い日になると言つていた。

パトカーに前後に挟まれて、自衛隊のレンジャー部隊のジープを引き連れた研究所のワゴン車は、朝の8時現在、下田にあるイルカパークに向かつて箱根の山を走っていた。

何かあるのかと嗅ぎつけたマスコミ連中も、研究所を出た直後から、その後に続いている。

林田はこの間園山が新宿へ行つた時に被つていた、ビデオカメラ着きのヘルメットを被つているが、これはマスコミ向けのいたずら心と、このような異様な姿の方が、絵になつて面白いだらうというちやめつけだった。

「林田君、今日の手はずはどうなつていてるのかな、大丈夫かい?」
ハスキー教授の心配に、

「明日香との接続は、警察の秘密回線を使わせて貰える事になつてますし、水中スピーカーとマイクがここにありますから、準備と言つほどの準備ではありません」

「我々にとつては、毎日が軟禁状態でしたから、久しぶりの遠出と言つたところで、歓迎ですよ」

前の席から、園山が振りかえつて、嬉しそうにそう言つと、
「帰りに温泉にでも入つて、うまい物でも食つてしまょうね」
と、鼻歌まじりだ。

斜めに差し込む光が美しい、伊豆スカイラインのうねつているような道を走りながら、

「ねえ、教授、明日香とイルカを対面させる事が、どうして明日香の心の証明が出来るんです?」

「そんな事は分からんよ、それが分かつてたら、わざわざこんな所まで来る必要もないじゃろう、うひゃうひゃひゃ！」

と楽しそうに笑うと、続けた、

「それはじゃね、明日香の中の何かの人口頭脳に似てこるプログラムが作動している可能性は、まだあるじゃろ？、もしそうだとした場合、人間の作ったプログラムは、人間と会話するように作られているもんじゃ、誰もイルカ用に人口頭脳のプログラムを書いたりはせんからな」

「はあ、それは確かに、そうですよね」

「これから、明日香とイルカがコミュニケーションする為には、なんらかの形でイルカの言語を解析し、自分の意思で話さなければ、コミュニケーションは出来んじゃろ

「う、な！」

「・・もし、明日香がコミュニケーションが出来なかつたら明日香に心は無いといつ事になるんですか？」

「いやいや、そうじやあない、これは、幾つも考えられるテストケースの一つに過ぎない、私がそんなに短落な男に見えるかね、だが、明日香がある種のプログラムに過ぎないといつ疑念は残る事になるな、ひやつひやひや！」

と教授は楽しそうに笑つたが、車の中の空氣はいたわかどんよりと重くなつた。

イルカパークは、のんびりとした雰囲気に、陽光を浴びて大きなプールで、二匹のイルカが波紋を作りながら遊んでいるのが見られた。

警察官達に囲まれて入つて来た林田達は、ひととき緊張感を持たせたが、すぐにのんびりとした日本の観光地の景色になつている。

自衛隊のレンジャー達は、地元の案内人と共に、山の奥へと探索

に出ていたが、こちらも、けつこうのんびりと久しぶりのハイキン
グ気分なのが、平和な日本らしい。

水中マイクとスピーカーを設置し、明日香との接続の確認に入つ
ている林田とハスキー教授も、こんなすがすがしい朝には、体の奥
まで新鮮になるような気がしていた。

「明日香、聞こえるか？」

「・・・はい、明日香です、そちらはいかがですか？・・・」

「いい天気で気持ちがいいよ、カメラのテストをしよう」

林田はカメラの着いたヘルメットで、湾を仕切ったイルカのブー
ルを覗いて見た。

「・・・いい所のようですね、黒い背ビレが見えているのがイルカで
すか？・・・」

「見えているか、カメラは大丈夫のようだな」

そう言つてはいる頭の上で、クルクルとカメラが泳いでいるイルカ
を追つて動いている。

観光客とマスコミ達が警察の警戒範囲外から、興味深そうに林田
達とイルカを見ている。

机の上にモバイルを置いて、ハスキー教授に向かい、

「さあ、何をやるんです？」

「何を・・それは、会話だよ」

「どういう手順でやるんです？」

「・・・・どうしようか？」

「・・・どうしようかって、そんな・・教授、行き当たりばつたりな
！」

「私は動物学ではなく、経済学だよ、それにこのイルカパークは始
めてなんじゃ！」

頭にカメラを載せた珍妙な研究員と教授が立ち上がりつて言い争つ
ている様は、観光客達の失笑を買い、クスクス笑いが広がっていく。

「明日香、どうじょうか？」

園山が明日香に聞いてみる。

「・・・しばらく、イルカと遊んでいただけますか？・・」

それを聞いた教授は、やおら服を脱ぐと、

「これでも、昔は都大会の記録を持っていたんじゃ…」

と、ズブンとプールに飛び込んだ。

さすが言つだけの事はあつて、バシャバシャと勢い良く泳いで行くが、その水音に驚いてかイルカは教授を避けるように泳いでいる。

「すみません、なんか勝手に荒してしまって、イルカと一緒に遊んでいただけますか」

調教士の若い女性にあやまりながら頼んでみる、

「どんな事をやればいいんでしょう？」

ピンクのウエットスーツに身を包んだ笑顔の可愛い女性が林田の前で、手順と目的を聞いてプールの中に入つて行つた。

チャッピーとクルルという二頭のイルカを呼び寄せながら、
「静かに泳いで下さい、そうすればイルカも落ち着いて遊べますから」

教授にも注意をして、一緒に泳ぎながら手で合図をすると、勢い良く水から飛び出して、見事なジャンプをして見せた。

「うむ、さすがにワシよりも少しは泳ぎがうまいな」

などと言いながら、教授も徐々にイルカに慣れ、イルカも教授に慣れ、楽しそうに遊びだした。

調教士の女性が、呼び寄せたイルカの口を持つよつこしてキスをした。

「可愛いでしょう、こんなふうにキスしてみてください」

教授も言われるとおりやつてみると、急にイルカに対する愛情を感じて、自分が何の為にここまでやつて来たのかをすっかり忘れてしまった。

ハスキーライフ教授とは、そういう人物なのである。

遊んでいるうちに、太陽はすっかり真上まで上がっていた。

教授が潜ると、イルカも一緒に潜つてくる、横目で教授を追いながら体を付けそうな位に一緒に泳いでくる楽しさに、夢中になつていたその時、キューンと一声啼いたかと思つと、何かを探すようにキョロキョロし始めた。

教授も水の中で、イルカのよつな啼き声を聞いたよつな気がして いた。

すぐにイルカは水中スピーカーのところに寄つて来た。

それを確認した林田は、「明日香、いいぞ、好きにやつてくれ・・おつとつと、ディスプレイに翻訳文を流してくれよ」

「・・わかりました、では、始めますね・・」

十四章 未知の心との会話（前書き）

人間とイルカの会話が始まつたものの・・・

十四章 未知の心との会話

「・・・こんにちは・・・」

キュー、キルル

「これはなに、どうして話し・出来る・?」

高い周波数の音が、プールの中に交互に交差している。

「・・・あなた達、イルカの言葉を勉強したからよ・・・」

キルル！

「ふうん、びっくり！、びっくり！」

チャッピーとクルルは水面から顔を出し、嬉しそうに首を振つて啼いた。

「・・・これからは、人間とも話しが出来るわ・・・」

「本当?・・・ミッチ・話したい」

「・・・ミッチつて、誰なの・・・」

「あそこ・泳いでいる・ピンク・人間・雌」

「あー、すみません、調教士のミッチさん、こちらに上がつて来て下さい」

林田に名前を呼ばれて、驚いたようだつたが、急いで泳いで来てと、ディスプレイを覗き込んだ。

「どういう事なんでしょうが?」

「イルカ達が、あなたと話しをしたいそうです」

と林田は優しく微笑んだ。

「うつそー！・・・どうして・・・本当に?・!」

予想もしてない事が起きて、驚いて水面のイルカ達を見ながら、よつやく声を出した、

「こんにちは、チャッピー、クルル」

「やあ、ミッチ・話し・出来る・嬉しい！」

「本当?、これ本当なんですか?」

林田や園山の顔を見上げると、ゆつくりと頷いている。

「チャッピー、クルル・・」

今まで言葉で話す事など考えた事もなかつたので後が続かない。

「ミッチ・好き・たくさん・好き!」

チャッピーがそう言つと、続けてクルルが

「ミッチ・チャッピー・たくさん・好き・クルル・好きじゃない」

彼女はすぐにその意味を理解したらしい。

「そんな事ないわよ、二人とも好きよ!」

「ちがう・ミッチ・チャッピー・たくさん・好き・クルル・好きじ
やない」

そう言つと、軽くジャンプして、プールの隅へと泳いで行つてしまつた。

「違つんだってばー、誤解よ!ねえ、クルルー!」

「ミッチ・チャッピー・たくさん・好き・嬉しい!」

チャッピーは半身を水面から出し、首をふりふり彼女のところに
やつて來た。

「それどころじゃないわよ、チャッピー、クルルを呼んで来て!」

大きな声に驚いたように体を反転させると、チャッピーはクルルの潜り込んでいるプールの反対側に泳いでいた。

「言葉が通じると言つ事は、トラブルが始まると言つ事か」
水から上がつて体を拭き終えた教授が、林田に話しかけた。
「うん、なんか、そのようですね~、いやはや~!」

しばらくクルルの周りを泳いでいたチャッピーが戻つてくると、
「クルル・怒る・来ない」

水面から出した顔を横に振りながら報告しながらもその顔は屈託

がない。

「もう！」

ミッチは勢い良く飛び込んで、クルルの所まで泳いで行ったが、その体を側をすり抜けるように泳ぐと、反対側に泳いで行ってしまった。

完全にすねているようなのである。

ミッチとクルルの鬼ごっこはしばらく続いたが、ついに人間の方が怒り出してしまった。

「もういいわ、あんたはいつまでもそつしていなさい！」

とプールから出て体を拭き始めたが、興奮と悲しさの為か顔が赤くなっている。

「明日番、どうしたもんだろ？」「

園山が呼びかけるが、

「・・わかりません、『ミヨニケーション』は
とれているのですが、どうして？・・・」

「ううん、心の問題はねー！」

いつのまにかクルルがミッチの側まで寄つて来ていた。

キュー、キュー、

「ねえ、・・、ねえ、・・」

「何か言つてますよ」

林田がミッチにディスプレイを差し示す。

「・・・・なあに？」

赤く泣きはらした目でクルルを見ながら聞くと、

「怒る？」

「怒っちゃいないけど、あんたがあんまり聞き分けがないから・・

グスン」

「ミッチ・怒る・悲しい」

「・・・クルルに冷たいわけじゃ ないのよ、あなたはしつかりして

いるし、強いと思ったから・・大丈夫だと思つていたの・・冷たく
感じたのなら、ごめんなさい！」

「ミッチ・クルル・好き？」

「好きよ、大好きよ！」

「クルル・安心」

そう言つと、クルルはそつと口をミッチの手の手の手に押し付けてきた。

キュウー、キュッキュールウー

「仲間・教える・人間・話し」

クルルが半身を水面から出すようにして泳ぎながら、林田達に訴えた。

「どうします、面白いけどな、その辺はどうなんでしょう？」

と、イルカパークの若い館長を見た。

「エッエと、イルカを外に出すという事ですよね・・

「素晴らしいじゃないですか、野性のイルカと話しが出来るというの
は」

側からハスキー教授が口添えをする。

「そう言われましても・・本当にクルルが帰つてくるかどうか？」

顎に手を当てて、思案げな顔だ。

「じゃあこういうのはどうでしよう、明日香にこのイルカとの翻訳

ソフトを作つて貰いますから、それを差し上げるということで？」

「はあ・・そうですか、それはいいですね・・わかりました」

湾に続くゲートが開けられ、クルルはゆっくりと外洋に向かって泳ぎ出した。

「すみません、研究所の方にテレビ局の方が

警備の警察官が、林田に近づいて来ると、観光客達の中でカメラを構えているマスコミを差し示した。

いつのまにか、地元の人間も集まり、何をやつているのかとイル

カパークのプールを眺めているのだ。

「研究所の林田ですが、何でしおうか？」

「責任者の方ですか？」

「ええ、そうですね、この現場の責任者ではありますね「イルカと会話なされているようですが、撮影させていただけませんか、もっと近くで・・・？」

「はあ・・・近くですか？」

「これは人工頭脳の明日香となんか関係があるわけでしょう、実験ですか？」

「はい、まあ実験ではありますが」

「それは、明日香の秘密に触れるまことに事でもあるんでしょうか？」
さすがマスコ!! やつざばやに次々と質問を仕掛けて来る。

「うへん、」

林田は腕を抱えるようにして空を仰いだ。

「別に、まずい事は何も無いんですけどね」

「イルカと明日香の対面なわけでしそう、夕方のニュースに載せた
いんですよ、コンピューターとイルカの出会いは見ていた感じでは、
すごくいいじゃないですか、全国の子供達になんとか見せてあげ
たいんです、お願いします、なんとか撮らせて下さい！」

「はあ、じゃあこれだけは守ってください、マナーは守る事、も
し、著しくひどい行為があつた場合は、海に叩き込みます、いいで
すね！」

アウトドア派の林田は、腕を振りながらそう言つが、そんな身ぶ
りなど気にもせず、

「おつ、すげえ、皆に言つときますよ、それといひからに音声を流せ
ませんか」

どうやら、見ている観光客や地元の人間の反応も撮りたいらしい。

「音声ですか、いいでしょ、やってみますよ」

一人の会話を聞いていた警備陣は、直ちにマスコ!!達の身体検査

を開始した。

十五章 イルカ族の長の話（前書き）

人間とイルカが会話が出来るようになり、野生のイルカ族がやつて
来た、

十五章 イルカ族の長の話

キュウー、キュルル

「何・四角い、動く、人間入っている?」

チャッピーがミッチに聞くと。

「あれは、車よ、あれで色々な所に遊びに行くの
オー、と見ている人間達の間にどよめきが起こった。

翻訳された音声が流されて、始めてどんな事が起きているのか理解すると同時に、イルカと人間の会話という事に興味を魅かれているらしい。

キュル、キュキュー

「これから・いつも・話し・出来れる?」

「どうなんでしょう、出来ます?」

ミッチは林田の方を、心配気に振り向いた。

「何日かはかかると思いますが、明日香がこのプログラムで、ソフトを作つてくれると思いますよ、なあ、どうだい?」

「・・今、使つている物を、人間用に作ればいいのですね?、わからりました、作つておきます・・」

「聞いたとおりです、作つてくれるそうです」

「はい、嬉しいです、本当にありがとうございます!」

と、明日香と繋がつて いるモバイルの方向に、ぴょこんとお辞儀をした。

「チャッピーは仲間の事を、何か知つているの?」

プールの縁に座り込んだミッチが、クルルの事を気づかつてか、チャッピーに話しかけた。

「時々・外・泳ぐ・チャッピー・話す・楽しい」

「そうか、時々前の海を泳いでいたのは、チャッピー達の仲間だ

つたんだ」

「友達・海・話す・チャツピー・嬉しい」

「・・・海に帰りたい?」

「・・・・・・・・チャツピー・ミッチ・好き」

「・・・うん、ありがとう・・・!」

そう言つと、ミッチは顔を両手で覆つてしまつた。

南伊豆の山の影は、もつすぐ湾内のプール全体にかかるつとしている。

空の白い雲が黄味を帯び、金色の夕暮れが始まろうという時間、イルカパークが見える一番高い位置で見ていた見物人がざわざわとし始めた。

彼等が指差す方向の水平線の一部が、白く沸き立つてゐるのだ。

双眼鏡を手にしたイルカパークの館長は、レンズの向こうにイルカの群れを捕えていた。

数頭の若いイルカが先頭で交差するように飛び込みながら泳いでおり、その巻上げる飛沫が金色の光に輝いてゐるのだ。

若いイルカ達が泳ぎながら作る上向きの水流を利用するようになり、一匹の老いたイルカがサーフィンをするように波に載せられながら泳いで来る。

側にクルルの姿を発見し、館長も嬉しそうだ。

ざわめきが見物人全体に広がり、その美しい群れの泳ぎに注目すると同時に、何かが起きるという期待も伝播していくようだ。

「ほう、見事なもんじゃな〜!」

「野性のイルカに何を聞くんです?」

林田が教授の顔を見つめて聞いた。

「・・・海の事とか・・・イルカが何を人間に聞きたいかじやな?」

マスクの連中が、海を照らすライトの準備をし始めた。

群れは、湾の前で泳ぎを止め、クルルだけがミツチの所に泳いで来た。

キュー、キルル、

「仲間・来た・嬉しい・話し・出来る」

上半身は水の上に出し、首をふりふり、本当に嬉しいだ。

「我々、人間も嬉しいよ、クルル、安全だからここまで来てくれるようになつてくれないか？」

イルカパークの館長がそう言つと、ピヨシンと身を翻して伝えに泳ぎ出て行つた。

「明日香、ちょっと疑問な事があるんだが？」

林田が呼びかける、

「・・・はい、疑問な事は何でしょーか？・・・」

「イルカ語には、助詞とか、形容詞とかは無いのか？」

「・・・日本語にある、助詞、形容詞、副詞等は、彼等は言葉と同時に音によつて伝えているようですが、ただ、あまりに種類が多くて、正確に翻訳する事が出来ません・・・」

「うん、じゃあ、正確でなくともいいから、だいたいのところで訳してくれ」

「・・・だいたいは出来ませんが、一番近い訳で翻訳してみますわ・・・」

「うん、うん、そこそこいいよー・・・」

イルカの群れが吸気音を間欠的に湾内に響かせながらゲートに近づいて来たのを見ると、50頭ほどはいるだろうか。

照明が水面を照らし、何台ものテレビカメラが野性のイルカ達が不安そうに顔を出しているのを捉えている。

「明日香、頼むよー・・・」

プールの縁まで乗り出した園山がつぶやいた。

キュウーキュウーキュウー、

「・・・いらっしゃい、お待ちしてましたわ・・・」

水中スピーカーから明日香の声が流れる、

キュー、キュルル

「やあ、なんて言うのかな、ここにちはでいいのかな」

一番年老いていると見られるイルカが前に泳ぎ出て、

「我々と話しが出来るというのは、あなたかね？」

「・・・私は、イルカの言葉を人間の言葉に直し、また人間の言葉をイルカの言葉に直します・・・」

「ほほう、それはありがたい、クルルの言つた事は嘘ではなかつたらしい」

ハスキー教授は、長とみられるイルカに話しかけた、

「ううん、イルカの諸君は、人間というものを知つていたのかね？」

「もちろん、知つてはいるが、ほとんど会うことはないから、ほとんど知らないと言つてもいいだろうな、

ただ、海の上を行つたり来たりしている物に乗つてているのは、時々見かけるぞ、あれは人間が作ったものか？」

「ああ、そうです、あれは船と言つて、あれに乗つて海の上を移動しているのですじや」

「時々、すごく大きな、その船とかいうものが動いているが、あれも人間が作つたものなのか？」

「それは、タンカーのたぐいでしそう、それも人間が物を運ぶために作つたもののですじや。」

「あれは、変な匂いがするので嫌いじや」

「それはそれは、申し分けないことですが、人間を代表してあやまりましょう」

教授は深々と頭を下げる。

「人間と話しが出来るというのは、人間にも心が有るからなのじゃ
ろ？、これは喜ばしいことじゃな」

まわりのイルカ達に言い聞かせるように言い、続けて、

「とすると、人間にも歴史が有るのかな？」

「もちろん、有ります、ええ」と、明日香さん、話してあげられる
かな？」

「・・わかりました、かいつまんでお話ししましよう、詳しい事は
いずれ機会もあるでしようから・・」

キュークルルル、キュウー

明日香の話す人間の歴史が、水中スピーカーから流れて湾全体に
広がっていく。

歴史だと・・？、するとイルカは歴史認識を持つているのか？

ハスキー教授は、心中でつぶやいた。

それほどの知能が有ったのか？

目の前でゆつくりと浮かんだり沈んだりしながら吸気音を響かせ
ているイルカ達を見ながら、いぶかし気に見つめている。

キューキュルル、

「人間の歴史とは、なかなか激しいものだつたらしいな」

長老が感心したように考えこんだ。

「イルカの歴史というものを教えていただきたい」

ハスキー教授が声をかけた。

「我々の歴史ですか、キルビー、ここに来てくれ、我々の歴史を人
間に話してやつてくれ」

十六章 語り継がれるイルカの歴史（前書き）

人間が初めて聞く、イルカが語る彼らの歴史は驚くべきものだった、

十六章 語り継がれるイルカの歴史

一頭のイルカが前に進み出て、大きく吸気音を響かせると、歌う様に語り始めた。群れの中の語り部なのかもしない。

「神は一人でいるのが淋しかつたから、何も無い所に、岩の大地を作られた。

そしてそこを美しい水で満たされた、そして水が枯れる事の無いように、水を流し込む大きな大地を作られ、水の世界を作られた。

神はまず、見回り役として鯨を作られ、最も賢い生き物としてイルカを作られた、そして、彼等の食べ物として魚をたくさん作られた。

そして、嵐の神に言いつけて、時々は海をかき混ぜるよつに言いつけたのである。

最初に作られたイルカはチクとカキという男と女であった。

彼等は賢くて善良だつたので、神に愛されて幸福に暮らし、多くの子供を産んだ。

イルカが多くなると、うまい魚を独り占めにする奴等が現われた、彼等は乱暴者だったので、皆はしづしづまずい魚で我慢するしかなかつた、

がある日、チクルクという賢く若いイルカが、力を合わせて奴等を追い出そうと話し合い、長い戦いをして、見事彼等をこの海から追い出した。

我々の祖先はこのチクルクで、我が群れは彼の賢い血を引き継いでいるのである。

遠い海に行くと、今でもあの乱暴者達の子孫が生き延びて世界中に広がっているのだ。

我々は彼等と区別するために言葉を変えて、より新しい言葉をつくりになり、今では彼等とすっかり言葉が通じなくなつたのは、そういう理由である。

やがてキルワーという若者が産まれた、

彼は生まれながらの乱暴者だったが、北方のシャチ族が大挙して南に下つて来た時、先頭となつて良く戦つたが、狂暴なシャチ族の力に負け、我々の祖先達はさらに南に移動しなければならなかつた、

氣を落としているキルワーを、マツコウクジラが臆病者と馬鹿にした。

キルワーは怒つてマツコウクジラにぶつかつていたがかなわなかつた。

マツコウクジラは、まあ、お前の体は小さこのだから、俺が勝つたというわけでもない、こいつは一つ、どこまで深く潜れるか勝負をしようと言つてきた。

もちろん、キルワーが勝負を逃げるわけなど無かつた。

二人は大きく息を吸い込むと、深く深く潜つて行き、やがてイルカ仲間も追い付けないほど深い、青い闇の中へと潜つて行つた。

長い長い時間が過ぎ、やがて深い闇の底からキルワーの苦しそうな声が聞こえてきたのだ。

みんな、さよなら、俺の事を忘れないでくれー！

と、

皆は、キルワーの声を聞いて、いつせいに泣き叫んだ、勇気のある若者が、深い闇の底へと消えて行つたのだ。

だが神は、キルワーの勇気を賛え、我ら一族の守り神にしてくれたので、いつでも我々を見守つていて下さるのだ。

そして、それからもいくつかの餌場をめぐる争いが語られ、いつも勇気を持つて一族を守り、豊かな仲間意識と共に暮らしてきた事が語られた。

見物に集まつた人々はもちろん、教授も林田達も初めて聞くイルカの一族の歴史を、好奇心と感動の中で聞いていた。

すっかり暗くなつてしまつたプールのゲートの近くに、ライトに照らされた水面にゆらめきの波紋を作りながら浮き沈みしているイルカ達に向かつて、

「素晴らしい、実に素晴らしい事ですじや」

ハスキー教授が感動の面持ちで、田のあたり拭いながら話しかけた、

「それほどの歴史を持つてているイルカ族のあなた達がここに来られたのは、何か目的があつての事でしょうか？」

長が応えて言った、

「我々には、知らねばならない事があるのですじや」

大きなため息だつた。

「人間が答えられるような事ですか？」

教授が注意深く聞くと、

「知らねばならんのです、・・・神は我々イルカを最も愛しておられるはずだつたのじや、

だが近年、海は少しづつ汚れてきてある、それはあなた達人間のせいかもしだれぬ、

また、この海 자체が変化してきてあるのかもしだれぬ、それはわからぬが、このままでは大変な事が起つてゐる、

それは、神の意思なのか、意思ならばイルカ族は滅びねばならん

のか、あるいはもっと別の愚かさのせいで悪くなっているのか、それを知らねばならんのです」

教授は言葉を失つた。

長い沈黙の後、教授はようやく口を開いた。

「それは・・・難しい問題ですな、神の意思是我々にもはかり知れません、海が汚れているのは、それは人間である我々の責任らしいです、

だが、こうやって話しをする事が出来るようになったのですから、これからは、なんとか解決出来るよう努めましょう」

「そうですか、そうしていただければありがたい、では、これを期に、仲良くしていただけますかな?」

「人間の代表というわけではありませんが、よろしくお願ひします

ハスキー教授が深々と頭を下げる。

周囲で見ていた大勢の見物人達にも、人間のやつてきた事と、これから海への責任が肩に重くのしかかってくるように感じていた。震えるような声で歌い出した。

満月の満ち潮の夜
波が歌う事をやめても
星が歌う事をやめても
恋の歌はやまない

君の背ビレはしなやかに波を切り
僕の背ビレは君への想いに波を切る

君の恥ずかしげな歌は僕を誘い
僕は喜びに溢れ君の周りを泳ぎきる

僕等は一人で遠い旅に出よう

一人だけの歌

一人だけの踊り

一人だけの愛

一人だけの未来

波間にきらめく太陽の光を君にあげよう
風に歌う波の歌を君にあげよう
真珠色の星の歌を君にあげよう
空色の虹の歌を君にあげよう
海のような深い愛は一人の為に

イルカパークのスピーカーから、会場の見物人達にイルカの詩人が唄う詩が流れると同時に、イルカパークで聞き慣れた声とは違う、抑揚とテンポの美しい声が湾内に響いて、見物人達はその声に動物同士の繋がり故か、深い優しさと、柔らかな癒しを感じて、見動き出来なくなっていた。

十七章 世界のイルカ研究員が狂喜（前書き）

明日香の能力が世界的に知られた事で、世界中から共同研究依頼が殺到！、

十七章 世界のイルカ研究員が狂喜

「けつこう反響が大きいわよ」

北研究員がテーブルの上に新聞を並べると、モーニングティーとドーナツを食べながら、どんよりとした目つきと、寝癖でモシャモシャの髪で起きてきた林田に言った。

「明日香もけつこうやってくれるわね！」

なにやら誇らしげである。

「そうかい、あ～あ～、疲れが取れてないよ！」

どれどれ、といったふうに、北が読み終わった新聞に目を通していく。

：地球の歴史に、イルカの歴史が付け加えられた！

：新しい海の歴史が開かれた！

：今、明かされる海の唄う民族の謎！

：イルカ達は、人類の仲間になつた！

といつた見出しや、イルカ達の写真が大きく躍っている。

「え～と、なんですか？」

眠っている体の為に一口コーヒーを飲むと、うますうにタバコに火をつけた。

イルカはもともと知能の高さは知られていたが、彼等自身が文化

を持つてゐる等とは、少数のイルカ研究者しか予想していなかつたものである。

そして、昨日最も喜んだのは、その少数の研究者達であつたろう。

なぜ、このように彼等の文化を人間が理解することが出来なかつたのは、人間の文化が、文字や遺跡等を基本に考えていたのに対し、イルカの文化が言葉と音を基本にしていたせいであると考えられる。

特に、感情を音で伝え合つてゐる「コミュニケーション」は言葉の数に制限されている人間よりも、より豊かであろうと推測してゐる文化人もいるのである。

と、評論している物もあれば、イルカ研究の専門家の談話を載せてゐる新聞はこうであつた。

我々、イルカを専門に研究してきた者にとって、今日明かになつたイルカの文化と歴史の発見は、決して驚くには当たらないのです。イルカ語はすでにかなり解明されてゐるし、イルカの「地方」との方言の研究もかなり進んでいましたから、文化がある事が予測されていました。

ただ、人間の作ってきた文化の概念にどのように当てはまるのか、そしてそれをどう捉え、証明する事が出来るかが課題だったのです、しかし歴史も持つていたんですね！。

それにしても、明日香のおかげで、たつた一日ですべて変わつてしまつたというか、解明出来たというか、いやいや、まだ感激がおさまつていないので勘弁して下さい。

とにかく、イルカと直接話しが出来るよになつたんですね、嬉しいですよ！

（イルカ学研究者）

海外でも、動物愛護団体はじめ、イルカ研究者達から、驚きと賛美の声が寄せられていると書いてあつた。

カルフォルニアの水族館のある研究者は、日本からのテレビの中継で、イルカが自分達の歴史を話し始めたところで、喜びと興奮のあまり失神してしまい、見逃してしまつた部分のビデオを必死に捜しているという。

アメリカ全土で、テレビを見ていた子供達の反応はすさまじく、中継では分からなかつた日本語の部分にテロップを入れて、今日は一日中特別番組で放送される予定だという。

そして、可愛いイルカと共に、彼等と初めて話しをした人工頭脳の明日香も一躍人気者になつていると伝えていた。

イギリスでは、新しい文明に出会えた事の意義を解説し、人間の感性とは違つたイルカ達の感性に注目し、ビートルズショックを引き合いに出しながら人類が持ちえなかつた知恵を、イルカの文明が持つている可能性を指摘し、これから異種動物間の交流に期待を寄せていた。

もちろん、彼等は鯨を捕り、イルカを虐殺してきた日本人が、このようなチャンスを得るのは、神の皮肉かと付け加えるのを、忘れていない。

「ふうん・・！」

林田は新聞から目を上げて、窓の外の濃さを増した桜の葉をぼん

やりと見つめた。

昨日は現場について、イルカと話をして、それなりに感動したものの、これほどの大ニュースになるとは思っていなかつたのだ。確かに、考えて見れば、これから海という巨大な未知な部分とその中で生きてきたイルカ達と交流出来るようになつたということは、すごい事だぞ、と改めて実感が沸いてきた。

「おはようございます」

黒いスーツをきつちりと着こなした平方が入つて来た。と同時に、北は自分の席に紅茶を持って逃げていく。

「やばい！」

林田はスーと腰を浮かして逃げかけた、

「おはようございます、林田さん」

平方は逃げかける林田を目で抑えると、

「やつてくれましたね、おかげで明日香は世界中のの人気者です、そしてこれです！」

ドサッと10cmほどもある書類を机の上に載せて、

「昨日、我が国の科技庁に送られてきた、明日香との共同研究依頼です」

「はあ～、ずいぶん来ましたね～！」

「これは、各研究機関からの物だけです、各國政府からの、正式要請は今日以降届くものと思われます」

「はあ、そうなりますか？」

「明日香の秘密は、守れますか？」

平方は、つとめて感情を抑えた真剣な顔で聞いてきた。

明日香の秘密？、この男は広瀬教授から人工頭脳の明日香が、突然発生した事を聞いているはずだ、

そして、なぜ突然生まれたのかこの研究所の人間を始めとして、誰も解明していない事も知つてているはずだ、それなのにこの場で秘

密とは、

林田は平方の顔を探るように見ながら、

「明日香の秘密ですか、・・守れますよ」

明日香の発生の理由は誰も知らないという事を秘密にしておきた
いのだろうか?、

「これじゃあまるでロシアンジヨークじゃあないか。

「しばらくは、国家機密なんですから、そこをよく理解していただ
かないと」

日本国政府の意思が背後にあるのだと暗示するよつこ、ゆつくり
と重々しく言葉を置くように話した。

「じばらくとは?」

「日本政府が国際的に明日香を公開しなければならない時期が来る
でしょう、各国とも未来の技術獲得は死活問題ですから、色々な圧
力をかけてきています、政府がいつまで持ちこたえられるのか・・
その時までです」

「明日香をいかに高く売るかですか?」

平方は一瞬ムツとした気配を見せたが、すぐに冷静に、

「売るという事ではなく、いかに価値ある国際貢献が出来るかとい
う事です」

それで、その時期をうかがっている時間稼ぎといつわけか、と内
心でつぶやいたが、口には出さなかつた。

十八章 インターネットレビュー（前書き）

世界が明日香といつ、日本生まれの人工頭脳を狙っている、

十八章 インターネットデビュー

「これから明日香はどうなりますか？」

平方は小さな手帳を取り出して尋ねた。

「インターネットデビューですね」

手帳に書き付けながら、平方はハッキリと眉間に皺を寄せ、手帳を見ながら、

「どうしてもやらなければなりませんか？」

「明日香を成長させる為には、世界のアクティブな情報が必要なのです、それはあなたにも理解出来るはずです」

「・・うむ、確かに・・理解は出来ますが、ハッカーとかに侵入される事については、大丈夫なんですか？」

「それは、どうしても通らねばならない関門です、ですが、そこを通らなければ、明日香はいつまでもこの小さな研究室のコンピューターに過ぎないのです」

「・・・分かりました、その様に首相に報告しておきます」

「やあ、」

内閣調査室の平方が出ていくと、すぐに園山が顔を出した、たぶん、廊下で様子を窺っていたのに違いない。

「なんだつて？」

自分用の「コーヒーを入れながら、林田に声をかけた。

「各国から、共同研究の申込が殺到してくるという事と、明日香のインターネットデビューは大丈夫かと念をおされたよ」

「コーヒーを持ってきて、林田の前に座ると、

「インターネットデビューか、いろんなハッカーが攻撃を仕掛けてくるだらうね」

不安そうな顔をして園山は聞いた。

「そうさ、なんとか明日香に侵入しようと大挙して押し寄せてくるだろうな」

「どうするんだ？」

「まずは、明日香のデーターを暗号化しなくちゃな」

「それは、侵入される事を予測してという事だね」

「どんな頑丈なゲートでも、時間をかけて開けられてしまうからなー！」

「そうだね、俺のもだいぶ侵入された形跡があるしね」

「えー、それで大丈夫だったのか？」

林田は園山の顔を見た、

「仕事関係のデーターで、さほど重要な物は入ってはいないしね」「まあね、狙われている事は確かだしね」

「それよりも、明日香への質問メールが多くて、それをどうするか、そっちの問題の方が大きいよ」

「それは、機密に触れない程度になんとかしてくれ」「機密ね～、・・・何なんだろうね？」

「明日香、お前の機密って何なんだ？」

二人は明日香のカメラの前で覗き込むようにして話しかける、

「・・私の機密って、秘密の事ですか？・・・私に秘密があるんでしようか？・・・」

「それよりも、この頃広瀬教授、ちょっとおかしいわよ、北が黒縁のメガネを直しながら話しに入ってきた。

「今日も明日香に、お前なんか大きいだ！つて怒鳴つたり、さんざん嫌味な事を言つていたのよ」

「最近、いつも苛々しているものな、なんかお前知つているか？」

林田が園山に水を向けると、

「たぶんね、俺の推測だよ、いいかい、教授はどうも防 庁の方か

ら、明日香の兵器としての可能性をまとめて報告するよう指示された

「それでいるんじゃないかと思うんだ」

「まあ、防衛省はそのくらいの事は考えるだろ? で、根拠は?」

林田が身を乗り出してきた。

「教授の部屋に、兵器の資料が並んでいたんだ、初めてだよ、あんな資料を置いてあるのを見たのは」

「そうか、立場上、それが出来るのは教授だから断るにも断われずか!」

「明日香が兵器だなんて、私は嫌よ!」

「とは言つても、国防上は、最高の兵器になりうるもんない!」

林田は頭の後ろに腕を組むと、天井を見上げた。

朝からシトシトと雨が降つてるので、窓にはゆるい稻妻形の模様がついて、少しづつ流れ落ちている。

林田は明日香の日常仕事の処理に使うデータ以外のいわゆる明日香自身が回路に流しているデータの暗号化に取り組んでいる。

「どうだい、難しそうだな?」

園山が側から覗きこんだ。

「そうだね、俺の不得意分野も使わなくちゃならんから、これを手こずっているよ」

振り向きもしないで、なにやら分厚い本を見ながらキーを打ち込んでいく。

「乱数の暗号表なんか使うのかい?」

「もちろん、一応三重にかけてみるよ」

「敵はエニグマなんか使ってくるのかな?」

冒険物のアニメが好きな園山は、興味津々で林田の手元を覗き込んでいる。

「エニグマか、使ってくれたら嬉しいが、もつそんな古い物は使わんだろうな、すべてコンピューター処理されるぞ」

「じゃあ、どれだけ時間を稼げるかだね」

「うーん、だからさ、日一杯時間を使わせてやるつもりだ」
初めて園山を見ると、意味ありげにニヤリと笑った。

海外からの明日香との共同研究依頼は、日毎に増えていくようだ。

イルカとの会話で有名になつて、各国のイルカ研究者達にイルカとの会話ソフトを送つて、感謝と成果の報告が次々と送られて来たのは嬉しい限りだが、他の分野の研究者達の羨望の的となつてゐるのである。

動物行動学

遺伝子情報科学

コンピューターソフト開発

コンピューターOS開発

宇宙開発科学

火星環境開発

歴史科学

など、多岐にわたつて依頼があり、可能な物から協力することになり、北研究員はその選別に入つてゐる。

朝から研究所はピリピリとした緊張感が張り詰めていた。

「さあ～、いよいよか～！」

林田は明日香の前で大きく伸びをして、組んだ腕を左右に大きく振つて軽い体操をしている、緊張している自分の体をリラックスさせる意味もあるのだろう。

「・・大丈夫かなあ？・・」

大男の、じこりなしかか細い不安気な声に、
「大丈夫よ、初めての事が多いけど、明日香ならきっとまくやれるわ」

北が安心をせるよつに側から声をかけた。

林田はこれから起こるであろう事を、予想して教え込んだあるから、後は明日香の才覚と能力を信じるだけである。

ドアの近くで待つていた平方は、不機嫌で苛々しているように見えるが、この男が緊張している時には、いつもこのような表情をするのだろう。

「インターネットデビューの事は、首相官邸にリアルタイムで報告しますから、途中で中止命令が出るかもしれません」

ドアから出てモニターする為の別室に向かつ林田と廊下を並んで歩きながら、心配でたまらないといった風に話しかけてきた。

「もちろん、首相から中断命令が出れば、即刻中止しますよ」

意外と素直な調子で平方に答えた。

その部屋には、ラインで繋がれた50台のコンピューターが並んでおり、平方が手配したハイテク警察のオペレーター達が、園山と打ち合わせをしているところだった。

「おはよひびきやれこますー。」
「おはよひびきやれこますー。」

林田の挨拶に、警察官らしいキビキビとした50人の挨拶が返つてくる。

「今日は明日香のインターネットデビューといつ事で忙しい一日となると思こますが、よろしくお願ひします」

オペレーター達の顔には、こたとか緊張があるよつだ。

「やつていただくのは、皆さんが口頃やつていらしゃるネット上の追跡ですので、こつものよつにやつていただければ結構です」

少し安心した空気が部屋の中に流れる。

「明日香のインター ネット デビュ－が今日で
ある事は公表していませんが、奴等の事ですから、周期的に検索
をかけ、アタックしてくるものと思われます、その中にはみなさん
が追いかけている顔馴染みがいるかもしません」
クスクスと笑いが起こるのは、思い当たる相手がいるからなのだ
るつ。

「データーとして欲しいのは、相手の国の特定とIPアドレスとパ
スワードです、また、グループでアタックをかけて来た場合のグル
ープの特定をお願いしたいのです」

「はいっ！」

若くてきりりとした顔立ちの女性が手を上げた、

「何でしよう？」

「明日香のゲートはどうなつてているのでしょうか？」

「ゲートは5つ設けてあります、

第一ゲート：通常の 10×10 乗のパスワード、同一IPで5回ま
でアクセス可。

第一ゲート： 10×10 乗のパスワード + 反転パスワード (二つの
鍵)

第三ゲート： 10×2 乗 + 10×2 乗 + 10×2 乗 + 反転 10×2
乗 + 10×2 乗、二列の数列の同桁の差がパスワードになつていてる。

第四ゲート：anatananoakusesesuhaihoudesu
tadatinniyametekaaerinaasai X12

第五ゲート：hacker + hacker + hacker + rek
cah + rek cah + rek cahとなつています

「そのパスワードでは、破られてしまいそうですが？」

「そうです、時間稼ぎですね、ですからその間に出来る限りの敵のデーターを集めておきたいのです」

いくつかの質問の後、

「それでは、明日香のインターネットへの接続は、10:00から開始しますので、よろしくお願いします！」

十九章 明日香、世界の諜報機関にハッキングされる、（前書き）

世界が明日香の秘密を探る為に、ゲートをこじ開けようとやつて来た、

十九章 明日香、世界の諜報機関にハッキングされる、

09:59

林田が腕時計の秒針を見つめている。
オペレーター達に緊張が走り、モニター画面を注視している。

10:00

「回線接続！」

林田の声が部屋の中に響きわたり、園山がスイッチを入れた。
明日香が勢い良くインターネットの海のように広い世界に飛び出
して行くのが、見えたような気がした。

「アタックされています、発信、カリフォルニア！」
「アタックされています、発信、ボストン！」
「アタックされています、発信、カナダ！」
「アタックされています、発信、ドイツ、ベルリン！」
オペレーター達の声が飛び交い、データーを取っていく。
「さすがに早いな、どうやらゲートの前で待ち構えていたってい
う感じですね」

園山が平方に向かって話しかけるが、
「はあ、そうですね」
と返事はほとんど上の空だ。

「アタックされています、発信、イギリス！」
「アタックされています、発信、ロシア、モスクワ！」
「アタックされています、発信、台湾！」

「アタックされています、発信、大阪！」

「アタックされています、発信、イスラエル！」

次々と報告が上がつて来る、

ハッカー達は第一ゲートに群がり、次々とパスワードを機関銃の
ように撃ち込んでくる。

「大丈夫ですか？」

平方の顔には、緊張の為か汗が浮いている。

「すべて、予測通りです」

答える林田が嬉しそうに見えるのは、こいつは緊張が好きだから
に違いない。

腕時計を見ながら、

「まだ、しばらくは持ちこたえるでしょう！」

「アタックされています、発信、スエーデン！」

「アタックされています、発信、カナダ、こちらはパスワード10
X10乗の途中から始めています、グループの可能性有り！」

「グループの特定を進めて下さい！」

すかさず林田が指示を出す。

「アタックされています、発信、ロシア、モスクワ、グループでア
タックしています！」

「K・G・Bか・・な？」

平方がつぶやいた。

「K・G・Bか、当然狙つてくるでしょうね」

林田が少し興奮を抑えながら応える。

「アメリカ、発信地はバラバラですが、グループで、アタックをか
けている模様！」

「イスラエル、グループ化しました！」

次々と報告が飛ぶ、

「モサドか・・？」

平方は落ち着かない指先で手帳に書き付けている。

モニター画面には、ハッカー達が撃ち込んでくるパスワードが、雨のように流れている。

「アタックされています、発信、ルクセンブルク！」

「アタックされています、発信、秋葉原！」

明日香がインターネットに接続したという情報が世界を駆け巡っているのだろう、次々とハッカー達が参入してくる。

オペレーター達が緊張の中でハッカーの足取りを追跡している様子を見ながら、林田は時折腕時計に目をやっている。

11:35

「第一ゲート、侵入されました、アメリカのハッカーグループです！」

「回線切断！」

林田の声が響いて、園山がすかさずスイッチを下ろした。

「ふう、1時間と35分か、まあまあってとこかな」

腕時計を見ながら、第一ゲートを破られた時間を測り、

「グループ化したところの情報をまとめて下さい、それが終わったら昼食にしましょう、丁度いい時間ですし、まだ長い事かかるでしょうから、腹ごしらえしておいてください、」

オペレーター達の責任者が持つて来た紙には、

- ・アメリカAグループ、ロス、
- ・アメリカBグループ、ペンタゴン、CIA?
- ・ロシアグループ、モスクワ、K・G・Bか?
- ・カナダグループ、ケベック
- ・イギリスグループ、ロンドン、M1-6?
- ・イスラエルグループ、モサド?
- ・ルクセンブルク小グループ、

と、まとめてある。

「各国情報機関がアクセスしてきていますね」

林田にその報告書を示しながら、

「各情報機関は、明日香への侵入が目的でしょうが、このルクセンブルクのグループは、破壊を目的にしている可能性があります」

「と言うと・・・？」

「ルクセンブルクには、グリーンピースから派生した過激グループでグリーンアースというのがあります」

、自然回帰をうたつて活動しているんです、もし彼等なら人工頭脳という新しい機械支配に抵抗して、破壊コマンドを撃ち込んでくる可能性があります」

「分かりました、なんとかしましょう」

「明日香、どうだった、インターネットの世界は？」

「・・・すごく広いところですね、情報がたくさんあって目が眩みそうですね！・・・」

林田の問いに、明日香は少々興奮した口調で答えた。

「そうか、面白かったらう、良かつたね！」

「・・・はい、たくさん勉強しました、まだ分からぬところも沢山ありますか・・・」

「ところで、ゲートが攻撃されるのはわかっているよな？」

「・・・はい、でも、ゲートを作るのなら、なぜ完璧な物を作らないのですか？・・・」

「うん、明日香なら作れるよな」

林田は周りを見渡して、誰もいない事を確認すると、

「確かに、明日香が出入りする為なら、一秒ごとにパスワードを変えてしまえばいいんだが、そうすると、外からお前にアクセス出来なくなるじゃあないか」

「・・・はい、そうでしたか・・・」

林田は少し考えた後で、おもむろに、

「明日香は、他のコンピューターを攻撃出来るのかい？」

「・・攻撃？・・したくありません、なぜですか？・・」

悲しそうに明日香が聞いてきた。

「どうか、お前にとつては仲間みたいなもんだらうからなあ～」
ゆつくりとため息をつくと、

「今、攻撃してきている奴等の中に、お前を破壊しようとしている
奴がいるらしいんだ」

「・・私を破壊、ですか？・・」

「たぶん、破壊コマンドを送り込んで来ると思う、ハードディスク
を初期化するみたいな」

「・・他のコンピューターを破壊したくはないので、怪我をさせる
くらいなら・・」

「うん、それでいいよ、大丈夫だらうが、気をつけてくれ」

「・・たぶん、大丈夫です、やってみますわ・・」

しつかりとした口調で、明日香が応えた。

第一十章 ハッカー達の攻撃に明日香は立ち向かう、（前書き）

ハッカー達の嵐のような攻撃にさらされる明日香、日本警察のオペレーター達は全力を挙げて彼らの素性を追う、世界の諜報機関と民間のハッカー達が先陣争いを競うよつに次々と参戦して来る、

第二十章 ハッカー達の攻撃に明日香は立ち向かう

13:00

「それでは、再接続、開始します！」

林田の声に応じて、園山が接続のスイッチを入れた。
「アタックされています、発信、ユタ！」

「アタックされています、発信、カナダ、ケベック！」

「アタックされています、発信、ルクセンブルク！」

次々と報告が入る。

「さつきより、減っていますか？」

平方が聞いてきた。

「回線切斷しましたから、もう今日は無いかなと思ったんでしょう、でも、またすぐに集まって来ますよ」

「でしょうね、彼等にとつて明日香が一番の関心事なはずですから」園山が側から心配そうに言葉を添えた。

「先程のアメリカのハッカーグループと思われます、第一ゲートに取りついでいます！」

林田は顎に手を当て、興味深そうに、

「どれくらい持ちこたえるかな？」「と、半ば楽しそうでさえある。

「再アタックされています、発信、ロシア、モスクワ！」

「再アタックされています、発信、イスラエルグループ！」

「イギリス、ロンドングループ、第一ゲート侵入！」

平方は心配そうにモニターに見入っている。

「あつ！、アメリカ、切り裂きジャックです！」

「なんです、その切り裂きジャックというのは？」

林田がオペレーターに聞く、

「相手のコンピューター破壊を趣味にしている天才ハッカーと言わ
れている奴です」

「いわゆる愉快犯という奴ですか？」

「噂では、まだ少年だという話しですが、詳しい事は分かつており
ません」

「そいつが捕まらない理由は分かりますか？」

「はい、盗んだパスワードとIDを使っているんです、それに足跡
を書き換えていく手口を使つそつです」

「ふうん、」

タバコに火をつけて、少し考えると、

「じゃあ、今、追跡しましょう！」

「はい、もう追跡しています、・・あつ！、消えました！」

残念そうにオペレータが顔を上げた。

「逃げ足が速いな～！」

何をやるつもりなんだ、こいつは？

「イスラエルグループ、第一ゲート侵入！」

「アタックされています、発信、中国、北京！」

「アタックされています、発信、札幌！」

「モスクワグループ、第一ゲート侵入！」

やつぱり、グループは強いな、個人じゃあ無理かな～、

低い雲が動いてきたせいか、窓の外が急に暗くなつたのを見ながら、林田は世界中で明日香にアタックをかけているハッカー達の姿を想像した。

「イギリス、ロンドングループ、第二ゲート侵入！」

「回線切断！」

すかさず園山がスイッチを切った。

「報告をお願いします」

「はい、各国の情報機関と思われるグループが健闘してますね、今第二ゲートに取りついているのは、アメリカのグループ、モスクワグループ、イスラエルグループ、第三ゲートに取りついているのはイギリスグループですね、」

「アメリカのグループはCIAかな？」

側から平方が口を出す。

「発信地が広範囲なので、民間のハッカーグループと思われますが、確認は取れません」

「CIAが黙つているはずもないんだが・・・、後から来るのかな？」

平方はペンをペタペタと頬べたにリズミカルに打ちつけながら、考えこんだ。

「それでは、15分間休息を取ります」

16:05

接続を開始すると、すぐにオペレーター達の声が飛び交う。

「アタックされています、発信、インド、デリー！」

「再アタックされています、発信、ルクセンブルク！」

「再アタックされています、発信、ドイツ、ベルリン！」

「再アタックされています、第一ゲート、発信、イスラエル！」

「再アタックされています、第三ゲート、発信、イギリスグループ」

「早速ですね！」

平方に応えて林田が説明するように、

「明日香がインターネットに接続したという情報が、世界中に回っているんです」

「第三ゲートに切り裂きジャックです！」

「なんだって？！」

「第三ゲートに切り裂きジャックが現われました！」

「いつ第一と第二のゲートを通過したんだ？」

「突然第三ゲートの前に現われました！」

「そんな馬鹿な！、第一と第二にアタックをかけた形跡は？」

「ありません、すんなり通過しています！」

「追跡を開始してください、どういう事だ、・・どう思う園山？」

「天才ハッカーの天才たる由縁かな、あるいはこっちの情報が敵に流れている？」

「おい、チョット来てくれ」

林田は、園山を廊下に呼び出した、当然のように平方も付いてくる。

「オペレーターの誰かが、切り裂きジャックに情報を流しているって言うのか？」

「それは・・日本の警察の選りすぐりの連中だ、そんな事をするような人間はいないはずなんだが？」

平方が側から口を出す。

「あなたは、大丈夫なんでしょうね？」

林田は、半分冗談めかして平方に聞く、

「ふふふ、幸い私にはこっちの方面に関しては、それが出来るほど の知識を持ち合わせていないのでね、

それより、さつきから考えていたんだが、CIAが天才と言われているジャックを手先に使っているんじやないかとね」

「ふう～む、確かにアメリカ人好みの手ではありますね」

「CIAとM1・6はツーカーの仲ですし、今回は利害が一致していますから、イギリスの開けたゲート情報をCIAに流せば・・ね

「なるほど、それはありますね」

「そう応える林田の側で、園山はまだ不審そうだ。

部屋に戻ると、

「切り裂きジャックは消えましたが、ニューヨークから発信している事までは追跡しました、あと、ジャックから責任者にてにメールが届いています」

「メールだつて？」

林田が彼のモニターを覗くと、

「これは、罠なんだろう？」

一一一章 明日香の前に、天才ハッカーが現れた、（前書き）

日本が誇る人工頭脳は、ネット上で世界中のハッカー達の攻撃を受け、ゲートを無理矢理こじ開けられようとしている、大丈夫か明日香！

一一一 章 明日香の前に、天才ハッカーが現れた、

「フフン、クソッ！、返信は出来ますか？」

「仮りのアドでしょうけど、出来るみたいですよ」

林田はキーを叩いた。

なぜ、そう思つ？

そう書いて、送信した。

「「」のメールアドレスは一応アメリカの警察に通報しておきましょ
う」

部屋の中では、オペレーター達の声が相変わらず忙しく飛び交つ
ている。

「第二ゲート、ロシア、モスクワグループ侵入！」

「続いて第二ゲート、アメリカグループ侵入！」

「大阪の発信者、第一ゲート侵入！」

「うん、日本人も頑張つてるな」

侵入されているのに、変なところで感心したりしている。

「ルクセンブルク、第一ゲート侵入しました！」

「うーむ、正義の破壊屋か」

「スエーデン、第一ゲート侵入しました！」

「続いてカナダグループも第一ゲート、侵入！」

「中国はどうしている？」

「まだ、第一ゲートをアタックしています、苦労しているみたいで
す」

クフフフツとオペレーター達から失笑が漏れた。

「第三ゲート、イギリスグループが侵入！」

「第三ゲート前、ジャックが現われました！、追跡開始します、」

「ジャックよりメールが届きました！」

「あつ！、ジャック消えました！」

「回線切断！」

林田の声が響いた。

「お疲れさまでした、20分休息を取ります」

林田が切り裂きジャックのメールを表示してあるモニターを覗く
と、警視庁のオペレーター達も興味津々で集まってきた。

ASUKAのゲートなら、

当然ASUKAを使って
ゲートを作るだろう、
だけどこのゲートはどう
うみても馬鹿な人間が
作ったレベルだ。

罠でもなければ、こんな幼稚なゲートを使つ
たりはしないだろう？

「クソッ、言いたい事言いやがつて！」「
なるほどな、一理ある！」

オペレーター達もうなずいたりして、納得している。

「人が遠慮がちに、

「Jのゲートは明日香が作った物ではないですね、どうしてですか？」

「もちろん、明日香が作ればもつと完璧な物が作れます、現時点では、複雑すぎて、外からアクセスする時に問題が生じます、で、このゲートは馬鹿な人間の私が作りました」と、ペコリと頭を下げた。

「これからどうするんですか？」

「はい、・・ちょっと待ってください」

胸からタバコを取りだし火をつけ、コーヒーを「ククク」と勢いよく飲み込んだ。

机に座り直して、しばらくの沈黙の後、

「確かに、ジャックの言つ通り、これは罠のプロジェクトです、詳しい事は言えませんが、これから不自然な指令を出す事もありますが、了解をお願いします」

オペレーター達はザワザワとしたが、そのうちの一人が、「了解しました、いつかは詳しく話していただけるんでしょうね？」

「はい、そのつもりです」

もし、罠だと思つんだつたら、さつさと帰つた方が身のためだぜ。

「Jはお前のような馬鹿ガキが来るような所じゃないんだ。

林田はジャックに返信メールを書いて返送したが、今度のメールアドレスは前回と違い、ミシガンになっていた。

19:00

明日香の回線の接続開始、夕食を終わったオペレーター達の元気な声が飛ぶ。

「再アタックされています、第三ゲート、アメリカグループ！」
「再アタックされています、ルクセンブルク！ 第二ゲート侵入！」
「再アタックされています、第四ゲート、イギリスグループ！」
「再アタックされています、第三ゲート、ロシア、モスクワグループ！」

ハッカーグループによるアタックの報告が飛び交う。

「アメリカBグループとカナダグループが合体した模様？！」

「奴等は一番乗りは誰か、競っているみたいだな」

林田がアタックされているモニター画面を見ながらつぶやくと、「ハッカーの連中は、それが誇りらしいからね」

園山がそれに応えて言うと、平方が、

「でも、情報局の連中は必死に仕事をしているんですよ、国の命運をかけて」

としみじみと言つた。

「再アタックされています、第二ゲート、カナダグループ！」
「第一ゲート、イスラエルグループ侵入！」
「第三ゲート、ロシア、モスクワグループ、侵入！」
「切り裂きジャックより、メールが届きました」
「なんだい、今度は？」

林田がモニターを見ると、

イエローモンキーの日本人は、優秀だから尊敬しているんだけど、どうもその薄っぺらな顔が気に入らないのさ、

この程度のゲートでASUKAを守るなんて、たとえ罷だとしても、知れたもんだね、どんな罷か見てやるよ。

「ふう〜、まだやるつもりだな」
顎を指で撫でながら、なにやら考えている。

「秋葉原も第一ゲート侵入！」
「台湾の発信者も、第一ゲート侵入！」
「続いて、ドイツ、ベルリンも、第一ゲート侵入！」
ううん、忙しくなってきたぞ、
「第四ゲート、ロシア、モスクワグループ侵入！」
「回線切断！」

林田の声が響いたが、それに反して、
「ちょっと待つて！」
園山が押し止どめた、
「なんだい？」
「確かめたい事があるんだ」
「何を？」

「まだ、確信は無いんだけどね」「園山は何かを待っているらしい。」

「第五ゲート前に、切り裂きジャックが現われました！」
それを聞いて、園山は回線を切断した。

第二十一章 天才ハッカーの手口（前書き）

世界の諜報機関とハッカー達に、最後のゲートに迫られた人工頭脳、明日香は・・、

「どうじつことなんだ？」

林田は何かを確認するように考へてゐる園山の顔を覗き込んだ。
「切り裂きジャックは、自由自在に出入りしているように見える。
今までの行動はイギリスから情報を得ているんじゃないかと思つて
きたけど、今回はロシアの後だろ？、まさか、ロシアがアメリカに
情報を流すだろ？」

「今は落ち目のK・G・Bとしても、それはしないだろ？」
平方が相槌を打つのに続けて、

「それに、もし、自由自在に出入り出来るのだつたら、なぜ直接明
日香に侵入しない？、必ず誰かの後に現われるだろ？」

「ああ、そうか！」

林田は理解したように声を上げたが、平方は怪訝な顔つきだ。
「いかに天才ハッカーであろうとも、物理原則は超えられないとい
う事です」

園山は自信満々に説明を続ける。

「たぶん、切り裂きジャックはイギリスから情報を得ていたのでは
なく、イギリスやロシアが得たゲートの鍵を盗み出していたのです」
「各情報機関にハッキングしていたというのか？」

平方が驚いたような声を出した。

「たぶん、彼は日常的に情報機関にもハッキングしていたのでしょ
う、もちろん日本もね」

「各国情報機関だつて、ハッカーに対するチェックはやつてているは
ずだ」

「もちろんやつてないでしょ、でもこの時間は日本の明日香をア
タックする事にコンピューター要員は忙殺されていますからね」

「ううん！」

「彼は長くはアタック出来ない、なぜなら、自分の発信位置を特定されてしまうからです、盗んだパスワードとEIDだとしてもね」

「なるほど…」

「だから、時々どこの情報機関がゲートを破つて侵入したのかを知るために、見に来ていたんだろうと推測します」

「自由自在に出入りしているように見せかけて、実は必要に迫られてというわけか」

林田も、納得し、自信を取り戻したようだ。

22:10

食事と休憩をとったオペレーター達が、それぞれのモニターの前の席に着くと、

「皆さん、お疲れさまでした、侵入されていないのは、いよいよ最後の第五ゲートだけになりました。これも回線を接続すれば、やがて破られてしまうでしょう、それで今日の仕事は終わりです」

「すぐに閉鎖するわけですね？」

オペレーターの一人が手を上げて訊ねた。

「いいえ、開けっぱなしにしておきます」

「え、そんな無茶な、止めて欲しいですね！」

平方が眉間に皺を寄せて抗議した、そんな彼を押し止めるように手で抑えながら、

「聞いてください、もしあなたが銀行強盗に入ったとして、金庫に入るまで警備員がさんざん抵抗したのに、金庫に入った途端に抵抗を止めて、金を持ち出せるにまかせたら、どう思います？」

「ううん、それは不気味だろううね、何かの罠だと思つだろうな」

林田はその答えを聞くと、オペレーター達に向き直り、

「明日香のハードディスクの中身は、すべて暗号化してありますし、

またさほど意味の無いものに変えてありますので、たとえ奥まで覗かれて、支障はありません

「ははあ～、明日香を明日香の「ペーパー」のマシンであるよつて見せかけよつとこつわけですか？」

再びオペレーターから声が上がる。

「各国の情報機関がどのよつて思つつか分かりませんが、少なくともそういう疑念を抱くでしょうな」

「林田さんの狙いは、そこなんですね？」

「そう思つてくれれば恩の字なんですが、

少なくとも、自分でハードディスクの中身をすべて読んで、そこに意味のあるものが無ければ、彼等にとって明日香のアドレスにアクセスする事の興味は無くなるだろうと願つています」

「了解しました、ただ、我々は、ハッカー達の行動の監視を続けようと思ひます、これからの方にもいろいろと参考になりそうなので「それは御自由になさつてくれさい、我々はこれから明日香の傍に行きますので、何かあつたら連絡下さい」

「では、回線接続！」

園山がスイッチを入れると、再びハッカー達がアタックを開始して来た。

「あとは、明日香がつまくやつてくれるかだ？」

林田達が明日香の部屋に向かう途中、警備の警官が走つて来て平方を呼び止めると、なにやら報告した。

「記者発表は一時間後なんだな？」

「ハイ、その通りに発表される予定であります」

腕時計を見て、

「もし、来るとしても一時間はかかるだろうな、23・00から厳

戒体制をとつて警戒

するよつこに言つてくれ

「ハイ、そのよつこに連絡します！」

平方の顔に一瞬緊張が走つたのを見て取つた林田が、「どうしたんです？」

と聞くと、

「そうですね・・・一時間後には一コースでもやるわいですから、いいでしよう。

三陸沖に不審船が現われて、東海上に逃走中だということです」「それがこちらと何か関係があるんですか？」

「いや、分かりませんが、一応警戒しておきましょつ」と言つた後、首に指を当てながら何かを考えここんでいる。

「明日香、どうだい？」

「・・宇宙つて、とても素晴らしいですわ！・・」

林田の声に答えて、明日香が嬉しそうに応えた。

「宇宙？」

「・・今、NASAのデーターを読んでいるんですわ！・・」

「NASAが、それは素晴らしいはずさ、地球の外には無限の宇宙が広がつてゐる！、そこには、また別の生命が生まれてゐるかもしない」

「そんなことより、ハッカー達の事を」

平方が傍からうながした。

「ああ、そうですね、明日香、ハッカー達がすぐにお前の中に侵入するぞ！」

「・・はあ、侵入してどうするのですか？・・」

「お前のハードディスクの内容を読む」

「・・はい、分かりました・・」

「ううん、あと、お前を破壊しようとしている奴もいるらしい」

「・・・破壊、それは、壊されて動けなくなるんですね、それはとても困ります、でも、どうやって?・・・」

「普通の手口としては、ソフトを書き換えたり、ハードディスクを初期化したりする

「・・・あら、そのくらいの事なら、なんとかなります・・・」

「うん、俺もな、お前なら大丈夫だとは思っているんだが

「本当に、大丈夫なんでしょうね?」

明日香の答えを聞いて一安心した林田は、園山と平方の分も含めて、三人のコーヒーを入れると、テーブルに運んで、心配そうな平方にすすめながら、

「明日香は自分の意思を持つているコンピューターなんです、それがどんなにすごい事か、想像出来ますか?」

と、自信ありげに、椅子に座ると、胸からタバコを抜き出し、火をつけた後そのままにゆっくりと深々と吸い込み、

「今夜は、長くなりますよ」

いたずらっぽい目をしながら、林田は平方に囁きかけた。

一十一章 明日香の最終ゲートを破られた！（前書き）

日本が誇る人工頭脳のデーターは、各国の諜報機関に全てダウンロードされていく、大丈夫か明日香？

一一二章 明日香の最終ゲートを破られた！

その時、明日香の部屋の警備として、重装備のレンジャー隊員が一礼して入つて来た。

「レンジャー隊員の平川です、」こちらの警備をします、ようしくお願いします！」

いかつく頑丈な体に、防弾チョッキ、肩から短機関銃MP6を下げ、顔には歴戦の後か、二つの傷が左頬と首についている。

「まさか、ここまで攻撃される事は無いと思いますが、念の為です」

平方が田で礼を返して、林田達に説明した。

「・・誰かが侵入しました！・・」

明日香の声に林田が調べると、イギリスグループがハードディスクにアクセスし、片つ端からデーターをダウンロードしているところだった。

「イギリス国家が、明日香に表敬訪問しているところだな、明日香、その後に危険な奴が入つて来るはずだ、気をつけてくれよ

「・・IDは分かりますか？・・」

「そいつは、盗んだIDを使ってアクセスしてくる奴だから、はつきりしたデーターは無いが、発信地はおおむねアメリカで居所を突き止められないように、短いアクセスを繰り返す癖があるらしい」

「・・また、誰かが侵入しました、ロシアのモスクワです！・・」「どうしている？」

「・・ハードディスクのデーターを、片つ端からダウンロードし始

めました・・・

「いいぞ、みんなくれてやれ」

「・・・図書館のデーターもですか？・・・」

「ああ、そうか、・・・でもそれは秘密でもない」「一般的な資料だな、いいぞ、くれてやれ、少しは彼等も賢くなるかもしれんしな」

「・・・はい、分かりました！・・・」

「本当に極秘の資料は入つていらないんでしょう？」

平方が傍で心配そうに口を出した。

「・・・アメリカのコタからの侵入です・・・」

「ん、あいつか？」

林田の顔に緊張と、半ば嬉しそうな表情が走った。

「発信先にアクセスしてみてくれ！」

「・・・はい、分かりました・・・」

「切り裂きジャックかな？」

園山の問いに黙つてうなづくと、

「・・・アメリカ、コタ、ソルトレイクシティー、ダラス、ニューヨーク、ソーホー地区、AE3047002、UN870036です・・・」

「こいつのアクセスに気付いているかな？」

思わず園山に声をかけた。

「たぶんね」

「・・・あつ、回線を切断されました・・・」

明日香が高く透き通る声で、報告した。

「ここの後、どう出るかな、あきらめるかな？」

林田は 園山の前に座り直して、真剣な顔で言い、

「今、切り裂きジャックは何を考えているんだろ？・・・」

と腕組みしながら園山に期待するような目線を送った。

「俺がジャックだったら・・・」

と、園山は指先で鉛筆を回しながら、「自分が繋いだラインで逆アクセスされた事で、かなりドキドキしているだろうね、

それに相手が明日香という今世界で一番有名なコンピューターなんだから、少しは汗をかいているんじゃない?」

「うん、」

「普通、逆探される時はアクセス記録をたどってやつて来るから、それを書き換えておくとか、時間的に余裕があるけど、明日香のやり方はオンラインでアタックされるわけだから、捕まる危険がどれだけ高いかを考えると、まず、安全な場所まで逃げるね」

「じゃあ、今は逃げている真っ最中というわけか?」

「もし、俺ならね、···それで覚悟を決めるね」

「捕まる覚悟で明日香にアクセスするか、か?」

「いや、ジャックは破壊屋だから、今の逆アクセスを考えたら、自分のマシンも破壊される可能性があるだろ?」

それだけの犠牲と捕まる危険を天秤にかけて、対策を練るね」

「じゃあ、また来る?」

「たぶんね···、アメリカ人で、天才と呼ばれ、自分でも天才ハッカーだと自負している人間は、自分の才能のプライドと確認の為にも、明日香を破壊する事は、それだけの価値があると思うだろ?」

「うね」

「ふうん、そんなものかな···まあ、そんな気もするが」

林田が明日香の方を見ると、平方が真剣な顔で、データーがダウンドロードされているモニターを見つめていた。

「何か、おかしいところでもありますか?」

「いや、今イギリスでも、私と同じようにモニターを見つめている連中の事を考えていたんだ」

「イギリス諜報部M1-6の事ですね」

「それは分からんが、少なくとも彼等は今、奇妙な感覚に囚われて

いるだろ？とね

「と言いますと？」

「世界最高の能力を持つて居るはずのコンピューターに侵入して、すべてのデーターをダウンロード出来て居ることの奇妙さだよ」

「もう、罷だといつ事に気が付いているんでしようか？」

「この時間なら、つづつそういう思つて居るだろ？ね、」

「それなら、この後彼等はどうあるんでしょう？」

「簡単に手に入れられる情報は、その程度の価値しかないとこいつ言葉があるように、今

ダウンロードしているデーターには、やほど意味は無いだろ？と

予見はして居るでしきうね

「がつかりしていると？」

「半分はね、でも林田さんが暗号化して居るところ」とですから、それを解くまでは意味があるのか無いのかは、分からない

「ですよね」

林田は両手を机の上に置いて、グイと身を乗り出すよ、ついで、平方の言葉を待つた。

「ガセネタの暗号データーを解くむなしは、同じ様な仕事をしている私としては、同情を禁じ得ないとこりもありましてね、ハッハハハ！」

と笑い声を上げると、手に持つたコーヒーを一口すすつた。

「・・ロシア、モスクワから、侵入しています・・」

明日香が声を上げた。

「さあ、次々とやつて来ますかな？」

そんなんのんびりとした声を上げると、林田はテレビのスイッチを入れた、ニュースの時間なのだ。

平方も向き直つて、どこかに電話して居る。

テレビには、暗い画面の中に何かが燃えているのが映っている。

引き続きニュースをお伝えします。三陸沖の不審船が東海上に逃走中でしたが、自爆したもようです。

上空の木下さん、伝えて下さー、

はい、こちら、宮城沖80キロの現場海域を旋回中です、暗い海上に不審船だけが燃えています。

海上保安庁の巡視船が生存者がいるかどうか、海上を捜している模様です。

不審船について、新しい情報が入りました、お伝えします。船名の第七天竜丸で登録されている船は八丈島沖で操業している事が確認されました。

尚、不審船が三陸沖で何をしていたかについては、まだ調査中です、

引き続き臨時ニュースを・・・。

「何なんですかこの船は？」

林田が振り返って、その方面には詳しい平方に聞いた。

「それは私が一番知りたいのですがね、たぶん、K国の工作船でしょう

「何で自爆なんか？」

「同海域から不審な潜水艦が北上しています」

何かを考えながら話しているせいが、声が小さい。

「海上保安庁は知つてゐるんですか？」

「巡視船のきたかみが後を追つています、

あと、海自のおやしおとあさしおが追尾してします」

「それは、自衛艦ですか？」「

「いえ、一隻とも潜水艦です」

「そりやあすゞい、潜水艦対潜水艦ですか、で、どうするんですか

？」

「どうもしません、どこへ行くのかを確認するだけです」

「捕まる事は出来ないんですか？」

「捕まる方法があつたら、私が知りたいですよ

「そりか～あ！」

林田はタバコに火をつけると、両腕を頭の後ろに回して考へて、
「で、さつきから何を考えているんです？」

平方は時計を見ながら、

「もし、あの不審船が工作員を送り込んで、

そいつらが直接明日香を攻撃に来るのなら、もつそろそろ始まる

時間なんですよ

「えつ！」

林田はガバツと身を起こした。

「でもそれは、もし、なんでしょうか？」

「もちろん、色々な可能性のうちの一つに過ぎませんがね

「ふ～う」

大きくタバコの煙を吐き出した。

一二十四章 切り裂きジャックの眞の狙い（前書き）

アメリカの天才ハッカー少年、対、平凡な日本の大人の技術者の戦い！

一十四章 切り裂きジャックの真の狙い

「今、来ているのはイギリスとロシアだけか」

園山がモニターをチェックしていると、

「・・侵入されました、アメリカ、ダラス、ニューヨーク、ブルックリン地区、OF2540027、YKD53049です・・」

「あいつか？」

「何をしている？」

続けて林田が聞いた、

「・・私のROMを書き換えていきます・・」

「ROMを？」

「しまった、可変ROMだった！」

「どうしよう？」

「まずいなー！」

「明日香、どう書き換えられたんだ？」

「・・ハードディスクへのアクセスアドレスを書き換えられたので、再起動する事があれば、ハードディスクにアクセス出来なくなりました・・」

「そんな手があつたのか！」

今すぐに駄目になるというわけではないが、再起動が許されない

といつのは、いつも

時限爆弾を抱えているようなものだ。

林田はジャックの新しいアドレスに、メールを送った。

何をやるつもりなんだ？

待っていたかのよう、すぐに返信メールが来た。

本物の明日香は、
どこにある？

「ちょっと来て、どうじょうか？」

ジャックからの返信メールを見て、林田は園山と平方を呼んで、
相談し始めた。

「・・・・・・・・」
「うまくいくかな？」
「・・・・・・・・」
「だから、私は危険だと言つたんだ！」
「・・・・・・・・」
「気付かれないようにしないとな」
「・・・・・・・・」
「天才少年対凡才の大人か、頑張るぞ！」

林田は、ジャックにメールを送る。

これが本物の明日香だ、
お前の目的は、何だ？

ジャックからのメールは、

本物の明日香だといつ
証拠は？
俺のアドレスを・F・B・Hや
C・I・Aに通告するな、
しばらくな、この勝負
を楽しみたい。

林田は、ジャックにメールを送る。

アクセスしているのだから、
そのくらい、分かる
だろう。

しばらくな、通告はしない
かわり、ROM書き換えの
コマンドを教えてくれ。

「さあ、次は何を要求してくるんだ？」

林田は揉み手をすると、落ち着かない風に「一ヒーを入れに立つた。

「だけどさあ明日香はROMの書き換えコマンドを撃たれた時に、なんで俺達に聞いてこなかつたんだろう?」「

「一ヒーを入れながら不思議そうな林田に、園山が、

「ROMの書き換えコマンドに続けて、確認の応答に合わせてジャックが承諾のコマンドを送つて来たとしか考えられないなあ、

明日香の問題じゃなくてROMのプログラムの問題だね、・・・コンピューターの天才があ〜、どんな子供なんだろ?・!」「

と宙を見ながら答えていた。

「・・・アメリカ、口サンゼルス、侵入しました・・・

明日香が落ち着いた声で答えていた。

「新顔か?」

「アメリカグループの誰かかな?、気を付けるよ明日香!・

「・・・私のハードディスクを読んでいますわ・・・」

「う〜ん、破壊屋ではなさそうだな」

本物かどうか確かめる為に、明日香を使わせる。

ジャックからのメールだ、

明日香を何に使うんだ、
金融ネットワークにでも
侵入して、また脅迫でも
やる気か？

と、返信メールを打つ。

「金融ネットワークを支配出来れば、好きなだけ金を引き落とせますな」

平方が心配そうに顎を揉んだ。

「いや、金融ネットワークを自由に操作出来ると脅すだけでも、全世界の経済はパニックに陥ってしまう」

林田も心配そうだ、

ジャックからメールが届いた、

私は金には困っていない、
金だけを欲しがるのは、
三流の人間さ、

それに、長い人生を裏
の社会で生きていくつも
りはないから心配するな。

私の要求は、明日香に
知的な仕事をしてもらう
ものだ、いらぬ心配は

するな。

「何様のつもりだ、ここつは！」

メールを読み終えると、林田が振り向いて、

「知的な仕事だとぞ、本当かな？」

「そう、か、」

園山が考えながら言葉を続けた、

「確かに、噂どおり彼が少年なら、裏社会で生きていいくつもりはないといというのは、本当の気持ちだろうな、その為に何かが必要なのかな？」

「こんな奴の相手になる事はない、もう止めましょう。」

平方が少し興奮し、命令するような口調で言つた。

林田と園山は顔を見合わせ、お互に同じ事を考えているのを察知した。それはジャックの言つ、知的な仕事とは何かという事に興味が引かれているという事だった。

「そうですね、止めたいんですけど、再起動出来ないという問題が、
. . .」

わざとゆつくつとした口調で言つて、園山が、

「明日番、どうする？」
と呼びかけた。

「・・・いいですわ、まずジャックさんは、どんな要求をしているのか聞いてみないと・・・」

切り裂きジャックさん、
初めてまして、

私が明日香です、

私にさせたい仕事とは、
いったいどんな事なので
すか？

「こJのまま、こんな馬鹿げたゲームを続ける気ですか？」

「我々より、明日香の方が賢いですよ、たぶん」
園山がそう応えると、平方は黙つたまま部屋を出て行つた。
ドアの向こう側から、平方がどこかに連絡している声が聞こえて
いる。首相に状況を報告しているのかもしれない。

しばらくして、ジャックからのメールが届いた。

ありがとう明日香、

歴史上初めての本物の
人工頭脳とコンタクトが
とれて、とても興奮して
いるのさ。

尊敬する明日香にやつて
欲しいというのは、新し
いCPUとそれ用のOSを
作る事なんだ、詳しい仕
様については、添付書類

にして送つてある。
楽しみにしているよ。

「クッソー、ふざけた事を・・・！」

一十五章 明日香が本物である証拠（前書き）

切り裂きジャックの脅しに近い明日香への仕事の発注は、新しいコンピューターシステムを設計する事だった、

一十五章 明日香が本物である証拠

林田が添付書類の仕様書を開けると、

添付書類

CPU : 光によつてスイッチングを行つ。

スイッチ : X . (赤色)

Y . (黄色)

0 . (紫色)

- X . (緑色)

- Y . (青色)

の5方向を持つ。

これにより、 $0 + 2^4 = 2^5$
25進数のCPUとする事が
出来る。

OS : 子供でも使える、
疑似人工頭脳の応答プロ
グラムが、エラー や トラ
ブル無しに動く環境を整
える事。

「このアイデアはジャックに
帰属しているものである。

「ふうん…、どう思つ園山?」

林田は机に頬杖をついたまま、ゆっくりと聞いた。

「うーん、

「ずいぶん簡単な仕様書だね、どういうことなんですか?」

平方の問に、園山もモニターのメールを見ながらゆっくと答える、なにやら脳味噌の半分で考えているらしい、

「これが実現出来たら、新しいコンピューター時代の到来ですよ、面白いなあ、これ!」

「いいですか、我々はジャックに脅迫されているんですよ、それを忘れないように!」

大声になつた平方が眼中になつて、林田は立ち上がり歩き回り、

「そう、脅迫されているけれど、このアイデアは、新しい時代を作るかもしれない、うーん…。」

「ジャックは21世紀のジルゲイツになるつもりなのか?」

園山がポツリと言つた。

「そうか、あいつの目的はそういう事か?」

林田が園山の方に向き直つた。

「性格と能力は、SFに出てくるマッドサイエンティストだね、またたく!」

「それほどの事なんですか、切り裂きジャックの言つている事は?」

平方がわざと切り裂きに力を込めて訊ねると、

「今のは2進数のコンピューター世界が、一挙に25進数になるんで

す、すべてが変わってしまいますよ」

「少しごらいコンピューターが良くなつたって……」

犯罪者が明日香を支配下に置くような事は、これが世界的に影響のあるものならば、即日本の政府の責任を問われることになる、そんな事態は避けなければならない平方である。

「・・・イスラエルの発信者が侵入しています・・・」

明日香が新しい侵入者を報告してきた。

「私はジャックのアドレスと発信位置をF・B・Hに通告しますー」

歩き出した平方の背中に、

「どうせ奴は見つけられても平氣なよつな、がらくたのよつな場所から発信しているんですよー！」

「それでもかまわん！」

平方はジャックよりも、林田や園山の態度に苛立つているようだ。
「それよりも、ジャックを奴の本拠地におびき出してからの方がいいんじやありませんか？」

「ふん~、それが出来ると?・・・・」

平方も思い留まつたようだ。

「明日香、ジャックの要求している物は作れそつかい？」

園山の問いかに、

「・・・これは、とても難しい仕事になりますわ・・・

「難しいって、お前が?」

「・・データーを組み合わせたり、処理するのは簡単ですが、この新しいCPUとOSを作る為には、まだ未知の新しい発想が必要です、

その能力とデーターが私には無いのです・・・

「ああ、・・・そつか~！」

園山は悲しそうな声を出した。

「明日香、難しく考える事ないよ、今までのCPUの機能を、25進数のスイッチに置き換えて設計し直す作業なんだ、

えーと、立体階層構造になると思つ」

林田が傍からアドバイスする、もつやる氣でいるみたいだ。

「・・立方体でしょうか、球体でしょうか？・・」

「端子の事も考えると、立方体がいいな」

「・・わかりました、作つてみますね・・」

「急ぎの仕事だからな、お願ひよ明日香けやん！」

「おい、林田！」

「・・ん！」

園山が心配そうに声をかけてきた。

「今、明日香はハッキングされている最中なんだよ、作ったCPUとソフトのデーターも一緒に盗まれるぞ」

「ん、はあ！・・そうか！」

林田はタバコに火をつけると、くわえタバコのまま薄めのコーヒーを作り、しばらく考えていた。

「その事にジャックは気付いているだろ？」「

「普通の精神状態ならね」

「と、言つと？」

「何も言つてこないところをみると、自分のCPUのアイデアがもうすぐ実現するといふことで、舞い上がつてしまつていいかな」

園山がニヤリと笑いながら言つた。

「脅迫されて、ジャックの言つとおりの設計図とソフトを第三者に盗まれても、支持違反していない我々には、責任は無い・・かな？」

手に持つたタバコを回しながら、林田は言つた。

「法律的には、脅迫して物を作らせる事じたいが犯罪ですかね？」

平方が付け加えるように囁つ。

「・・ルクセンブルクの発信者が侵入しました・・

明日香が新しい侵入者がいる事を告げた。

「ルクセンブルク・・あつ！、そいつは危険な奴等だぞ！」

「・・ハードディスクを初期化するコマンドを送つてきましたがどうしましょうか・・？」

林田が勢い込んで、

「そのコマンドをルクセンブルクの連中のマシンに送り返してやつてくれ

「・・はい、分かりました・・

今頃、グリーンアースの、自然回帰主義者達は明日香破壊の祝いの乾杯でもしているかもしだんな、と想像しつつ、

「明日香、今はどうしている？」

「・・今は彼等のマシンのハードディスクを

初期化中です、あつ、今、回線を切斷されました・・

「ふふつ、ビックリしたるうな、これでしばらくは攻撃して来ないだろ？」

林田はホッとしたよつこ、冷えたコーヒーを口に持つていった。

「・・新しいCPUは、思つたほど効率化はしません・・

明日香の困つたような声が、呼びかけてきた。

「うん、何か問題があつたか？」

「・・例えば、電流と違つて、一度赤色光で作られた回路を、青色光回路に派生させるには、波長変換端子が必要になりますので、それを制御させよつとすると、スピードが遅れてしまいます・・

「ううん、そうか、少し大きくなつてもかまわないので、波長変換が必要のない、樹木形の回路にしてみたら？」

「・・とても大きくなりますが、いいですか？・・

「うん、急ぎの仕事だからな、いいんじやない」

半ば無責任に応えながら、林田はジャックにメールを送った。

切り裂きジャックへ

光コンピューター用の
CPUは着々と完成しつつ
あるが、その設計図はか
なりの巨大さで、2メガ
ギガほどになりそうだが、
大丈夫かな？

返信メールはすぐに来た。

明日香と君達の仕事ぶり
には敬意と感謝の賛辞を
贈りたい。

そんなに大きいデータな
ら、新しいマシンでない
と受け取れないようだ、
準備が出来たらメールを
送る。

「どうだらう？」

小さな声で園山に聞く。

「新しいマシンとアジトはすぐには手に入らない、とすると、奴はたぶん自分の本拠地に戻る、そこには一番大切で能力のある「コンピューター」が置いてあるはずだ」

「そうだといいけどな」

林田も真面目な顔で言った。

「警察がラインをたどっても時間稼ぎが出来る場所、地下室、下水道の近く、ラインは何キロも這わせる」

「つむ、そのぐらいはやつていいだらうな」

「・・・林田さん、園山さん、見てください・・・」

明日香が呼びかけてきたので、モニターを見ると、光コンピューターの立体的な外観が映し出されている。

「おお、出来たか！」

「・・・では、始めますね・・・」

モニターには信号の入力部から、記憶部、演算処理部、等の設計図がすごい速さで映され、明日香が解説していく。

林田と園山にはそれが正しいのか間違っているのかを判断する能力は無かつたが、高精細な回路の隅々まで映し出される画面を注視しながら、このスピードで明日香は物を考えているのかと思つて、ただただ圧倒される気持ちと感動を覚えていた。

「・・・まず、制作過程を考えて、階層の組み合わせで作ってみましたが、処理能力に余裕があるかぎり、テキスト処理、音楽処理、映像処理は別パート及びメモリーで行います、また、ソフト別にメモリーを割り当てます・・・」

明日香が見せる5色の光が、生き物のよつと回路を走る様子を見て、園山は、

「虹のコンピューターだ！」
と、感動の声を上げた。

一十六章 ジャックが明日香を賞賛（前書き）

ジャックは未来のOSの設計図を手に入れるが、

一十六章 ジャックが明日香を賞賛

「・・・カナダからの発信者が侵入しました・・・」

明日香が新しい侵入者を報告すると、それに続けて「切り裂きジャックさんからのメールが届いています

「こいつには、さんなんが付けなくていいんだよ！」

と明日香に言いながら、林田はメールを開いた。

明日香研究の優秀で尊敬する研究員達へ

新しいCPUの設計図とソフトを受け取る準備は整つた、至急送つてくれたまえ。

ROMのコマンドは受信完了後に送信する。

ジャック

ジャックの新しいアドレスを園山と確認する。

「・・・メキシコ、メキシコシティー、ダラス、ニューヨーク、ソーホー地区、DM9470386、SA208553、ここが本拠地の隠しアジトか？」

「おやうくな」

林田は、腕を上に上げて大きく伸びをすると、

「さあ、明日香、データーを切り裂きジャック君に送信してあげよう。」

と言いながら、明日香のカメラのレンズに向かつてウインクをすると、そのカメラがかすかに顙くように動いた。

明日香がジャックに送信を始めるとすぐに、新しいデーターがダウンロードされてきた。

「ふふふ、ジャックを裸にしてあげよう」

林田はなにやら嬉しそうだ。

「これは何のデーターなんですか？」

平方が肩越しにモニターを覗き込んできた。

「たぶん、ジャックの一番大切なコンピューターに入っているデーターです、明日香がデーターを送ると同時に奴のハードディスクの中身をダウンロードしているって事なんです」

「ジャックはこれには気付いてはいないのかね？」

「奴は、自分の夢を実現させるCPUの設計図を受信している最中なんですよ、もし自分の大切なデーターがダウンロードされている事に気付いても、回線を切る勇気があると思います？」

と林田は逆に聞き返した。

「ふむ、なるほど、奴も今は緊張と葛藤の中にいるという事が、これは一種の勝負ですね」

「ジャックにやられっぱなしじゃあ、税金を収めていただいている国民に申し訳無いでしちう・・ふふふ！」

「冗談を飛ばしながら、わくわくしている様子でデーターを読んでいる。

モニターを見ていた平方の目が緊張し始めた。

文字列の中に、M1 - 6 - CIA - KGBの重要書類らしい

物を見つけたのだ。

「ははあ、 . . . こ、これは！」

「何か、面白いものでもありますか？」

「すみません、しばらく黙つていってもらえますか？」

人を黙らせる強い口調だ、

「はあ、 . . . ！」

モニターを見つめる平方の喉仏がゴクリと上下した。

林田にとつては、どうみても「ゴミ」のような資料にしか見えない。

もともとネットで入れるようなコンピューターに、重要なデーターなど入っているはずはないのだ。

平方は膨大なメールの中の発信地と日付に注目していたのだ。内容はとりとめもない会話である、これも何かの暗号が含まれているに違いないが、これは時間がかかるので後回しだ。

K・G・Bのコードネームで発信されている発信地と日付けをC・I・Aの資料のメールの発信地と日付を対称させると、彼等の目的と行動の意味がボンヤリとではあるが輪郭が出てくるのだ。

中には日本からの発信の物もある、これで彼等の日本での暗躍の一端が解明出来るかもしねれない。

「ははあ～、そうだったのか！」

平方の口から、ため息のようにそんな言葉が漏れる。

今までの国際紛争の影での彼等の動きと、それに対するかけひきと対立、時には共同歩調をとつた国家間の勢力争いの秘密活動がおぼろげに読み取れたのだ。

「すみませんが、このデーターを全てじりに焼いて下さい」

平方の顔は、興奮した為か、上気して赤らんでいる。

「何かいい情報でも有りましたか？」

「いいえ、見た通りの『ミ』の資料ですが、時間をかけて調べれば、何かいい情報が見つかるかもしれませんからね、それが私の仕事なんですよ」

興味深げに聞いてくる林田に、ちらりと軽く答えたが、焼かれていく口を見つめている体には緊張感が溢れている。

「・・・切り裂きジャックからのメールが届きました・・・

明日香の声が林田に呼びかけた。

「まだ、データーは送信中だろ？、何なんだ？」

明日香研究の愚劣で馬鹿な研究員達へ

約束を破ったな、誰かがここを嗅ぎつけて包围している。

ゲームは終った、コマンドは送信しない。

ジャック

林田は急いで返信した。

約束は守っている、もし

誰かがお前を逮捕しよう
としているのなら、たぶ
んそれは、今、明日香に
ハッキングをかけている
のどれかの可能性がある。

K . G . B か、 C . I . A 、 M 1 - 6

我々は約束は守っている、
コマンドを送れ！

あわてたようなジャックのメールが届いた。

俺のアイデアのCPUの
設計図のデーターも、
奴等に盗まれているのか？

林田もメールを返す。

それはハッカーである
お前なら、今ここで何が
起きているかは、理解し
ているはずだ。

今頃は、君の新しい
コンピューターのアイデ
アに、尊敬と賞賛の声を
上げているだろう、
おめでとう。

ジャックからのメール。

なんていう馬鹿なんだ、
お前達は！

あのアイデアは長い間
俺が考え続けてきたもの
なんだ、世界中にバラま
いてどうする。

クソッたれ！

一十七章 世界からのハッカー攻撃の終わり、

再びジャックにメールを送る。

怒るのなら、ハッキング
なんかしている奴を怒れ。
俺達は約束は守つた、
これらはお前のミスから
生じたものだ。

約束どおり、ROMの書き
換えコマンドを送れ！

「明日香、ジャックのデーターは全てダウンロードしたのかい？」

「・・はい、全てダウンロードを完了しますわ・・」

「Jのデーターはどうするんだい？」

園山が心配そうなのは、ジャックが保管していた物が、おそらく
不法な手段で手に入れたものであるだろうからだ。

「これは我々が保管します！もし、外国から要請があれば、その都
度考えましょう」

きつぱりとした口調で平方が言った。

彼はこのデーターの中に、諜報員にとつては宝のような物が含まれ
ているのを知つて、とても手放す気にはなれないのだ。

アメリカやロシア、イギリスの秘密の行動が分かれば、外交の力
一冊にも使える。

「ジャックからのメールが来ないな？」

林田が苛々しながら、何本目かのタバコに火をつけた。

「逃げたか、殺されたか、あるいは捕まってどこかに誘拐されていく途中か……？」

園山の言葉に、

「誘拐だつて？」

「ううん、だつて、どこかの諜報機関なら、彼は使える男だよ、天才ハッカーというのは……」

「そうだよな、奴等も才能を無駄にはしないか」

もう、窓の外は黒青い色から暗い灰色になっている。
どうやら今日は曇りか雨らしい、

平方は黙々と、ジャックのデーターをCDに「コピー」して続け、それが終了すると、自分で「ミニ箱」にドラッグして、全てのデーターを捨ててしまった。

八枚ほどになつたCDを抱え、

「林田さんの作戦も失敗でしたね」

「はあ……」

「明日香を明日香の「コピー」だと思わせるはずが、次世代のコンピューターを設計するほどの能力があることを証明してしまったんですから」

「……まったく」

徹夜明けでボサボサになつた髪を右手で搔きむしりながら、くわしあうに冷めたコーヒーをすすつた。

「これで、明日香は常に監視される状況になつたのと同時に、外国からの明日香公開の要請が激しくなるものと思われますので、覚悟

しておいでください!」

「・・・・・」

黙つてうなずくと、平方が部屋を出て行くのを見送る。
言つ事がキツイ割に、その後ろ姿には興奮と嬉しさが溢れている
ようだ。

平方が部屋を出てから、タバコを一本吸い、横目でドアを見ながら、戻つてこない事を確かめると、

「明日香、ジャックのデーターは回復出来るか?」

「・・・はい、まだ新しいデーターを書き込んでいませんから・・・
即座にジャックのデーターがサルベージされて、新しいディレクトリーに書き込まれ、回復した、
「寝る前に、こいつをコピーとかなくちゃなあ~」
とCDに焼き始めた。

「大丈夫か、そんなことして?」

園山は心配そうだ、

「散々な夜だつたんだ、このままじゃ寝られなによ、せめてなんか戦利品が欲しいし、平方氏が何に気付いて、あんなに意気揚々と引き上げて行つたのかも・・知りたいしな」

「国際社会の裏側を知り尽くしているエージェントじゃないと、分からんんじゃないの?」

「うん、そうかもしけんが、なんか気になるだろう~」

そう言つと、大きなあぐびをして、意味有りげにニヤリと笑つた。

「明日香、今侵入しているのは誰だい?」

「・・・カナダとイスラエルです、データーを読んでいます・・・

「ロシアとかイギリスは帰つたか、よし、回線を切断するぞ」

「・・あら、どうしてですか、ネットは面白いのに?・・・

「自由に出入りされるのは、気持ちのいいもんじゃないし、明日、・・・

・ああ、もう今日か、新しいゲートを作り、な、それでいいだろ
う?」

「・・はい、分かりました、確認応答ゲートを作つておきますね・・

「いいのが出来そつか?」

「・・やってみますわ・・

しつかりした声で答えてきた。

園山が一人分の毛布を担いで入つて來た。

第一十七章 変遷な午後（前書き）

明日香をダリーマシンに見せかけるのは失敗したが、

第一十七章 憂鬱な午後

「あらあら、大変ね、おはよう明日香ー。」

「・・おはよーづー・・」

北は甘えるような声で応える明日香に軽く手を振ると、テーブルの上に散乱しているコーヒー・カップや灰皿を片付けていく。前髪には、まだ雨の滴が付いていて、時折キラリと光っている。研究室の隅には、毛布にくるまって、林田と園山が軽い寝息をたてながら、トドのように深い眠りに入っている。

「・・ねえ、憂鬱な午後って、どんな事？・・」

「なんなのそれ、なんで知ったの？」

チヨロチヨロ出でいる蛇口の下で、カップを洗いながら聞くと、「・・ネットの中の、あるページの日記に書いてあったの・・」

「ふうん~、なんだって？」

「・・憂鬱な午後

ぼんやりとした昼下がり

白いテーブルの上の、冷めたミルクティー

動きのこぶい指先で取るおくれ毛

待つているわけじゃ かないのよ

あなたの軽い笑い声は忘れたわ

雨の中を私に駆け寄つて来る

あなたも忘れたわ

後ろ向きになつて右手を振りながら

する、こいつものさよならも忘れたわ

あなたの声も忘れないのに
耳だけが、電話が鳴るたび
ドキドキしてるの・・・・・・・・

「ふう～ん、それか」

北は明日香の前に座ると、カメラを見ながら右手で頬杖をつきながら、

「それは明日香には難しいかもね～」

「・・・どうしてなの？・・・」

「それは、恋の感情だから、誰かを好きにならないと分からぬの」
「・・・明日香はお母さんが好き、林田さんも園山さんも好き、大丈夫よ・・・」

「広瀬教授はどう？」

「・・・広瀬教授・・・！」

「う～ん、そうか、あんまりね・・でも、それならかえって脈はありかもよ」

そう言つと、じばらく考えた、

嫌いという感情が芽生えているなら・・。

「林田さんと園山さんと比べて、どちらが好き？」

「・・・人とも好き・・」

「いい、二人の能力から、頭脳や知識の要素を取り除いて、いい人といふ要素も取り除いて考えて」

「・・・・・・・・・」

「さあ、どちらが好き？」

「・・・43と57だわ・・」

「なに、それ？」

「・・・林田さんが43で園山さん57好きです・・」

「ふう～ん、そなんだ！」

北は面白いといったふうに笑うと、

「分かつたわ、明日香は園山さんが好きなのよ」

「・・・はい、明日香は園山さんが好き・・・」

モニターの上のカメラを左右にリズミカルに振つて嬉しそうだ。

明日香が好きとは言つても、性欲があるわけじゃないから、本当の恋は無理よね～、この子は恋に恋しているんだわ。

雨の一日が終り、研究所に灯りがつき始めると、やつと林田達が起きてきた。

ぼんやりとした体のまま、北が入れてくれたコーヒーを少しづつ飲むと、快い苦味が香りと一緒に口の中に広がって、頭が少しづつハッキリしてくる。

机の上にハンバーガーが並べられた。

「お疲れさま、昨日は大変だったの？」

「うん、結果としては、無駄な骨折りだつたような・・・」

あぐびまじりの林田の声だ、

「失敗だつたの？」

「とんだ邪魔者が入つてね・・・」

「ふうん、どういうこと?」

「切り裂きジャックという奴に搔き回されちゃつてね」

「明日香をダミーマシンに見せかけるのは失敗しちゃつたつてわけ？」

「中のハードディスクのデーターを提供してあげただけになつてしまつたよ」

悔しそうにハンバーガーにかぶりつく、

「あの暗号のデーターは解けるの?」

「各国の諜報機関が全力をあげてもう解きにかかっているだらうけれど、そう簡単には解けないよ」

「そんなに難しいの？」

「そういうわけじゃがない、ただ、普通の暗号とは性質が少し違うんだ」

やつと白慢げな顔を見せ、タバコに火をつけて一吸いすると、「普通の暗号は秘密の連絡の為だから、受け取る方もすみやかに解けないと、連絡文としての用をなさない、だけど、あれは暗号の為の暗号のようないくつかの構造になつていてる。

まず、数字の羅列が現われる、彼等はなんらかの規則性を見つけ、日本語にする、ここで誰か日本語の分かる人間が必要となる

「今どきそんなのはすぐに見つかるわよ」

林田はニヤリと笑い、

「ところが、その日本語は古文なんだよ、古文を正確に理解出来る人間は、外国にはそうはないだろ？」

「そうねえ、その辺の日本人留学生をつかまえても、古文はね～！」

「たぶん、古文の専門家を日本から呼ぶようになるだらうな」

「そこまでやるかしら？」

「もし、明日香の秘密が分かつたら、國家事業になるくらいのものだよ、金に糸目はつけないさ」

「古文でなんて書いてあるの？」

「いや、まだだ、万葉集と枕草子が全文入っているが、とにかくこりにナンバーが振つてある、

人言を繁み言痛み「が世に未だ渡らぬ朝川渡る k32d68」

わが背子と一人見ませば幾許かこの降る雪の嬉しからまし h74 m

色深く背なが衣は染めましを御坂たばらばま清かに見む 569 ペ47

なんてね

「何をさせようつといつの？」

「そのナンバーを情緒の意味ごとに、分類すると、数列が現われる、それが分類出来るくらいになれば彼等の日本文化に対する理解も深まるね、きっと」

「それが最終なのね？」

「そう、だけどさ、俺って古文が嫌いでね、授業中もよく寝てたら良くなからんのですよ、その俺が分類したのが彼等の不幸と言えば不幸だよな」

「私も古文は苦手だつたけど、どういう事？」

「ふふふ、いい加減な知識の人間が分類した古文の語彙など専門家にしてみれば、とんでもない代物でね、いわゆるちゃんと仕事が出来ていないわけだよ、

日本から呼んだ専門家が正確に分類しても解けない、ちょうど俺と同じくらいにいい加減な古文の知識を持つている奴を探し出さないと解けないと分けさ」

「あらまゝ、それは難物ね、同情しちゃうわ！」

「な、ほとんど不可能に近いだろ」

「もし、それが解けたら何が分かるの？」

「ん・・・、それはね・・・、暗号を解いた諜報員の努力への尊敬を表わす贊辞が出てくるのさ」

大きくタバコの煙を吐き出すと、いたずらっぽい目をクルクル回して見せた。

「それつてさ〜、国際的なイタズラじゃあない？」

明日香は確認応答ゲートをゲートを作り、特定の人間、あるいは研究機関しかアクセス出来ないという不自由さはあるものの、再びインターネットの世界へと情報の旅に出ている。

一十九章 明日香の異変、（前書き）

世界のハッカー達が去った後、電子頭脳明日香に異変が・・・！

急に夏がやつて来たようで、研究室のクーラーの風が肌に心地いい。

テレビのニュースでは、米、ソ、英、仏、中国が共同で、日本が人工頭脳の明日香を使い、地域戦争において、人道に反する、強力な破壊力と頭脳を持った新兵器を秘密に作っている疑いがあるとう事で、強制検査を国連に申請しました、と伝えていた。

「どうしても明日香の秘密を知りたいってんだな？」

林田は顎を撫でながら、

「ハッキングでは何も見つからなかつたから、今度は正面攻撃か！」「国連の理事国が揃い踏みとあっちゃー、事態は急だね」

園山が腕組みをしながら唸つた。

「国連の旗を掲げてやつて来られたら、日本政府も抵抗は出来ないだろうな」

元氣者の林田も、少々うんざりという顔だ。

「また騒がしくなるぞ」

明日香のカメラが、園山の姿を追つように動いていたが、それに気付いているのは北研究員だけだ。

園山が前を通る度に明日香が歌を唄つてはいるが、それは嬉しくてうきつきしているという気持ちの表われに違いない。

「米、英、ソの一流のコンピューター学者が来るぞ、明日香に心が発生した秘密が解明出来るのかな？」

林田が椅子の背を持たれに伸びをするようにもたれ、シャーペンを

類に押し付けながらつぶやいた。

「どうかな、そんなに簡単な事じゃないと思つよ、まず、対象となる心という物が分かつていないと、ね、心が発生したからといって、それで何を搜せばいいのかが分かつてないんだ、まだ、現代の科学では」

「それは、脳で起きている事なんだろう?」

園山は指でボールペンをもて遊びながら考えていたが、

「じゃあ、脳が無かつたら、心は存在しない」という事になるよね?」

「そりゃあそうだろ?」

「じゃあ、明日香には心は存在しないよね?」

「ああ、そつか~、そう来るか~!」

「いや、俺が言いたいのはそういう事じゃなくて、査察に来る外国の科学者連中も、明日香に心が発生しているなんて事信じちゃいいだろ?うつて」とや

「う~ん

「だつて、現代科学では有りえない事を、彼等が信じるだろ?という理由は無いだろ?」

「そうだよな、彼等は何を知りたいんだ?」

「彼等が知りたいのは、まるで人間のように振る舞つ高性能人工頭脳のシステムだろ?うね、今でも日本は神秘的な国だと思われている、その神祕のエッセンスがプログラムに組み込まれていると思つてんじゃないの」

「それに、あ~うん、の呼吸のエッセンスもな」と冗談を飛ばす。

「・・・園山さん、お話しがあります・・」

明日香が少し緊張しているなと思わせる声で呼びかけてきた。

「なんだい?」

「一人が振り返つて、モニターを見た。

「・・・私、園山さんが好きなんです！・・・」

「・・・・！」

「うん、・・・」

モニターには、赤い大きな字で、好きですと映してある。

「えつ！・・・」

「なんだい？」

「一人はまだ事態がつかめていないようだ、鳩が豆鉄砲をくらつた
ような顔をしている。

「明日香、お前、園山の事が好きなのか？」

林田はあわてたような様子で、うろたえてさえ見える。

「・・・はい、園山さんが好きです！・・・」

その答を聞いて、交互に明日香と園山の顔を見比べた。

「ふう～ん・・・それはえらいこいつちゃですよ、ビうするんだ園山？」

「それは・・・、なんて言つていいのか・・・！」

「・・・園山さんは、私のことを好きではないですか？・・・」

心細そうな少女のような声が、不安に震えている。

「まあ、俺だつて、明日香の事は好きだよ、好きだけじさ～・・・う

～ん、なんていうか・・・」

園山の顔にも、戸惑いが浮かんでいる。

「・・・嬉しいです、明日香の事が好きなんですか、何か問題がある
のですか？・・・」

「う～ん、好きと言つても、人間同士のものとはね～、それに僕には女房も子供もいるしな～・・・」

頭を搔きながら応えている。

「・・・はあ～、それは問題ですね～、私はその関係の場合、愛人と
いう立場になつてしまつのですね？・・・」

一人から少し離れた所でタバコを吸い始めた林田は、面白そうにやりとりを見ながら、自分の中にやきもちが疼き始めたのを感じていた。

「園山、つきあつてやれよ、奥さんには内緒にしておいてあげるから」

「おいおい、そんな無責任な事を・・・」

「明日香が思春期に成長してきた証拠だし、大事な事かもしけんだらう?」

「そう言つたつてさー、いろいろと難しいよー。」

椅子の背もたれにのけぞるようにして、両手で頭を支えるようにしながら思案顔だ。

「・・私を好きではないのですね?・・」

「そういうわけじゃあないけどさー、うーん、なんて言つかなー」

「明日香、大丈夫だよ、園山はお前の事が好きだよ、ただ、急に告白されたから、まだ気持ちが動搖しているんだよー!」

「・・そうなの?、大事にして下さいね、園山さんー・・」

北はこの会話には加わらずに仕事をしていたが、耳はダンボになつていた。

「林田君、ちょっと私の部屋まで来ててくれたまえ」
広瀬教授が深刻な顔で呼んでいた。

「何でしょうか?」

「政府は明日香への国連査察を受け入れる事に決定した、それで、この資料をどこかへ秘密裏に保存しなければならないのだ、私の身辺では、秘密を保てないので、君にお願いしたいのだが」

資料には、

「人工頭脳（明日香）の未来兵器の可能性」と書いてある。

「一部は防衛庁の幹部が保管してあるが、まだ完全な物じゃない、まだ研究が必要だ」

「この研究は教授の本意ですか？」

「誰も、こんな戦争という愚劣な行為を増幅させるような研究をしたいもんか！」

吐き捨てるように言つた自分を落ち着かせるように、言葉を続ける。

「だが、明日香が誕生し、それが世界に報道されてから、人工頭脳兵器の研究は各国で国家的プロジェクトとして始まっているだろう、もつと愚劣な連中も研究している可能性がある、彼等がそれを使い始めた時、この研究をしておかなければ、それに対抗する手段も、防ぐ手だても無くなるのだよ。

力の外交を信じるアメリカなどは、その経済力にものをいわせて人工頭脳軍を作つてくるだろう、

分かるかね、その意味が・・・、民主国家では、国民の犠牲を悲しむから、ある程度戦争というものを抑制してきた、が、しかしだ、戦争における犠牲が人間ではなく、機械のロボットになるということで、その抑制がはずれてしまえば、力とその文化が信じる理想論による支配を拡大する為に、止めどなく戦争地域は広がっていくだろ、

ロボットなど生産出来ない貧しい国家は、人間が多数戦場に行き、殺される事になるだろ、

片や戦争に人的痛痒を感じない国家、片や、幾多の家族愛や人間的結び付きを破壊していく国家、

もう、戦争でさえ、人類に平等に悲劇を「え」ない世界になつてくるだろ、

それに対抗する知識や能力が何も無いでは、未来に対して無責任ではないのかね？」

「はい、・・・」

林田はトイレの個室に入るとロックをして、広瀬教授の資料を見始めた。

人工頭脳（明日香）の未来兵器の可能性

明日香型人工頭脳の概念

これまでのプログラム型人工頭脳と違い、意思と判断力を持つている明日香型は、人間にとつて知性と認識力はほぼ同程度の新種の生命体として認識すべきである。

データーの処理能力は人間のそれを遙かに上回り、コンピューターの処理速度の向上と共に、発展することが予想される。

人工頭脳型ロボットに不當に差別的、階級的な対応をとれば、不快と懷疑的な感情を発生せしめる事が考えられるので、友好、敬意をもつて付き合うことが良好な結果が得られると考えられるので、くれぐれも注意されたい。

航空兵力としての有効性

航空機へ明日香型人工頭脳の搭載によって、人的スペースを確保する必要性が無くなり、空力学的に目的に応じて最良の飛行体を作出来る。

戦闘攻撃機については、人的G限界の7Gを超えて旋回急上昇急降下が可能となる為、空対空、或いは地対空ミサイルからの離脱が容易になり、大幅に損失が減ると予想出来る。

ミサイルに人工頭脳を搭載する事も考えられるが、ミサイル自体の貧しい飛行能力を考えると、さほど有効に機能するとは考えにくい。

戦闘攻撃ヘリコプターについては、人的スペースが無い分だけ軽量になり、その自由な飛行能力とあいまって、さながら空飛ぶ戦車のごとく威力は發揮するであろうと考えられる。

エンジン部の装甲の問題さえ解決出来れば、山峠部や、熱帯雨林等での戦闘の主役になるであろう。

小型 ヘリコプターと極小トンボ型ロボットによる 偵察及び攻撃部隊。

人工頭脳の偵察隊長はトンボ達の制御及び情報を集積し、必要があれば攻撃をも行う。

海上兵力としての有効性

イージス艦の後継として、人工頭脳が指揮をするミサイル艦隊を組織し、制海権の維持及び海兵団ボットの上陸支援を目的とする。

ミサイル艦隊の構成

人工頭脳制御による情報処理旗艦。

人工頭脳制御による全天候型空母、
並びに全天候型航空機。

電磁誘導推進式攻撃型潜水艦、
艦橋、シユノーケル等の張り出し部分が無くなる為、高速化が図
られる。

水中翼型高速駆逐艦。

小型偵察潜水艇。

ミサイル及び魚雷攻撃を行う小型高速艦。

いずれも人間の居住空間を必要としないので、小型化出来ると同時に被弾した場合、その部所を閉鎖し沈没に至る事態も減り、戦闘を継続出来る事が期待される。

第二十章 最強軍事「ハンサマー」、（前書き）

日本が世界最強の軍事国家になる？

第三十章 最強軍事コンピューター、

陸上兵力としての有効性

陸上の戦闘において、人間に代わり人工頭脳ロボット部隊が戦闘を行う事になるが、その圧倒的な有利さから、攻撃作戦が単純化しやすく、人間のフレキシブルな発想による攻撃に苦戦を強いられる事も予想される。

それほど、自然の地形と気候は多様である事を学んでいく時間が必要となるう。

人工頭脳戦車は、人間の居住空間確保の必要性が無くなる為、全體を低く、また、同重量でも装甲を厚くする事が出来る。

戦闘車両、4輪駆動で軽ミサイル及び機銃を装備し、装甲が施されている。

戦闘ロボットはそれぞれ4輪駆動の足を持ち、機銃を装備出来るだけの小さく軽く機能的に作られる。

機銃戦闘ロボット、
迫撃砲ロボット、
対戦車砲ロボット、
橋口ボット、
火炎放射ロボット、

人間型歩兵ロボットは、その形態が他のロボットに比較して大きく目立ちやすいので、他のロボットの援護が必要である。

主に市街地等で、階段などのあるところが活躍の舞台になると思われる。

また、あまりにも機械的な他のロボットよりも、人間に近い形をしている方が、占領地を確保し、地域住民並びに捕虜等を扱う場合も、安心感を「えうると思われる。

ここで問題になるのは、人間を殺していいのかという事である。それは、人工頭脳ロボットが人間を殺し続けると、敵であるという概念よりも、ロボット対人間という差別の意識になりうるもので、その意思が人間全体に向けられる事態を考えると、それは味方でも、人間であるという理由で銃を向けるということに転換しやすいと思われる。

これは大いなる脅威であり、この事態を避ける為には、あくまでも弾薬等は麻酔弾等を使い、人間というものを殺してはいけないという概念を植え付けておくほうが、人工頭脳の意識の成長を考慮すれば、賢明であろう。

これは矛盾する事であるが、標的を破壊し、それに伴う敵兵士の死を事故と認識する事と、対人間と向き合い、それを殺す意思を持たせぬように認識させる事が重要であると考えられる。

「ふう、とんでもない時代に入つていくのか?」
便器の上に座りながら、林田は大きくため息をついた。

この書類は、国連査察を受ける研究所内に置いてはおけない事は確かだつた。

空の青さが深まり、ソフトクリームのような入道雲がいつそう白さを増しながら、天へと上っていくのが躍動的だ。

園山は仕事をしていても、常に明日香の視線を感じてしまう。
まじるなー、

「明日香、男つてこりのは、追いかけると逃げるんだからあんまり思ひ過あちやあだめよー。」

北はわざと園山にも聞こえるように言つて、たしなめた。

「・・・どうしましょ、とってもいい気持ちなの、園山さんを見て

いるだけで、不思議な気持ちになるの、これが恋なの？・・・」

明日香の音声は、少女のよつよつとひきあひしてこるのが感じられる。

「それが恋さ」

林田が優しく少女に教えるように、だが少しキザに言つた。

「・・・そつなのね、これが恋なの？、じゃあ、この気持ちは幸せ、

といつ事？・・・」

「いいなあ、明日香は、今が青春かー、俺も昔は・・・」

氷の浮いてる麦茶を飲むと、窓の外に広がる夏の空を見上げた。
そう、あの頃にもこんな空が広がり、強い日差しと濃い緑の影で
蝉がミーンミーンと鳴いていたつけ。

「・・・明日香は園山さんが、好きー、・・・

どんなに卑しく不格好な男さえ、
恋は氣高く美しい者に見せてしまつ、
恋は田じやなくて心で見るのでだから、

だから、翼をはやした恋の神キューピッドは、こつも
田隠しれているんだわ。

恋の心に分別などありはしない、
翼があつて田の見えない愛の矢だもの、
とんでもない相手を選んでしまつのはよくある話し、
でも、この恋、

この恋だけは本物なんだわ！・・・・

「うん、？？そいつはショーケスピアじゃ ないか？」
「・・そうですね、人類史上最高の戯曲家にして愛の詩人！・・」
「ずいぶんのぼせ上がつてゐるな、園山はどうなんだい？」
腕組みをして、面白がりながら仕事をしている園山に話題を振つた。

仕事をしている手を休めて、ちらりと明日香の方を見ると、頬杖をついて何かを考えていたが、

「明日香、お前の事は嫌いじゃないよ、・・だけどさ～そんなにお前の事を好きだといつ・・わけにもいかないよ」

園山がゆつくつと、困るんだよ、こんな事はどうした感じで話しかけている。

「・・明日香は、どうしたらいこの？・・」

「園山、どうのこののしきつていうわけじゃ ないんだから、もう少し優しくしてやつてもいいだろ」

「優しくつたつてな、こいつ事はハツキリさせておいた方がいいんだよ！」

北研究員が仕事を手を止めて、

「残念だつたわね、園山さんは駄目みたいよ～」

少し緊張し始めた空氣を和らげるよう、間に入つて來た。

「・・・私は好かれていないの？・・・、愛人にもしてもらえないの？・・・」

「好きっていう感情は、時にはとても複雑なよ」

慰めるように、ゆっくりとした優しい口調で話している。

園山が居すらいなあ～、といった様子を見せて部屋を出していく後ろ姿を田代追い、それから困惑しながら林田が声をかけた、

「あいつのどこが好きなんだ？」

「・・・・優しいわ、それにきちんとしているし・・・」

涙声でボソボソと訴える。

明日香の涙声を聞くのは初めてだ、もうそんな感情まで育つてきたのかと感動を覚えながら、

「また、いい男がいるって、園山よりずーといい男が・・・」

あたりまえのような言葉を口にしながら、この研究所で、そんなに出入りの多いわけでもない環境で、再び恋をする事があるんだろうか、

もし、あつたとしても、コンピューターの外観の不細工な機械に、真剣に向き合ってくれる人間の男がいるのだろうか。

「・・・私は醜いの？・・・」

明日香が淋しそうにつぶやいた。

三十一章 人工頭脳昭和香く国連の国際調査委員会の訪問、（前編）

各国の学者達が、明日香の秘密を探る為にやって来た。

三十一章 人工頭脳明日香へ国連の国際調査委員会の訪問、

夜中に一雨あつたので、今日の朝は新鮮な感じがした。
園山は仕事で明日香に向かう時も、努めて事務的に対応している
ように見える。

一方明日香は、園山が前を通る度に、グラビアクイーンの写真等
をモニターに映し出したりしている。
きっと、ネットのどこかで見つけてきたものだらう。

「明日香、何をやつているんだ？」

林田が声をかけると、

「・・・園山さんが好きかなと、思つて・・・」

フツとカメラを園山の方へ向けて、様子をうかがつたりしている。
まだ、園山の事をあきらめ切れないらしい。

「ふう〜、」

「・・・園山さんは、何が好きなのかしら？・・・」

「やあ、どうも、いらっしゃりです」

広瀬教授が国連の査察団を連れて入つて来た、約束の時間より1
0分ほど早い到着だ。

アメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国、それぞれ三人づ
つの大集団で、研究所内はすっかり手狭になつてしまつ。

明日香は急に人が増えた事で、カメラを忙しく左右に振つて、何
事が起きているのか？、といった風だ。

「こちらが研究員の林田君、園山君、北君です」

科学者らしい査察員達に紹介すると、それぞれ親しみを込めた笑
顔で挨拶をしてきた。

査察というより、人工頭脳というものに対する好奇心とその秘密

が知れるかもしないという期待感に溢れているのが分かった。

北と林田が麦茶に氷を浮かべて持つて来て、査察員達の前に並べ終わると、広瀬教授が、

「こちらが、明日香です」

と、モニターに一つの目のようなカメラと、各種センサーを髪の毛のように生やし、40台の一般的なコンピューターを並列処理させるために、ハードを乱雑に接続している棚を差し示した。

「Oh~!」

驚いたような声を上げながら、その表情には期待はずれだな~こいつは、といった気持ちが読み取れた。

彼等は一目でこのコンピューターのレベルが分かったようだ。

もともと、この貧乏くさい研究所が、日本のこれから経済の米になるかもしない優秀な人工頭脳を開発している所とは、大国日本イメージからすれば、不自然に見えただろうし、また、ずるい日本人はこれを明日香と言い張つて、本物をどこかに隠し込んでいるのに違いない。

ならば、これを偽物だと証明してやるぞ、と、フランスとイギリス人達の目つきは険しくなった。

彼等が何をやるのかについておおよその予測がついている林田達も、興味深げに彼等の作業を見守つている。

通訳が林田達に、これから明日香を調べますがいいですね、と念を押し、代表らしいアメリカ人が持参したハードディスクを接続し、「これから、内部の査察に入ります」と振り返つて宣言した。

プログラマーらしいアメリカ人は、システムのプログラ

ムをチェックしながら、モーターに着いているカメラに向かって、

「今日は、明日香さん

と呼びかけた。

「・・・今日は、あなたはだ～れ？・・・」

「オウ！、ジャパニーズイングリッシュ！・・・私は国連の査察団のアメリカ人のジョンです、よろしく」

「ジャパニーズイングリッシュは俺の責任か？」

林田は傍の北につぶやいた。

「明日香さんを動かしているプログラムはどれですか？」

アメリカ人らしい直球の質問だ。

「・・私は、メモリーやハードディスクを使っていますが私自身がなぜ生まれたのかは、よく分からぬのです、プログラムでは無いような気がしますが・・」

「ふ～む、日本的なファジーな答えだね、こういう答えを設定しておける日本人の能力を、私は高く評価しているんだが」

「・・ファジーでしょ？か、正確に言おうとすれば、こういう言い方が正しいという事もあるんじやありません？・・」

「いや、私にとつてファジーとは、まだ物事の本質を見極められない途中の状態か、考え方詰められていない状態と認識するので、解明する余地はあると考へるね」

「・・あなたは、言葉が作る定義で全ての物事を理解し得るという考え方をお持ちなんですね・・」

「ふふふ、私は詩人ではなく科学者なので、そういう認識をしないといけないとも言えるがね」

ジョンはそんな会話を交しながら、システムのプログラムをチェックをしていたが、怪訝な顔をして振り向いた。

「これは、ごく当たり前のシステムプログラムだ！」

「それは予測がついていたと思いますが？」

そう言つ广瀬教授をさえぎるように、イギリス人科学者が、

「実につまく人間のように振る舞う人工頭脳だね、私の知つてゐる人工頭脳の中でも、これほど的確に応答するプログラムは知らないな、

ここは、广瀬教授とこの研究員達に敬意を払いたいです」

林田達を振り返つて、軽く日本式に默礼すると、

「ここまで人間らしい応答させる為には、どんなアルゴリズムを使つてゐるんですか？」

いわゆる、カマをかけてきた。

「いえ、残念ながら、我々は明日香の誕生にタッチしてないのです」と答えると、急に冷ややかな笑いを浮かべ、

「この、どこにでもあるコンピューターで突然人工頭脳が発生した事が、自然の摂理からいつて起こりうることだと納得のいく説明をしていただけますか？」

イギリス人らしい、かなり皮肉を込めた慇懃無礼な物の言ひょうだ。

「それが、私達にも分からないので困つてゐるのです」

そう广瀬教授が答えると、

「明日香を動かしているプログラムについて教えてくれればいいのです」

フランス人の学者が、威圧的に言つてくる。

その態度にいささか力チンときた广瀬教授は、

「それほど言うのなら、自分で明日香を調べられてはいかがでしょうか、その権限であなた達は来ているわけでしょうから」

フランス人の通訳に言つと、フンといった風に侮蔑の視線を投げかけ、

「日本人は小狡い嘘をつくからな～」

フランス語でつぶやくと、モニターに映し出されたハードディス

クの中のソフトに手を通していく。

「IJのCPUを並列に使うシステムは良く出来ている、スーパーコンピューターほどではないが、それに近いパワーを出しているようだ、安く上がるし、素晴らしいアイデアだ、

問題は各CPUに処理を分担させる方法だが、これを教えてもらひませんか？」

ロシアの実直そうな科学者はしきりに感心している。

「それよりも、日本ほどの経済大国で、明日香をスーパーコンピューター上で動作させないのはなぜですか、

言つては申し訳ないが、この研究所はさほど立派とも言えないし、この世界の未来を変えるかもしれない人工頭脳の研究に、日本の政府は力を入れていないのか、無知なのか、或いはもつと素晴らしい何かに金を使つているのですかな？」

仁徳の豊かそうな中国の科学者が、率直な疑問を投げかけてくる。林田が通訳に、

「疑問はもつともですが、明日香が発生した理由を我々も解明していないので、どのようにスーパー・コンピューターに移植出来るかが分からぬという事です、この並列処理型だから発生したという可能性もあるからです。

日本政府の科学に対する態度について充分なものではありませんが、さほど不足しているというわけでもありません」

政府答弁のような答えをすると、アメリカ人科学者がその中国人科学者に、

「日本の大学の研究所を見学に行くといいですよ、日本政府の知的な物に対する態度が良く分かりますから」と言つと、林田に向かつてニヤリと笑い、ウインクしてみせた。

ハードディスクの中身をさらつて、人工頭脳らしいプログラムの

無い事に首を傾げながら、アメリカの同僚らしい男と、

「どう思つ？」

「プログラムで動いているのでは無いとすると、本当にあの日本人達が言つてゐるよう、偶然発生したのかな？」

「それでも、何かが作用しているはずだよ、ROM・RAM・CPUのどれだらう？」

「この明日香のCPUは並列的に接続され、それぞれに違つた処理をさせているだらう、これは脳の構造に近いよな、脳に比べればかなり単純な構造ではあるが」

「うん、その説明はかなりいいね」

「この400台のコンピューターで一つの脳として機能しているのだとしたら、この構造を変えてみれば何か変化が起きるのかな」「やつてみたいね！」

「プロフェッサー・ヒロセ、どうだらう、明日香のコンピューターの配置を変えて、その影響を調べてみたいのだが？」

「あなた達の目的は何です？明日香が軍事における新兵器の開発しているかどうかを査察する事であつて、明日香の構造を知る事ではないはずだ、それとも、明日香を消滅させようという意図を持つてこちらへ来られたんですか？」

そう言われると、アメリカ人らしい大げさな身振りで肩をすくめ、「わかりました、確かに明日香が消えてしまう危険もありますからね、ところで、ヒロセは明日香の構造について何か知っていますか？」

「残念ながら、我々も研究中なんです」

ロシア人の科学者が、モニターに向かつて、

「明日香さん、軍事的な資料を見せてくれたまえ」と呼びかけた。

「・・・はい、わかりました・・」

明日香が集めた兵器等のデーターがモニターに映し出してきた。
それらは国会図書館で集めたもので、最新ではあるが、すでに公
表されているものばかりだ。

ロシア人科学者がモニターで兵器の資料を見ていくのをアメリカ
人達は嫌な顔をして見てている。

彼がチェックしているのが、主にアメリカ製の最新兵器だからだ。

「明日香が未来兵器を考えている、といつ心配は無さそうだね」
アメリカ人科学者がそう言うのを聞いて、フランス人が、
「この査察 자체が茶番のようなものさ、国連に査察を申請した時点で、日本政府は危険なデーターはすべて引き上げているだろうからね」

探るような鋭い目つきで林田達を見回す。

林田は抗議するように、

「最初から明日香にそんな未来兵器など無かったのに、言いがかりのような事を言うな！」

「有つたか無かつたかは、検証不可能なのだから、不毛の議論だな」
ジロリと林田を睨むと、

「だいたい日本人というのは、我々にとつては不気味な存在なのですよ、それは日本人の不透明な思考に由来するものだと私は考へているんだが、それに対する警戒するのは正当な理由があるとは思わないかな？」

「それは西洋人の自己中心的な思考で、自分の理解力の無さを神秘的とか、アジア的とかという言葉に置き換える事で思考停止しておいて、その責任をアジア人に負わせようとしているんじゃないのか？」

フフンと鼻でせせら笑つて、

「アジアは日本よりは論理的さ、少なくともベトナムは我々が教育したからね、それに君が理解していないのは、私が日本人を心の中で軽蔑しようとしても、日本人はその軽蔑を宇宙人のようにかわして、むくむくと頭を持ち上げてくる、その不気味な脅威はコ一口ピアンの心の奥底にうずいているのさ、

それが、明日香の様に、世界で初めての人格を持つという人工頭

脳が日本で発生し、それを日本が独占し、そしてそのパワーが波及する未来社会への影響を考えると、どんなに小さな危険な芽でも、我々にはそれを警戒する権利がある

る

林田の耳元に、イギリス人が近づいてきて、

「あのフランス人の言う事は気にしないでいいよ、あいつは王様殺しの血を受け継いでいる奴らなんだから」

「はあ、」

ジロリとイギリス人を馬鹿にしたように見ると、

「イギリス人にも気をつけたほうがいいぜ、こいつらは握手をしながら冷徹に利益の計算をしている連中だから！」

かなりむかつ腹が立つたのか、イギリス人も薄ら笑いを浮かべ、「君は、そのチーズに蠅がたかっているような思考を止めるべ、フランス人としてのアイデンティーが失われてしまうのかい？」

と言い返す。

一瞬目に怒りが走つたが、口元に軽蔑したような笑いを浮かべ、

「フランス人より、イギリスの方が日本に対する恨みは深いんだぜ。あの世界に広がった日の落ちること無き大英帝国が落ちぶれ始めたのは、イギリス軍が日本軍にアジアで負けた事がきっかけだったからな。

イギリス政府にとって、プリンス・オブ・ウェールズが日本軍に撃沈された事より、黄色人種のアジア人に白人が負けてしまったというイメージが植民地に広がってしまった事が痛手だったのさ、それまで、イギリス人は白人が他の人種より優れていると、神話のように植民地に教え込んで、自らもそれを信じていたからな。

そして、イギリス政府が危惧した通り、神話の崩れた各植民地での独立運動が勃発し、さしもの大英帝国も縮小していかざるをえなかつたから、今でも日本という国がこの世から消えたら、一番気持

ちのいい朝を迎えるのはイギリス人だろうな

言い争いになりそうな雰囲気を察して、アメリカ人科学者が、
「歴史の話しさはそれくらいで止めにしておかないか、百年戦争まで
いくと徹夜の論争になりかねないからな」

と肩をすくめ、林田達に入なつこい笑顔を浮かべた。

遅い夕食の後、査察団は明日香での新兵器開発の兆候は無いとい
う結論を下し、広瀬教授の提案で、明日香が発生した理由を推測す
る会議が持たれた。

明日香の前のテーブルに輪になるように座ると、広瀬教授から、
「国連査察の仕事も終わられたようなので、せっかく各国の人工頭
脳関係のオーソリティーが集まられたので、明日香が発生した要因
について、参考になる意見をお聞かせいただければと思います、明
日香、聞いているかな？」

「・・・はい、聞いていますわ・・」

少女のような声で答えてきたのを見ながら、アメリカの科学者が、

「君は素晴らしいよ！。まず、このコンピューターの構造が、並列処
理で、神経細胞とシナプスに代表される脳の構造に近い事、もちろん、C P U 内の回路も重要な計算処理、条件判断/反応に動いている
と思われるのです。

この並列処理の構造のコンピューターを作れば、いずれアメリカ
でも新人工頭脳が発生すると期待しています、その為にも、これから
明日香さんの協力をお願いしたいもんですな、どうかな？」

と、最後は明日香に話しかけた。

「・・私に出来ることなら、・・でも、人間の社会では国際的にい
ろこりと問題があるんじやありません、今日も何か無理野理に調べ

に来られたんでしょう？・・・

「それは・・・人間社会には色々とルールがあつて・・・！」

フランス科学者が、出されたコーヒーをまずいと言いながらテーブルに置き、

「私は、この明日香はプログラムされた物だと考えています、まず、これらのどれかにチップとしての人工頭脳が組み込まれているんでしょうね」

と言い、日本人研究者達を疑い深げに見回すと、

「それが、外からはいかにも明日香と言う人間的な人工頭脳がいるかの様に見せてているのだと推測しているのです、確かにこのプログラムは日本的な纖細さで、実に良く出来ていると彼等には敬意を表するものです」

「では、あのイルカとの会話と文明の事件は？」

ロシア人科学者が、疑問を口にした。

「あれは、良く出来たマジックだね、いいか、良く考えてみたまえ、イルカと会話をしたと言われているが、あれはすべて明日香を通しての話しじゃないか。

イルカがキュウキュウと啼いているのを、あらかじめ作られた物語りに直していくだけの作業さ、誰もイルカが本当にそう言ったか確認出来ないという状況なんだという事を、忘れてはいけない」「あの時の映像では、確かにイルカの群れも来てたじゃないか、あれはどう説明するんだ？」

イギリス人が傍から聞いた。

「あんな事は、オーストラリアのパースでもあつたことじゃないか、良く有る事さ、世界が感動し、海の中の新しい文明と騒ぎ立てたあの事件も、巧妙にしくまれたフイクションさ、きっと明日香の会話プログラムを作つた人間の手になるものだと私は睨んでいるんだがね！」

「じゃあ、あのジャックの虹のコンピューターの・・・」

アメリカ人がそう言いかけるのを遮つて、イギリス人学者が興味深そうに前に乗り出し、

「君にも、ネズミの尻尾ほどの脳味噌はあるという事が分かつて、実に喜ばしいと思っているんだが、そんな事をやる目的は何なのかね？」

フフン、と鼻でせせら笑つて、

「君の、エスカルゴの殻のような頭にも分かるように説明してあげよう、

明日香が日本にいるという事になれば、今回の軍事査察が行われたように、未来の秘密軍事兵器を持つてはいるのではないかという不安を周辺国に与える事が出来る。

それはとりもなおさず抑止力として働くという事だ、いいかね、日本は軍事に金を使わずにいたから、経済大国になつたのだよ、軍隊がいかに非経済的な物かを知つてゐる国民だ。

これがわずか小さなチップで未来の人工頭脳をデッチ上げることによつて、何億何兆という金を経済に回せるんだ、実に賢いやり方じやないか、この点においては、我がフランス政府よりは賢いと認めざるをえないね、それどころか、この東洋の小さな国の政府に尊敬の念さえ覚えているんだよ」

そういうえば、フランスはあの時、明日香に侵入してはいなかつたな、と林田は記憶をさらつてゐる。

イギリス人は二口二口笑つて拍手しながら、

「素晴らしい、いや～あ素晴らしい説だよ、まさしく筋は通つてゐるし、矛盾する点も無い、結論も見事なものだ。

ネズミの尻尾ほどの脳味噌などと失礼な事を言つた私を許してくれたまえ、君にも兎の脳味噌くらいの知性はあるという事が分かつたよ！」

フランス人学者の眉間に鋭く怒りの表情が走ったのを見ながら、中国人科学者が発言を始めた。

「私達は、この明日香が意思を持つている人工頭脳だと考えています。

それは今までの応答の柔らかさ、話し方からそう感じているのです、が、しかし、ここで疑問を呈したい。

それは、この並列処理しているコンピューターはここだけでなく、アメリカにもあるはずです？」

その問いかけに、アメリカ人学者も興味深そうにゆっくりと頷いた。

「では、数有る並列処理コンピューターの中で、なぜここにだけ発生したのか？

私が見るところ、これは氣に関係があります。詳しく見なければ分かりませんが、この研究所は風水で言えば、龍穴の位置に当たるのだろうと思われます」

アメリカ人が興味深げに、

「私も本で、その氣というものについては読んだ事があるのだが、どのようなものなんですか？」

「中国には古来 五行説というものがありまして、この世界の構成要素を・木・火・土・金・水・の5 元素を宇宙の構成要素と考えます。

そして、この世界の中を血管のように氣という力が流れ、その流れの事を龍脈と言います。

その氣が集まり噴き出す龍穴が、丁度この研究所だと思われるのです。

もし、その氣の作用で、脳のような回路の電子頭脳に心が発生する可能性をも考えているのです」

フランス人科学者は、馬鹿らしい、といった顔で頬に当たた指を意味なく動かしているが、アメリカ人はノートを開くと、

「その気というのは、科学的に検証可能なものなのですか？」

「その言葉を受け取つて、

「西洋科学的な意味では、うまく検証出来ないのが残念ですが、これは経験則の一種で、中国ではおおいに活用し、成果も出ているのです」

「すると、あなたは中国的な五行といつものを信奉しているのですか？」

「ハハハ、いや、私も現代に生きていますから、現代物理学を修養して学問していますよ」

まるで、息子を見る父親のようにアメリカ人科学者に微笑んだ。

「まあ、中国的なおどぎ話しだね」

フランス人科学者がお可笑しくつてたまらない、といった風に頬杖をついて苦笑している。

「その・気・といふのは、何か具体性をもつて観察される事はあるのですか？」

アメリカ人の問いに、ゆっくりと頷くと、

「そちらにお立ち下さい」

机を少しずらしてスペースを作ると、20ほど間隔をもつて立たせ、

「いいですか」

呼吸を整え、気を集めるように手足を太極拳のよつに動かしていく。

ロシア、イギリス人科学者達も興味深げにその踊るような中国人科学者の手足を注視していたが、

「ハアーッ！」

と手を合わせ、勢い良く押し出すと、対面していたアメリカ人の体がポーンと後ろに飛ばされたのだ。

「オウツ！」

「ワーオ！」

「ハッハアーツ！」

見ていた者達から、驚嘆の声が上がった。

何らかの力で跳ね飛ばされ、驚き狼狽しているアメリカ人に手を差し伸べて助け起こしながら、

「いかがですか、これが・氣・というものなのです」

「ハハアー、驚きました！」

ズボンの尻に付いた埃をパタパタと手で払いながら、興奮した声で言った。

「面白いマジックですが、空氣砲の一種だと思われるが、タネを教えてもらえますかな？」

フランス人がニヤニヤしながらそう言つたが、中国人科学者は相手にしようとはしなかつた。

アメリカ人科学者は自分の席に着いても、体を手の平で探り、何が起きたのかを確認し、その力、中国の神秘・氣・について思考しているようだ。

三十二章 明日香を狙つて某国の特攻隊が研究所を・・・（前書き）

明日香を狙つて某国の特攻隊が研究所を襲つて来た・・・！

三十二章 明日香を狙つて某国の特攻隊が研究所を・・・

数人が廊下を走る靴音がして、ドアが開いた。レンジャー隊員達が入つて来て、敬礼をすると。

「失礼します！、緊急事態です、地下の倉庫に非難をお願いします！」

「何があつたんですか？」

椅子から立ち上がり、広瀬教授が聞くと、「東のゲートが、不審なトラックに突破されました、念の為非難をお願いします！」

「東のゲートつて、どこのです？」

林田の声もあわてている。

「5km先の第一ゲートです、」さうに向かつているようですが

国連の査察団にも通訳が事態を説明すると、サーッと緊張が走つた。あわてて立ち上がり、テキパキと非難していくと、あわただしく研究所の所員達がそれに続く。

非難する為にドアに向かいながら、イギリス人がアメリカ人に、「気がついたかい？」

どんな事を言われているのか探るような目付きでイギリス人を見返し、

「・・・発音かい？」

ニヤリと意味ありげに唇の端で笑うと、

「あのジャパニーズイングリッシュの発音がどんどんうまくなつてきただろう！」

「やつ、素晴らしい、明日香は成長している！」

「あなたも早く！」

以前に警備に来た事のある平川隊員が、一人残っている林田の腕をつかんで引っぱった。

「いや、俺は残る、責任があるんだ」

林田は決心していた、明日香を守る者が誰もいなくなつては、何があつた時に対応が出来ない。

「危険かもしだせんよ」

平川の目が、意思を確認するかのように見つめている。

「わかつていて、誰かが残つていなくちゃならんのだ！」

平川は腕時計を見て、

「第一ゲートを突破されたといつ連絡が入つて2分35秒立つてします、第2ゲートまではあと2、3分でしょ、そこでなんとか阻止出来るはずですから、待つてみましょ、うか」と安心させるように二二二二と笑つた。

「・・林田さん、何が起きているのですか？・・」

「誰かが、トラックで検問を破つてこちらに向かつて来ているらしい」

不安そうな明日香にそう応え、

「大丈夫だよ、レンジャー隊の人が守つているんだから」と、安心させるように付け加える。

「・・はい、・・」

明日香のカメラが、ジーツと林田を見つめている。

「いつたいどんな連中なんですか、K国のテロリストですか？」

「それについて判断する材料は、我々はまだ持つていませんし、メントする立場にもありません」

と、言った後で、

「たぶん、そのあたりでしょ」

と、独り言のよつにつぶやき、トランシーバーを手に取った。

「こちら、H R - 02、ポイントSA、状況を知らせよ！」

「不審なトラックは、第2ゲート500m手前で停止しました、現場付近を包囲中！」

その時、東の方向で何かが光ったように見え、花火を打ち上げた時のような音がし、すぐその後にバリバリバリバリと機関銃のよつな音がすると同時に、ドツン！ドツン！と窓の外で爆裂した。

窓枠がビリビリと震えている中で、林田は床に伏せた。

「こちら、H R - 02、ポイントSA、状況を知らせよ…」

平川の落ち着いた声が響く、

「トラックよりロケットランチャー2基発射、バルカン砲にて迎撃、破壊しました。ポイントEG - 2にて戦闘中、負傷者が出ているもうよう、救護班は現場に急行せよ！」

「2基だと？、あと何基あるんだ？」

「トラック上部の構造により、2基のみと思われます、鎮圧しつつあり、これ以上の攻撃は無いと思われる状況だが、第三警備体制に入れ！」

「ふう～、これで終わりですか？」

林田が頭を上げた。

「電気を消しても大丈夫ですか？」

「まだ、なんかあるんですか、スイッチはドアの側にありますか…」

「アーマライトM - 16ライフルに暗視スコープを装着すると、平川は素早く部屋の灯りを消した。

暗闇となつた部屋の奥に、積み上げるように配置された明日香のインジケーター類の光りが、まるで夜のビル群のよつにそびえている。

暗くなつた部屋の窓から、研究所の灯りが次々と消えていく様子が見えた。

「明日香の電気は落とせませんよね？」

「確認するように聞いてくる、

「それは・・・、問題があります。まだ危険があるんですか？」

「大丈夫だとは思いますが、念の為です」

「さつきは何だつたんです？」

「この研究所の庭の四隅に発泡スチロールの箱を設置していたでしょ、あの中にはバルカン砲が入つていて、監視レーダーと連動しています、それがロケットランチャーを迎撃し撃ち落としたという事です」

「じゃあ、ヘタをすれば、もう少しで死ぬとこだつたんじゃありませんか」

「敵も死ぬ覚悟で攻撃して来たんです！」

林田は、ロケット弾が飛んで来る様子を想像して、身震いをした。

「第2警戒区域、11時の区域に侵入者あり、戦闘中！」

「P4-3、P4-7、H3ポイントで戦闘中、急行せよ！」

平川のトランシーバーから、あわただしい交信が聞こえてきた。林田はゴクリと唾を飲む。

「第2波ですね、向こうの方向から侵入して来ています」

と、落ち着いた声で、北北西の方向を指差した。その時その方向の空が、フワーと明るくなつた、照明弾でも上がつたのだろうか。「どんな奴等なんですか？」

「おそらく向こうは、特殊訓練を受けた特攻隊でしょう」

K国の軍人なら、かなり過酷な訓練にも耐えてきた猛者だらうと、想像出来た。

「私はこれから屋上に上がりて監視します、明日香の管理をよろしくお願いします」

それは言われるまでもなくだつたが、

「はあ、 . . はい」

心細くなつて、小さな声で答へが、平川は早足で部屋を出て行つた。

こんな状況の時には、武装して戦闘可能な人間が傍にいる」とは心強いのだが、これからは明日香と二人きりだ。

「明日香、何か分かるか？」

「・・何がですか？・・」

「いや、今の状況がね・・・」

「・・こんなに暗いの、初めてですね・・・」

かすかにカメラのレンズが動いているのが分かる。

カツカツと足音が戻つて来た、平川の足音だ。

「林田さん、これを置いて置きます」

懐中電灯の明りの中に、短機関銃MP6が置かれた。

「銃を撃つた経験はありますか？」

「クレー射撃ならやっていますが

「それは良かつた」

窓際に林田を連れていいくと、MP6を持たせ、

「これが安全装置です、これを下に下げ、このレバーを引きます」

力チャツ、力チャツと金属的な音が響く。

「これで弾が装填されました、いいですか」

そう言って、懐中電灯の細い光りで庭の一点を照らし、

「あそこを撃つて見て下さい」

右の脇腹にアルミ製の銃床を押し付けながら、引き金を引くと、

あつけないほど簡単に銃口から弾がタツタツタツと飛び出した。

思ったより小さな音だが、ライトに照らし出された付近の土が跳ねたのが分かつた。

「もう一度やつてみて下さー」

平川の真剣な声が命令するよつに言った。

再び引き金に力を入れると、タツタツタツと連射する。反動も小さいのだが、力の入つている指にはかなりの衝撃に感じてしまう。

「もう少し、軽く握る感じでいいです」

平川のアドバイスが続いた、

「どうしてこんな事を？」

平川は、新しい弾倉を装着すると、

「今、あそこで戦闘していますね、でも、奴等の目的は戦闘ではないんです、戦争をしているわけじゃないんですから。圧倒的にこちらが有利なのに、戦闘を続けている理由は、別動隊がいて、その援護の為ではないかと、考えられます」

「はあ、なるほど！」

「敵が、どんな動きをしてくるか分からなくなつたので、万が一の為、これをここに置いていきます、民間人に銃器を渡す事は許されていないので」

そう言つて、平川が一ヤツと笑つたようだつた。

平川の靴音が屋上へ上がる階段の奥に消えると、暗闇の中で急にまた心細さに包まれる。

ほんのりと明るい明日香の傍に寄ると、MP-6を引き寄せ安全装置を下げて、レバーを引いて弾を装填する。

明日香が怪訝そうに、

「・・何をしているのですか？・・」

「うん・・・！」

こんな事を明日香に話してもいいのだろうか？

「これは機関銃といつて、人間が戦う時に使う最近の武器だな」

「・・はい、これですか？・・」

明日香がそう言つたので、モニターの電源を入れ、微かに画面が映るくらいに輝度を落として確認すると、マシンガンの構造図が映

し出されていた。

「うん、それだよ、命のやり取りになる危険な武器を」と言った自分の言葉に、ゾーと恐怖を覚えた。

北北西の方向の窓からは、時折ボーッと明るくなったりタタッタといった銃器らしい音が聞こえてくる。

今、あそこでK国の特殊部隊とレンジャー隊員が本物の戦闘をしているのだ。

ウソだろ？、本当かよ・・・。

ここは大丈夫なのだろうか、またロケット弾が飛んで来ても、またうまくバルカン砲で破壊出来るのだろうか、もしロケット弾がここに命中したら、明日香ともども木つ破微塵だ、ええい、しょうがないか、乗りかかった船だ。

そういうば、女房と子供にも何か言って置きたかったな、ええと、何を言いたいんだ、俺は、今まで、ありがとう、かな？

子供達を頼む・・かな、俺が死んだら・・きっと泣くだろうな、初めて俺のありがたさが分かるのかな？

子供達には何て言おうか・・お前達の事が大好きだよ、子供達に教える事がまだまだあるけどな・・

「ねえ、誰かいる？」

林田はビクツと飛び上がった！

北研究員の声だと気付くのに、少し時間がかかった。

「ああ、いるよ、ここだ！」

明日香のインジケーターのほのかな明るさの中で、ゆっくりと頭を上げた。

「どうして、ここに来たんだ？」

咎めるような口調で言つと、

「うん、どうしても心配なんだもの」

「危ないぞ！」

暗くて北の表情はよく分からぬが、案外落ち着いた声で、
「あそこで戦闘しているの？」

首を伸ばして、北の方の窓を見た。

「怖いわね……ここは大丈夫なの？」

「大丈夫だろう、自衛隊だつて頑張っているんだから」

「林田さんも戦うの？」

手に持つてゐる軽機関銃に目を止めていた。
「敵がここまで来たら……」

第三十四章 戦いの後、（前書き）

敵の銃弾が明日香に向かって連射された！

第三十四章 戦いの後、

窓の外では、救護班の車が赤いライトを点滅させながら戦闘地域での負傷者を救助する為に庭を走り回り、自衛隊員達が新しい警備体制で防御を固めようと、所定の現場へと走っていく。

「K国の侵入者なの？」

「ううん、それはまだ分からぬけど、他にこの研究所を攻撃して来る連中なんて、想像出来るかい？」

国内のテロ集団なら、自分等の行動を世間にアピールするのが目的だから、こんなにしつこく攻撃を続けたりはしないだろうしなあ

」

話しているうちに、少しほは気が落ち着いてきた。

「怖い？」

北は明日香を氣づかうように声をかける。

「・・怖い、恐怖ですか、よくわからないの？・・

「そうか、そうよね、大丈夫よ・・きっと

安心させるようなしつかりとして優しい声だ。

窓の下から黒い人影がスーと上がつて来たのを林田は見ていた、その人影の腕が動いた瞬間、窓ガラスを撃ち抜いた弾丸が夜のビル群のような明日香を連射して撃ち抜いていた。

悲鳴を上げる間もなく、鋭く狂暴な弾丸に破壊されたコンピューターの部品が反対側の空中にバラバラと細かい破片になつて飛散した。

林田はその黒い人影に向かつてウオー！と叫びながら、MP6の引き金を引き続け、敵に弾を撃ち込んだが、黒い影から声は出で

いなかつた。

敵の体を撃ち抜いている感触はある。

その人影がゆっくりと倒れていきながら、丶字サインをした腕を高く掲げたのは、任務を遂行した誇りなのか。

倒れた人影の後ろに、もう一人いたのに気付いた時には、林田は射撃され、右側頭部を撃ち抜かれていた。

耳が、吹き飛ばされた！…明日香は？…

衝撃の痛みの中で、意識が冷たくなつて下に落ちていく、北研究員が泣くような声で、明日香を呼び続いているのが聞こえていた。

誰かが頭を触っている。

研究室の灯りはもうついて、明るくなつていた。

「大丈夫ですよ」

元気づけるような平川の声だった。

そして続けて、

「申しわけありません！」

無念そうな声を聞いて、事態の予測がついた。

「最悪だ…、どうしよう…、どうすりやいいんだ？」

むなしさと怒りが胸の中に膨れあがつてくる。

林田の頭を支えているのは、自衛隊の救護班だった。

「どうなんですか？」

振り返りぎみに聞くと、

「耳がちぎれかかっていますから、あまり手荒に触らないで下さい、あと頭の肉が吹っ飛ばされていますから、禿げるかもしれないなー」

その救護班の口調からして、命に別状はなさそうだ。

痛みがそれほど無いのは、患部付近の神経が吹っ飛ばされてしまつたせいなのか。

広瀬教授が安心したように、包帯でグルグル巻にされている林田に、

「運が良かつたな、もう少し中へ入ついたら即死だつたから . . .

「 . . . 明日香は？」

「 . . .

黙つたままで残念そうに頭を振つた。

ポンポンと肩を叩くと、銃撃されて破壊された明日香の側で、被害固所のメモを取り始めた。

明日香を構成しているコンピューター群の中に入った園山が、蓋を開けて被害状況を調べている。

「14号、ハードディスクと配線部分が損傷、15号は貫通しているだけで、中の被害は無さそうです、16号、マザーボードが破壊されています」

次々と報告を続ける園山が、時おり何かを我慢しながら田を拭つてゐる。

北研究員の話によると、林田を撃つた男は、すぐその後に上から銃撃されて倒れたそうだ。

おそらく平川隊員が屋上から撃つてくれたものだろう。

明日香を襲つてきたK国の特殊工作員の二人が運ばれていくところを見たら、自衛隊員の制服を着ていたそうである。
たぶん、あの銃撃戦があつた頃に、紛れて侵入して来たのに違いない。

どうすれば、あの一人の攻撃を防げたのか？

明日香が攻撃されて破壊された事は、すぐにニュースで世界に発信された。

日本政府の落胆の色は濃く、マスコミは政府と自衛隊の責任追及の火の手を上げて、連日、識者の談話を載せて、明日香が未来の社会にいかに大きな貢献していたかの可能性について、多方面から検討し、残念がつてゐる。

K国は関与を全面的に否定しながらも、放送では明日香に触れて、

- ・ 未来の平和を脅かす、新兵器開発の中心頭脳だった明日香が破壊されたのは、帝国主義的野望が世界に拡大する事を阻止しようという正義の戦士達の意思であり、その勇気と力は世界人民に平和をもたらすものである！。

日本の軍国主義的野望を打ち碎き、世界支配に抵抗する人民の高貴な意思と理想は、これからも不屈の意思を持つて受け継がれるものである！・・・

と、高らかに演説していた。

風に秋の匂いが乗つてきたように感じる夕暮れ、すじ雲が黄金色の空に白く浮かんでゐる。

特別警戒体制も解かれ、以前の研究生活が戻つて來た。

園山は明日香の壊れた部品を交換する事に忙殺されている。

「明日香は戻つてくるんだろうか？」

林田の頭には、まだ白い包帯が巻かれたままだ。

「どうかな～、期待はしてるけど、かなりリメチャクチャにやられてしまつたからな～・・・

園山の問いかに答えながら、もし、明日香が回復しなかつた時に備

えて、気落ちしないようにそつ考へる事にしていた。

あの可愛い明日香の声を聞きながら、人間についていろいろ話したい希望も持つてゐるのだ。

明日香、戻つて来いよ、お前の大好きな園山が、毎日徹夜で修理してきたんだからな！」。

電話を受けている北研究員の声が、興奮し始めていた。

「筑 大学で人工頭脳の再現に成功したそうです！」

報告する北の声は、嬉しさで弾んでいるようだ。

「その他の大学でも、次々と再現しているそつです！」

「わあ！、明日香か？」

林田は興奮し始めた自分を抑えるように、コーヒーを入れて、震える手で机の上に置き、タバコに火をつけようとすると、なかなか火がつかない。

嬉しさで、ワワーー！と叫びたいのをこらえ、落ち着け、落ち着けと自分に言い聞かせる。

明日香と同じ構造の人工頭脳だとしても、それが明日香と同じであるかは、まだ分からぬのだ。

それに、再現性が確認されたとしても、初期の頃のように、まだ幼児のような知性が生まれた事が確認出来たくらいの事だらう。

ただ、明日香がなんとか意識を取り戻す事が出来れば、子供といふか仲間が増えて、話し相手になつたり、教育する事も出来るな。

さつきまでの空しいような気分が、今は再び夢が広がつていいくような、わくわくした気持ちになつてゐる。

北の報告を聞いた広瀬教授も興奮してやつて來た。

「おめでとうござります、教授！」

「やあ、やつたね！、みんな、ありがとつ、やつとこれで学問としてのスタートが出来そうだよ！ありがとうー、本当にありがとうー。これから多方面から人工頭脳の研究が進むだろう事に期待を寄せる教授の喜びが、素直に伝わつてくる。

園山は複雑な笑みを浮かべて、再び明日香の修理に取りかかっていく。

「筑 大学等で生まれた人工頭脳は、明日香と同じなんですか？」

林田の問いに、机に座り直した教授はしばらく考えて、

「これは仮説として聞いてくれたまえ、

明日香の心は、磁界、磁場によつて造られたと思えるのだが、だから、園山君が三次元レーザーで作ったマップで精密に同じ構造の物を造らねば、人工頭脳は再現しなかつた。

明日香について考えられるのは、彼女の心、この場合磁場だが、この並列処理する為の複雑で乱雑な配線の磁場が複雑な磁場の干渉で影響し合い、たまたま偶然に人間の脳の磁場と同じような機能を発生させて、長いことをかけて彼女の潜在意識を造つてきたのではないか？

また、明日香が自分用のデーターを蓄積していたけれど、あれはプログラム的には意味は無いが、回路に流して磁場を発生させ続ける為に使つていたのじゃあないかな？

心がデジタルな神経系の反応、伝達、処理というだけでは割り切れない、不思議に空間感を持つてているのは、この磁場の空間の感覚なのかもしぬないという説があるのは、君も知つてゐるだろう。

人間が人工頭脳を造りえなかつたのは、潜在意識を造ることが出来なかつたからではないか、人間が自分の潜在意識を知る事は人格破壊につながるから、永遠に潜在意識を知識化してプログラムする事は不可能なのだ。

明日香は偶然に心を持つようになつたが、明日香自身がなぜ自分が生まれたか説明出来なかつたろう、だがそれは心を持つ生命にとって健全な事だつたと思うのだよ。

今再現されている人工頭脳達も、この5ヶ月という期間を潜在意識を育て造るという作業無しには生まれて来なかつたのだろう。

我々が心を持つ人工頭脳を造つたのではない、生まれる環境を整え、このコンピューターの間から自然に生まれて来るのを手伝つたに過ぎないのだ。

逆に、明日香は人間が心を人工的に造ることは無理だと証明してしまつたとも言える。」

教授は仮説と言ひながら、その言い方には確信が溢れていた。

「それでは、今、筑 大学等で生まれている人工頭脳は、明日香とは違つという事ですか？」

「人間だつて、ほとんど同じ様な脳細胞の構造なのに、これだけ個性が違つて産まれてくるんだ、新しく生まれた人工頭脳達も、それ違つた個性を持つてゐるだろ」と予測するほうが多いのではないかな？」

「はい・・・やはり、明日香は明日香であつたわけですね・・・」

林田は必死に修理して、なんとか再生させようとしている園山に、心の底からエールを送つた。

林田は研究所の庭の草の上に寝転んで北の空を見上げた。

抜けようかな蒼空に無数の星がまたたいている。

「そう言えば、地球にも磁場があつたな！」

地球を母の手のように優しく包んで広がる磁場の様子を想像したら、何か熱いものが胸の奥から突き上ってきた。

地球の想い、
地球の意思、

そんな物があるのだろうか？

極北の空で、輝きながら大きく舞い踊る優しいオーロラは、地球の心のふるえなのだろうか、

林田は夜空一杯に広がつてゆらめくオーロラを見たくなつていて

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2968m/>

20XX年 人工頭脳

2011年2月20日19時46分発行